フロイド原著

安田徳太郎譯

藝術と精神分析

昭和四年

ロゴス書院刊

聖アンナ　　レオナルド・ダ・ヸンチ

フロイド原著
安田徳太郎譯

藝術と精神分析

東京・本郷
ロゴス書院
昭和四年版

譯序

本書はフロイドの「レオナルド・ダ・ヸンチの小兒期回想」と「ヸルヘルム・エンセン作グラヂワに於ける妄想と夢」を「フロイド全集第九卷」によつて譯出したものである。さきの「精神分析入門」に興味を懷かれた讀者諸君に、さらに應用に屬すべき藝術家及び藝術作品の分析の外觀を示したい希望の下に、私は本書の飜譯を企てた。二つながら精神分析の骨子を最も廣く一般社會に普及宣傳せしめた名著である。

「精神分析入門」飜譯後私は新しい次の段階にはひつてゐた。引續いてフロイド本に執著するのは、私自らの發展の停止あるひは退行を意味する。だが一つの未練が私を喰ひとめた。青年時代の一期に私はレオナルドの藝術と科學に憧れ、彼の「フラメンチ」に親しく接しようとの熱望に驅られて伊太利語を勉學した。その餘韻が現在の私にかすかにうごめいて、私をして

一氣呵成にさらにフロイドの二つの著書を飜譯せしむるに到つた。然しながら、過去の若若しい熱望、藝術への憧憬は現在の私には存してゐない。藝術に對して私はただ微笑を浮べるのみである。

一九二九年五月

安田德太郎

藝術と精神分析　目次

レオナルド・ダ・丼ンチの精神分析

一

薄弱な人間資料をもつて常に足れりとする精神分析研究が、人類の生んだある偉人に肉迫する時に、素人がしばしば研究上の動機とする、同じ動機に驅られてそれを行ふのでない。精神分析研究は「輝くものを暗くし、聳えたものをひきおろす」を目的としない。偉人が一方に於て完璧を示しながら、他方凡庸なことさへ出來なかつたといふ、兩極端に横たはる溝をうづめてもつて快としない。いや。精神分析研究はかかる典型的人物が示して吳れた一切を、照魔鏡にかける以外何事も出來ないのだ。そして、正常な行爲と異常な行爲を、同一の嚴格さで支配する鐵則に屈服さすことは、偉人にとつて大なる恥辱であらうとは信ぜられない。

伊太利の文藝復興期の偉人の一人としてのレオナルド・ダ・ヸンチ（一四五二年――一五一九

年）は、早くも當時の人達に驚嘆された。然も彼の姿は既に當時の人達の目にも謎と見え、今日われわれの目にも不可解に思はれる。あらゆる方面に於ける天才、「この人の輪郭は測り知ることが出來ない――僅に想像することが出來るのみだ。」彼は畫家としてその時代に最高權威の感化を垂れた。今日私達には藝術家に結びついてゐる彼の自然科學者（及び工學者）としての偉大を認めることが殘されてゐる。彼の繪畫上の傑作は後世に遺されたが、彼の科學上の發見は未發表のまま全然評價されない。とはいへ、彼の全生涯に於て、科學者としての彼が藝術家としての彼をしばりつけ、幾度も藝術家を侵害し、最後に藝術家としての彼をおしこめてしまつた。臨終に際してレオナルドが、俺は神と人間を侮辱した、俺は自分の藝術に就いて果すべき義務を果さなかつたと自責する言葉をワサリは記してゐる。たとへワサリのこの話が外面的にもさらに內面的にも、大した眞實味を有してゐなくて、この話が晩年に於て早くもこの神祕な大家をめぐつて飾り始められた逸話に屬してゐようとも、この話はかやうな人物、かやうな時代の批評に對する生きた證據として十分な價値を有してゐる。

ではレオナルドの人物が時代の人の理解にとどかなかつたのは一體何であつたか。ミラノの

大公、黒奴（イル・モロ）と渾名されたロドヸコ・スフォルツァの宮廷に、新しく發明した樂器の彈奏家として招待を受けしめた、あるひは土木技師としての兵器技師としての彼の才能を發揮した驚くべき手紙を大公にしたためしめた、彼の天稟と彼の知識の多藝によるのではない。一個の人間に多方面な才能がこのやうに融合してゐることは、文藝復興の時代にはさして驚くべきことでなかつた。尤もレオナルドはさういふ實例のうち最も光つてゐた一人であつた。さらにレオナルドは、生れつき風采が揚らなく、生活の外觀を蔑視し、彼の情緒の悲痛な憂鬱の中に、人間との交渉を一切たちきつたといふ天才型にも屬してゐなかつた。彼は背高く、均整した體格であり、顔貌もきはめて美しく、體力は人並以上であり、起居振舞には魅惑があり、雄辯の大家であり、すべての人に對して快活であり愛想がよかつた。彼は身まはりの調度に就いてさへ美を愛し、派手な衣服を好んでまとひ、生活の纖細を尊んだ。その『繪畫論』の中に彼の派手な享樂欲を示す一節がある。そこで彼は繪畫を妹の藝術に比較して、彫刻家の仕事の苦痛を次のやうに敍してゐる。「彼の顔はすつくり汚れ大理石の粉がふりかかり、まるで麵麭屋のやうに見える。大理石のこまかい破片に次から次へと掩はれて、背中はまるで雪が積つたやうである。

そしてその住宅は石屑や塵埃で一杯だ。ところが畫家の場合はすべてが正反對である。――畫家はいい着物をつけて作品の前に悠然とすはり、氣持のよい繪具をつけて輕い筆を走らす。自分の氣に入る衣服をまとふ。そしてその住宅は晴れやかな畫で一杯になり、光るほど淸められてゐる。彼はしばしば社交を樂しみ、音樂を聞き、いろんな美しい作品の朗讀を聞く。それは鑿の音その他の雜音に亂されずに非常に愉快に傾聽される。」

輝くやうに派手な享樂に滿ち溢れたレオナルドの觀念は、この巨匠の初期の長い時代にのみあてはまると言へる。ロドヰコ・モロの勢力が衰頽したために、彼は餘儀なくミラノ、彼の活動場裡及び彼の安定した地位を去り、佛蘭西に於ける晩年の遁世まで、不安定な、世間的にあまり惠まれない生活を送るやうになつて以來、彼の情緖の光彩は褪め、彼の性格にひそむ奇怪な姿のかずかずが强くおもてに滲み出て來た。彼の興味が藝術から科學に年と共に轉向して行つたことも、彼の人物と彼の時代の隔りをますます深める誘因をなしてゐたに違ひない。例へば昔の同僚ペルジノオのやうに、勤勉に注文の繪に應じて金錢を貯蓄するといふこともせずに、レオナルドが世評によれば、貴重な時間をくだらぬことに浪費したといふ彼のすべての實

驗は、時代の人の目に氣まぐれな遊びに見え、「魔術」を行つてゐるといふ疑惑をさへ懷かしめた。彼がいかなる魔術を行つたかをそのスケッチから知るわれわれは、彼をさらに深く理解してゐることになる。教會の權威が古代の權威におきかへられ始め、前提のない研究が未だ知られてゐない時代にあつて、先驅者とし、ベエコンやコペルニクスと遜色のない競争者として、彼レオナルドは必然孤獨に陷らねばならなかつた。馬や人間の屍を解剖し、飛行器を製作し、植物の營養や毒素に對する植物の反應を研究した時に、當然彼はアリストテレスの註釋者から離反して、この險惡な時代の直中に、實驗的研究を僅に實驗室內で隱密に行つたあの異端視された錬金家に近接して行つた。

この轉向は當然彼の繪畫にも及んで行く。彼は繪筆を手にすることに興味を失ひ、しだいしだいに繪を書くことが稀になり、しかけた仕事は未完成のまま棄てられ、自分の繪畫の來るべき運命を殆ど心に留めなくなつた。時代の人達が彼を非難したのはまたここにある。藝術に對する彼の關心は時代の人の目に謎と映じた。

後世のレオナルド崇拜家はこの未完成といふ缺點を、レオナルドの性格から拭はうときばつ

た。世人がレオナルドに關して非難するものは凡そ偉大なる藝術家が共有すべき特質であると主張する。精力に滿ち溢れ仕事に嚙みついたと言はれるミケル・アンジエロでさへその作品の多くを未完成のまま棄ててしまつた。それだのにレオナルドのやうに彼の方はあまり非難を受けてゐない。勿論レオナルドの繪畫は彼が公言する程未完成でなかつた。素人の目に傑作と見えても、藝術品の創作者にとつては、その作品は常に不滿であり自らの意圖を十二分に滿たし得たものとは思はれない。彼が繪畫の中に再現しようとして常に絕望する、完全なる姿が彼の心眼に映じてくる。併し少くとも藝術家たるものは彼の作品がめぐりあふ最後の運命に對して自ら責任を負はなくてはならぬ。

以上のやうな辯解の多數がたとへ間違つてゐなくても、それ等は私達がレオナルドに於て遭遇する全實相を說明し盡してゐない。作品に對する血みどろの苦悶、作品よりの最後の逃避、作品の將來の運命に對する無關心は、他の多數の藝術家に於ても見い出されるが、かかる態度をレオナルドは確に最も强く示したのである。ソルミは彼の門弟の一人の言葉を引用してゐる。「藝術の偉大を沈思して、他人の目に驚異と見えるものの中に誤謬を發見した彼は、繪畫

を手にする時は常に戰慄し、着手した作品を未だ嘗て完成することが出來なかつたかのやうに見える。」彼の最後の繪畫、レダ、聖オノフリオの聖母、バツカス、サン・ジオバンニ・バツチスタ・ジオバネは未完成のまま遺された。「彼の作品のすべてが恰も干渉でもされたやうに……。」聖餐を模寫したロマツゾは、繪畫を完璧にまでしあげないレオナルドの無能をソネツで唄つた。

Protogen che il penel di sue pitture
Non levava, agguaglio il Vinci Divo,
Di cui opra non è finita pure.(*)

(*) 神ギンチは嘗て繪筆を手にしなかつたプロトジエンを髣髴とさす。彼の作品のうち本當に完成されたものは一枚もない。

レオナルドが創作に於ける遲筆は有名である。ミラノのサンタ・マリア・デレ・グラチエの僧院に描いた聖餐のために、彼は三年間をその準備に費した。同時代の小說家であり、當時その僧院の若い僧侶であつたマツテオ・バンデリは、レオナルドが屢屢拂曉早くも足場に登り、

食事も忘れ果てて、夕方になつても繪筆を離さなかつたと傳へてゐる。それから一筆も加へずに數日を過ごす。ある時は數時間も繪の前に立ち續け、私かに頷いて滿足してゐる。ある時はフランチエスコ・スフォルツァのために乘馬像のモデルを作つたミラノ城の宮廷から眞直に僧院に駈けつけ、畫上の姿に一筆をつけたさうとして、躊躇しながら中止してしまふ。フイレンチエのフランチエスコ・デル・ジオコンドの妻、モンナ・リサの肖像畫にワサリの話によると四年の歲月を費し、然も最後の完成を見ずに終つた。この事情はレオナルドがこの肖像畫を注文主に手渡さずに、自分の手許に仕舞ひこんで佛蘭西迄持つて行つたといふ實相と合つてゐる。そしてこの繪はフランソワ一世に購入されて、今日ではルウヴルの最大の國寶となつてゐる。

レオナルドの製作のしかたに關するこの報告を、彼の繪畫上に描出された多種の動機を最もさまざまに變へてゐる、驚くほど多數のスケッチや覺帳の示す證據と對比するなら、氣まぐれ移り氣といふ性質が藝術に對するレオナルドの關心に全然影響しなかつたといふ考へを棄てねばならなくなる。正反對に、人は藝道への驚くべき精進を見、可能の豐富を見る。といへ、この可能の中に斷行がおどおどした姿を見せてゐる。殆ど滿し盡されないほどの要求を見る。と

い〜、彼の理想への目的の背面にひそむ藝術家の必然的な引込み思案をもつて說明出來ぬほどの實行への抑制を見る。初期の時代から旣に製作の上に目立つたレオナルドの遲鈍は、この抑制の徵候であり、後年に現れたあの繪畫よりの逃避の先驅であることが分かる。この遲鈍はまた聖餐の當然の運命を決定したものであつた。レオナルドは壁が未だ乾き切らないうちに手早く仕事を仕上げねばならぬフレスコを喜ぶことが出來なかつた。このゆゑに彼は油繪を好んだ。油繪なら繪具が乾いても氣分と餘暇にまかして繪の完成をひきのばすことが出來る。併し繪具は塗りつけた下地から溶け、下地は繪具を壁から離してしまつた。この壁の缺點と部屋の運命が描かれた繪畫の避け難い破損の原因をなしてゐるやうに思はれる。

同一な技術上の試みの失敗のために、彼が後期にミケル・アンジエロと競爭して、フイレンチエのサラ・デル・コンシリオの壁に書き始め、未完成のまま放棄したアンギアリの馬上合戰の繪も毀れてしまつた。恰も特異な興味、實驗者の特異な興味がまづ第一に藝術的興味を喰り、結局藝術品を毒したやうに見える。

レオナルドといふ人物の性格はなほ他の多くの異常な特徵と外觀上の矛盾を示してゐた。あ

る因循と無關心が彼に著明に現れてゐる。個人なるものが最も廣い活動場裡を獲得しようと奮進し、その獲得は他人への力强い攻擊の發展なしに成就し得なかつた時代の渦卷のうちに、レオナルドは靜かな平和、すべての競爭や論爭の忌避によつて人人を驚かした。彼は萬人に對してしとやかであり親切であつた。動物の生命を絕つのは正義にもどるといふ考へから、彼は肉食を避けたと傳へられてゐる。そして市場で買ひ求めた鳥を放すのに特殊の興味を感じた。彼は戰爭と流血を批難し、人類は動物界の靈長でなくて、野獸中の最も極惡なるものとよんだ。然もこの女性的な感情のやさしさも、死刑囚が絞首臺に護送されて行く行列について、恐怖に歪められた囚人の表情を研究し、スケッチ・ブックにそれを寫生することを禁じなかつた。最も殘虐な兵器を工夫し、最高の兵器技師としてチエサレ・ボルジアの幕下に參ずるのを禁じなかつた。彼はしばしば善惡に對して無關心のやうに見えた。言ひかへれば特別な尺度で測られんことを希望してゐた。彼は敵國のうち最も狂暴な最も不信なもののためにロマナを占領した、チエサレの軍隊の最高幹部を占めてゐた。レオナルドのスケッチの一線といへども當時の世上の事件に對しては批判も興味も示してゐなかつた。この點に於て佛蘭西戰役中のゲエテと

の比較は全然斥けることが出來ぬ。

傳記的試みによつてその偉人の精神生活の理解に眞に突入しようと思へば、大抵の傳記に於て、遠慮とか謹嚴の動機からなされるやうな、偉人の性活動、性的本質に關して口を緘するやうな眞似をしてはいけない。この方面に關してレオナルドに就いて知られてゐるものは少數であるが、この少數こそ意義深いものといへる。放肆な肉慾と憂鬱な禁慾があひ闘つた時代に於て、レオナルドは冷やかな絶對禁慾の實例であつた。この禁慾は女性美の藝術家と畫家には豫想の出來ぬものである。ソルミはレオナルドの不感症を示す彼の言葉を引用してゐる。「生殖行爲及びそれに關聯する一切は誠に穢しいものである。それが因襲の慣習でなかつたなら、麗しい顏と官能的素質が存してゐなかつたなら、人類は忽ち滅亡してしまつたであらう。」最高の科學上の問題を取扱つたばかりでなく、これほどの偉大な精神に似つかはしくないやうに思はれるたわいもないこと（譬喩的博物學、動物寓話、駄洒落）をも書きとめてある彼の遺稿は、美文學の作品として今日に於ても驚異に價するまでに純潔であり――禁慾的である、と言つてもよい程である。この遺稿は性に關する一切を斷然回避してゐる。恰も生きとし生ける一

切を含むエロスのみは、この科學者の知識欲には一文の價値もないやうに見えてゐた。偉大なる藝術家が空想をエロチックな底拔けの猥褻描寫に惑溺さすことにいかに興味を持つてゐるかは人の知るところである。これに反して私達はレオナルドから女子の內生殖器、子宮內の胎兒の位置等に關する僅に二、三の解剖學的スケッチを所持してゐるばかしである。

レオナルドに果して戀愛の中に婦人を抱擁した經驗があるかどうかは疑はしい。ミケル・アンジエロとギットリア・コロンナの關係のやうに、ある婦人と精神上の戀愛關係があつたかも何等知るところがない。學生時代師匠ヹロッキオの家に寄宿してゐた頃に、他の青年達と一緒に禁制の男色關係のために告訴され、遂ひに師匠の家から破門を受けた。彼はモデルに名代の不良少年を雇つたために、同性愛者の嫌疑を蒙つたやうに思はれる。師匠になつてから彼は弟子入させた美しい少年や青年を身のまはりに侍らせた。かういふ弟子の最後のものなるフランチエスコ・メルヂは佛蘭西迄レオナルドについて行き、臨終まで彼と居住を共にし彼から相續人とされた。彼とその弟子との間の性關係の可能を、偉人に對する絕大の侮辱として排擊するレオナルドの近代の傳記者の確證に荷擔しなくとも、その當時の書生氣質から考へれば師匠と

生活を共にする青年に對するレオナルドの愛情關係が、決して性的實行にまで走らなかつたことは可なり信を置いてもよい。或は彼にも性活動の高い標準を置く必要がなかつたかも知れぬ。

この感情生活と性生活の特質を、藝術家としての、また科學者としてのレオナルドの二重性格との關係の立場に立つて、私達はたつた一つの道を通つて理解出來ると思ふ。心理學的觀點から遠ざかるのを常とする傳記者のうち、私の知つてゐる範圍で僅に一人ソルミだけがこの謎の氷解に近接してゐた。併しレオナルドを歴史小説の主人公に選んだ詩人ドミトリ・セルゲギツチユ・メレシユカウスキイは、この異常人のかやうな理解を土臺としてその描寫を進め、勿論乾燥した筆致ではないが、詩人流に彫塑的の表現をもつて如實に我等に物語つて呉れた。ソルミはレオナルドをかう評してゐる。「自分の周圍の一切のものを認識し、冷靜な卓觀をもつて、完全な一切のものの深い祕密を測らうとする、やむにやまれぬ熱望は、レオナルドの藝術品を常に未完成のままに放棄さすやうに墮せしめた。」コンフエレンチエ・フイオレンチンの論文の中に彼の信念の告白と彼の本質への鍵を與へるレオナルドの言葉「Nessuna cosa si può amare nè odiare, se prima non si ha cognition di quella.」(それの本質の根本的な認識を贏

ち得なかつたなら、人は何ものかを愛し、何ものかを憎む權利を有してゐない。」が引用されてゐる。そして同一の言葉をレオナルドは無宗教の誹謗を辯護したと思はれる繪畫論のある箇所で反復してゐる。「だがかかる非難に對しては沈默を守つてゐる方がよい。何となれば、あの行爲はかくまで多數の驚歎すべき萬象の創造主を知る方法であり、この行爲はかくまで偉大なる發明主を愛する道である。何となれば、誠に偉大なる愛は愛する對象への大なる認識から發するからである。若しこの對象に就いて知ることが少なければ、諸君はそれを僅ばかし愛するかあるひは絕對に愛することが出來ない。」

レオナルドのこの言葉の有する價値は、それが重要なる心理學的事實を語つてゐるところに存してゐない。この言葉の主張するものは、明白に間違つてゐるからである。そしてレオナルドもまた私達と同じにその間違ひを知つてゐる筈である。人間は情緒に價する對象を研究し、その本質を認識するまで、愛すること若くは憎むことを控へ得るものでない。むしろ人間は認識と何の關係もない感情動機に驅られて衝動的に愛するのである。そしてその感情力は自覺により反省によつて全然抑へつけられるものでない。人間が實踐する愛は正しいもの純眞なもの

といへない。人間は情緒を制御し情緒を思惟の作用下に克服せしめ、思惟の試驗に通過して後初めて情緒を釋放せしむるやうに愛さねばならぬ。レオナルドは僅にかう意味することが出來た。自分にあつてもさうである。若し愛と憎しみを自分と同じやうに取扱ふなら、それは萬人にとつても追求に値すべきものであると彼が言ひたかつたと私達はその言葉を解するのである

そして實際彼の場合はさうであつたやうに思はれる。彼の情緒は制御され研究心によつて克服された。彼は愛することも憎むことも出來なかつた。彼はただ自分が愛するもの、あるひは自分が憎むものがどこから來たか、それが何を意味するかを尋ねることが出來た。この故に彼は善と惡に對し、美と醜に對して無關心に見えた。この研究中に愛と憎しみはそれの前兆をぬいで、平等に知的興味に轉化されてしまつた。事實レオナルドは決して情熱を缺いてゐる人でない。彼は直接または間接に一切の人間行爲の衝動力——il primo motore——である靈感を缺いてゐなかつた。彼は情熱を知識欲にのみ轉化さした。彼は今や情熱から流れ出るあの忍耐、確實、深奥でもつて研究に熱中し、その精神的仕事の高潮にあつて、認識を獲得して初めて、長くひきとどめた情緒を釋放し、恰も工事が完成するやとどめた河を放つやうにどつと奔流せ

しめた。彼が因果律の大きな部分を瞰下出來る認識の絶頂に立つた時に感激が我が身を襲ひ、狂熱した言葉で彼が研究した創造物のかの部分の偉大、あるひは——宗教の衣裳をまとつて——その造物主の偉大を讃美した。ソルミは轉化のこの過程をレオナルドに於て正しく看取したレオナルドが自然の莊嚴な必然性(O mirabile necessita……おお驚くべき必然性……)を讃へたかかる文句を引用した後ソルミはかう述べてゐる、「科學の、自然の情緒への、言ひ換へれば宗教へのかやうな轉向はギンチの手記に固有な特徵の一つである。そして我等は幾百回ともなくその表現を發見する。」

世人は彼の飽くなき撓みなき研究欲をもつて、レオナルドを伊太利のファウストになぞらへた。ファウスト悲劇の前提と假定すべき、研究欲の生活享樂への還元の可能に對する一切の疑念を離れても、レオナルドのこの展開の道はスピノサ風の歩みを想起せしむると私達は敢て主張したいのである。

精神衝動力の活動の種種な形態への轉化は、物理學上の力の轉化と同じやうに、その轉化の道中で殆ど何等の損失なしに行はれ得るものでない。レオナルドの實例は他種のいかに多數の

ものをこの過程の下に追求すべきかを教示する。認識した後初めて愛するといふ猶豫には一つの補償が必要である。認識に透徹した時は、最早眞實に愛することも憎むことも出來ない。人は愛と憎しみの彼岸にある。愛する代りに研究したのだ。この故にレオナルドの生涯は他の偉人や他の藝術家に比して、甚しく愛に惠まれなかつたのである。他人がその絕大のものを體驗する、かの魂をゆりうごかし魂をやきつくす、嵐の如き情熱に彼は未だ嘗て遭遇しなかつたやうに思はれる。

そしてさらに別の結果が現れてくる。行動し、創作する代りに、また研究したのだ。宇宙の因果律及びそれの必然性の偉大を覺り初めた人は、たやすく彼自らの小さい自我を滅却してしまふ。驚異の中に沈んで心から謙讓になつて、自らがあの作用力の一部分であることを忘れ、自らの個人力を尺度として、世界の、小なるものは決して大なるものに比較して、驚異と意義に價しないと申せない世界の、あの必然的な流れの一小部分を變革出來る權利の自分にあるのを忘れてしまふ。

ソルミが言つたやうに、レオナルドは多分藝術のために研究し始めた。(*)彼は光、色彩、陰

影、遠近法の本質と法則を、自然の摸寫に自ら精通し他人にも同じ道を教示せんために研究した。彼は既にその當時藝術家のためにこの知識の價値を過重してゐた。繪畫上の必要といふ手綱をもつて、繪畫の對象、動植物、人體の比率、人體の外觀から一歩進んでその內部構造の知識、現象に於ても姿を見せ藝術によつても描寫を必要とするその生命機能の知識の研究にますます驅り立てられた。そしてとうとう過大になつた衝動は藝術上の必要といふ關聯から離反する迄に彼を深入りさせ、その結果彼に力學の一般法則を發見せしめ、アルノの谷の地層と化石の歷史を推測せしめ、そして最後にその著書の中に「Il sole non si move」「太陽は動かない」といふ認識を特筆大書せしめることが出來るまでになつた。自然科學の殆どすべての領域にその研究をおし進め、あらゆる部門に於て發見者、少くとも豫言者とも先驅者ともなつた。併し彼の知識欲は外界にのみ向けられてゐた。人間の精神生活の研究に對しては、あるものが彼をひきとどめてゐた。その巧妙に錯綜した寓話を中心とした「アカデミァ・ヸンチアナ」の中で彼は心理學に對して一指だに觸れなかつた。

(*) ソルミ、文藝復興。第八頁。「レオナルドは自然研究を繪畫への戒律とした。……………次い

で研究の情熱が熾烈になつて、最早藝術のための科學でなく、科學のための科學を獲得しようと望んだ。」

後年彼が科學研究から最初に出發點とした藝道に戻らうと試みた時に、彼の興味の新しい着眼點、彼の精神作用の變化した性質のために甚しい混亂に陷つた。繪畫に對しては問題が先づ第一に彼の興味を占領した。そして恰もあの廣大無邊な自然研究で經驗したやうに、この問題のうらに無限の他の問題が浮び上つてくるのを見た。彼は最早自らの要求を制限し、創作を分離し、自らが屬してゐると考へた、偉大なる因果律から創作をひき離さうと試みることが出來なくなつた。彼の思惟に於て關聯し合つてゐる一切のものを、藝術の上に表現しようとする渾身の努力のあとで、彼は自らの藝術を未完成のまま抛棄し、未完成だと宣言しなければならなかつた。

藝術家は嘗て助手として科學者を雇傭したが、奉公人が強くなつて今や主人をおさへつけてしまつた。

レオナルドに於ける知識欲のやうに、ある人物の性格に一つの衝動が過大に形成されたのを

發見する時に、私達はそのためにある特殊な素質を說明の資にもつてくる。その素質の何等かの器質的條件に關しては、今日に至つても詳細なことは全然分かつてゐない。併し神經症患者の精神分析研究から、私達はどんな患者にでも立證出來る二つの豫想を懷くやうになつてくる。かやうな過大な衝動はその人物の最も早期な小兒時代に早くも活躍し、その衝動の主權は小兒生活の印象によつて固着されたと想像しても誤りないと思はれる。さらにその衝動力がその起原に於て自らを强めるために、性衝動力をひきつけて、その結果後年その衝動力が性生活の一部を代表することが出來たと假定してもよい。この故にかかる人間は例へば他人がその戀愛に捧げると同じ情熱的獻身をもつて研究する。そしてかかる人間は戀愛する代りに研究することが出來る。研究心に於てばかりでなく、衝動の特別な强度を必要とする他の多くの場合にまで、かかる衝動の性的補給の結論を押し通しても差支へないと考へる。

人間の日常生活の觀察から、大概の人間がその性衝動力を自らの職業活動に巨大に寄與せしめる能力を有してゐることを知る。性慾はかやうな寄與の上にとりわけ適任である。性慾は昇華能力を有してゐる。換言すれば、それの本來の目標を棄てて、もつと高く評價されてゐる、

最早性的でない他の目標に轉向することが出來る。ある人物の小兒時代の歴史、即ちその精神發展史が、小兒時代に於て巨大な衝動が性的好奇に利用されたことを示す時に、私達はこの過程を立證することが出來る。壯年期の性生活の中に、恰も性活動の一部が今や過大になつた衝動活動によつて置換されたかのやうに、著明な萎縮が惹起された時に、私達はさきの立證をさらに强めることが出來る。

この豫想をそのまま過大になつた研究心の實例に應用するのは特別困難に思はれる。世人は小兒にそんな眞劍な研究心とか、目につくやうな性的好奇が存在するとは信じたくないからである。併しこの困難はたやすく除去出來る。子供は知識欲からいろんなことをひつきりなしに聽きたがる。さういふ質問がすべて遠廻しであること、小兒はさういふ質問を餌にして、自分が口に出さないたつた一つの疑問を嗅ぎつけやうとするために、その質問がひつきりなしであることを、大人が解さない限り、子供の放つ質問のすべては謎に見える。子供がもつと大きくなり、閧分がつくやうになれば、好奇心のこの表現はしばしば突然に消失してしまふ。だが精神分析研究こそ私達に十二分な説明を惠んで與れる。即ち多數の子供、恐らく大抵の子供、

少くとも利口な子供は、凡そ三歳の年頃に、小兒期性的好奇と命名してよい一時期を通過することを教示して呉れる。知識欲は私達の知る限り、この年代の子供にあつては、突發でなく、ある重大な經驗の印象、卽ち自らの利己的興味への脅威と觀ずる弟や妹の誕生あるひは外的經驗によつて心に懸けた弟や妹の誕生によつてめざまされる。恰も子供が自らの望まない出來事を豫防する手段と方法を探すやうに、その研究心は赤ん坊がどうして生まれるかといふ疑問に集中される。小兒は大人の與へた返答を信賴しない。例へば神話的に意味深長なかうの鳥の話を極力否定する。大人を信賴しないといふこの行爲が、彼の精神的獨立心の出發點となり、しばしば大人に對して眞劍な反抗を感じ、この機會に眞實をごまかされたことに對して決して心から大人を容赦しない。かやうな事實を學んで私達は非常に驚き入る。小兒は我流でもつて攻究し、赤ん坊がお母さんのお腹にゐたことを曉り、自らの性衝動に指揮されて、赤ん坊が食物から出來るといふ意見、分娩は腸管から行はれるといふ意見、はつきりは分からぬが、兎に角お父さんがそれに與つてゐるといふ意見を作り上げる。小兒は當時早くもある敵愾的なある暴力的なものに見える性交の實在を朧ろに感づいてくる。併し彼自らの性體質は赤ん坊の生殖の

役目を持つまでに發育してゐないため、どうして赤ん坊が生まれるかといふ研究もまた空中樓閣となり、未完成のまま放棄されてしまふ。知的獨立心の最初の試みに於けるかやうな失敗の印象は永久に殘つて、彼を深甚に沈鬱たらしむるやうに見える。

小兒期性的好奇のこの段階が力强い性抑壓の擡頭をもつて終りを告げた時に、研究衝動の將來の運命に對して、性的興味との彼の早期な關聯から、三つの異つた可能が生じてくる。第一に研究心は性慾と同じ運命をとり、知識欲はその時以來抑制され、智力の自由な活動は恐らく生涯にわたつて限極される。特にその後間もなく敎育によつての强力な宗敎的思考抑制が權力を奮ひ始める。かやうにして贏ち得た思考薄弱こそ、神經症的疾患の爆發の上の有力な後援者であることを私達ははつきり承知してゐる。第二の類型では知的發展はそれを引きずりこまうとする性抑壓に反抗出來る程に强くなつてゐる。小兒期性的好奇の沒落後間もなく、智力が强くなる時は、性抑壓を迂回するために、智力は古い聯想の應援を求める。そして抑壓された性的好奇は穿鑿强迫の姿をとつて戻つて來て、歪められ縛られた姿であるといへ、思考そのものを性化し、知的作業を眞の性過程の快感と恐怖をもつて强調するに足るほどに熾烈になる。こ

こに至つて研究心は性活動となり、しばしば性活動そのものとなり、思考に於ける解決の感情、即ちすがすがしい感情は性滿足の代用となつてしまふ。然しながら小兒性穿鑿の未完結な性質が再び姿を見せて、この穿鑿が決して終結に達せず、問題の解決に際しての求むる知的感情はますます遙へ遠ざかつて行く。第三の稀有なしかも特別完全な類型は、特殊の素質によつて、神經症的思考强迫のやうな思考抑制を脫却する。この場合でも性抑壓現はれるが、性抑壓は性快感の部分衝動を無意識に轉向さすことにしくじつて、リビドは抑壓の運命から身を飜す。即ちリビドは最初から知識欲に昇華されリビドは自ら研究心を强めるための後援者にかはつてしまふ。この時もまた探究はある點强迫的になり、性活動の代用になるといへ、その根柢にある精神過程の全く異なつた相違（無意識よりの爆發の代りに昇華）のために、神經症の性質は現れず、小兒期性的好奇の始原的錯綜への束縛は消失し、かくて衝動は知的興味のために自由自在に活躍することが出來る。昇華したリビドの資本によつて研究心をかくも熾烈にした性抑壓は、研究心が性的題目への熱中を忌避せしめた上になほ與つて力があるといへる。

私達がレオナルドに於て研究衝動が過大になり、同時に彼の性生活が萎縮し、所謂理想的同

性愛に限極されてゐるのを考慮する時、レオナルドを今述べた第三型の手本と觀じたくなつてくる。性的興味のための知識欲の小兒性活動のあとで、彼は事實にそのリビドの大部を研究衝動に昇華せしめた事實こそ、彼の本質の核心であり、彼の本質の祕密である。併し、かういふ見解はやすやすと樹立出來るものでない。このために、私達に最初の小兒時代に於ける彼の精神發展を探究する必要が生じた。彼の生涯に關する報告が、非常に少く非常に薄弱である時に、なほこの上に、現代人に就いてさへ觀察者の注意力が屆かないやうな狀況に關する報告を中心とする時に、かやうな資料を蒐集しようとするのは、一見馬鹿の骨頂のやうに思はれる。

私達はレオナルドの少年時代に就いてまるで何も知つてゐない。彼は一千四百五十二年にフイレンチエとエンポリの途中にあるギンチといふ小さい町に生まれた。彼は私生兒であつた。尤も私生兒といふ名前は、その時代の人には非常な汚名とは觀ぜられなかつた。彼の實父はセル・ピエロ・ダ・ギンチといふ公證人であり、公證人と地主を代代業とし、その土地のギンチを苗字にとつた舊家の子孫であつた。彼の實母はカタリナといふ、百姓の娘で、後年その土地の他の男と結婚した。この母の姿はレオナルドの傳記の中に全然現れてゐない。僅に詩人メレ

シユカウスキイのみがその母の痕跡を立證したと信じてゐる。レオナルドの小兒時代の唯一の確實な報告を一千四百五十七年の町役場の記錄、卽ち徵稅臺帳が語つてゐる。ギンチ家の家族の中にセル・ピエロの五歲の私生兒としてレオナルドの名前がこの臺帳に登錄されてある。セル・ピエロと妻ドンナ・アルビエラの間には子供がなかつた。このために小さいレオナルドが父の家にひきとられたのである。年齡は分明せぬが、アンドレア・デル・ヹロツキオの職場に徒弟となつて弟子入するまで、彼はずつと父の家に居住してゐた。一千四百七十二年にはレオナルドの名前が既に「コンパニア・デイ・ピツトリ」の會員名簿の中にのせられてある。それ以上のことは分かつてゐない。

二

私の知つてゐる範圍で、レオナルドはその科學に關する草稿の中に彼の小兒時代の報告をたつた一回だけ挿入してゐる。禿鷹の飛揚を述ぶる段になつて、心中に浮び上つた非常に古い時代の回想を追ふために、突然彼は筆をとどめた。

「禿鷹に關して根本的に研究しなくてならぬ宿命が、ずつと昔から私に課せられてゐたやうな思ひがする。といふのは、私に非常に古い回想が甦つて來たからである。私が未だ搖籃にはひつてゐた頃に、一匹の禿鷹が舞ひ下りて來て、尾で私の口を開き、その尾で何回ともなく私の唇をなでて呉れた。」(一)

これは一つの小兒期回想であるが、最も奇怪な種類のものである。その內容からみても奇怪

であり、その回想が發してゐる年齡からみても奇怪である。人間は果して乳兒時代の記憶をそのまま保存出來るものか、それは恐らく不可能とは言へまいが、その記憶は決して確實なものと申せない。レオナルドの回想が主張するやうな、禿鷹が赤ん坊の口を尾で開いたといふことは、誠に朦朧として、まるでお伽噺のやうに思はれる。そのために、二つの困難を一擊の下にやつつけようとする他の見解が、私達の批判を誘ふために現はれてくる。禿鷹のさやうな光景はレオナルド自らが體驗した回想でなくて、レオナルドが後年創作して小兒時代に輸送した空想である。(二)人間の小兒期回想は大抵ほかの起原を有してゐない。それは成年時代の意識的回想のやうに、體驗にくつついて再現するのでなくて、小兒期が終つた後期に初めて再現される。勿論變形され、假裝され、後年の傾向に行使され、その結果、その回想は空想と嚴密に區別出來ないものになつてしまふ。太古の民族にいかにして歷史の記錄が發生したかといふ、その種類とその方法を考察すれば、小兒期回想の本質を十分明瞭にさすことが出來る。民族が小さく弱くある時は、民族に歷史を記錄しようとする考へなど浮ぶものでない。人間は土地を開墾し、土地を侵略し、國富を致すがために、隣國に對して自國の存在を防衞する。即ちその段階は英

雄時代であり有史前期である。次いで新しい段階が展開される。民族は意識に達し、富と力を自信し、今や我が民族がどこから來たか、我が民族がどう發展したかを知らうとする欲求が發生してくる。現在の事件を引き續き記載し始めた歴史の記録は、さかのぼつて過去を回想し、傳統と口碑を蒐集し、風俗習慣の中に古代の遺物を解釋し、かやうにして太古史が出來上るのである。當然この太古史は過去の寫實であるよりはむしろ現在の意思と願望の表現にならざるを得ない。多くのものは民族の記憶から除去され、他のものは歪められ、過去の多數の痕跡は現在の意味に於て間違つて解釋され、これに加へて人間は知識欲といふ客觀的な動機から歴史を記録しようとせずに、同時代の人達に働きかけ、彼等を鼓舞し、彼等を向上せしめ、あるひは彼等に一つの龜鑑を垂れようとして記録する。成年時代の事件に對する人間の意識的記憶は、只今の歴史の記録とはつきり對比出來る。そして彼の小兒期回想はそれの發生とそれの信用から見て、後年傾向的に訂正された民族の太古史に髣髴とする。

(1) „Questo scriver si distintamente del nibio par che sia mio destino, perchè nella mia prima ricordatione della mia infantia e mi parea che essendo io in culla, che un nibio venissi a me

e mi aprissi la bocca colla sua coda e molte mi percuotesse con tal coda dentro alle labbra.“

(二) ハヴロック・エリスは『精神科學雜誌』(一千九百十年、七月)上で好意に溢れた批判をもつて、只今の私の意見に反駁を加へ、レオナルドのこの記憶はむしろ現實に立脚したものだと言ひ得る、小兒期記憶といふものは、世人が一般に信ずるよりはしばしば、ずうと早期に屆いてゐるからであると述べてゐる。大きな鳥は何も禿鷹に限らなくてもよい。私もこれに贊成したい。そして困難を少くするために次の假定を提供したい。母が赤ん坊の側に大きな鳥が舞ひ下りて來たのを見た。母はそれを幸先よい前兆と觀じ、後年幾度も子供にその話をして聞かせた。その結果、子供はこのお話を記憶にとどめ、よくあるやうに、後年間違へて自分の體驗による記憶にしてしまつた。この變更ぐらゐで私の記述の連絡は決して損はれない。人間が後年に作つた小兒時代の空想は一般に、この忘却裡にある太古期の小さい現實に基づいてゐる。この故に現實でないとして、それを禿鷹とよばれる鳥と、その鳥の驚くべき行爲を藏するレオナルドの回想のやうに組立てるためには、ある祕密な動機を必要とする。

搖籃を訪れた禿鷹に關するレオナルドの話が、單に後年に作られた空想であるなら、そんな空想に長らくとどまるのは褒めたものでないと世人は考へよう。その空想を説明する上には、鳥の飛揚の問題の研究に宿命を捧げたといふ、公然たる傾向で十分でなかつたらうか。だ

がかやうな蔑視によつて、私達は口碑、傳統及び民族の有史前期の解釋の資料を單純に排斥した時と同じ不正を犯すことになる。然もあらゆる歪曲と誤解とに拘らず、過去の現實はこれ等の中に表現されてゐる。これ等は民族が嘗ては强力な、而して今日に於てもなほ有力な動機の支配下に、彼等の太古の體驗から形成したものである。そしてひと度一切の作用力の知識をもつて、この歪みを溯ることに成就するなら、かやうな口碑的な資料の背面に、歷史的眞實を發見することが可能であつたに相違ない。同じことが個體の小兒期回想や空想にもあてはまる。人間がその小兒期に就いて、何を回想してゐると信じてゐるかは問題でない。彼自らが理解してゐない回想殘物の背面に、彼の精神發展上の意義重大な特性に關する貴重な證據が常に埋藏されてゐるのだ。(一)私達は精神分析的術式に於て、この埋藏物を白日の下にひき出すための立派な方法を所持してゐる。この故にレオナルドの傳記に於ける間隙を、彼の小兒期空想の分析によつてうづめる研究が、私達の當然の任務となつてくる。その研究によつて十分滿足な確實性に達することが出來ないなら、私達はこの偉大なこの不可解な人物に關する多數の他の研究は、決して立派な運命に遭遇しなかつた事實で自らを慰めなくてはならない。

（二）私は不可解な小兒期囘想のかやうな見方を爾來ほかの偉人にも試みた。ゲエテが六十歳の頃に筆をとつた自傳『作爲と眞實』の第一頁に次のやうな記事が書かれてある。彼は隣人の煽動に乘つて、大小の陶器を窓から道に投げすてた。陶器は粉微塵に毀れた。これは彼が自分の早期小兒時代の頃に關して記憶してゐる唯一の光景である。その内容が全然孤立してゐること、その内容がさう偉くならなかつた他の人間の僅少の子供の小兒期囘想と一致してゐること、彼の三歳九箇月の時に誕生し、十歳の頃に死亡した小さい弟のことをゲエテはこの箇所で全然思ひ出してゐないこと、かういふ事柄を土臺にして、私はこの小兒期囘想の分析を斷行した。（尤もゲエテはずつと後段で自分の弟が小兒時代に幾度も長い病氣を患つたことを報告してゐる。）この小兒期囘想をゲエテの敍述の脈絡にぴつたりあてはめて、その内容が生涯の彼に指定された場所に相當する他のもので置換出來ることを私はこの際希望した。小さい分析（フロイド全集、第十卷『作爲と眞實』）から私は小兒期囘想に現れた、陶器を棄てるといふことは、自分を亂す闖入者に向けられた魔術的行爲であることを知つた。そしてこの行爲の報告されてゐるその場所で、この行爲が、二番目の息子がゲエテと母との親密な關係の存續をかきみだしてはならないことに對する、凱歌と解さなければならぬことを知つた。最も早期な、かやうな假裝に身をつつんだ小兒期囘想は——ゲエテにあつてもレオナルドにあつても——母に關聯してゐることは驚歎すべきものでなかつたらうか。

併しレオナルドの禿鷹の空想を精神分析家の目で眺むれば、この空想は最早私達には奇怪とは思はれなくなる。私達はしばしば、例へば夢に於て、同一のものを發見したことを思ひ出す。分析の結果はその空想をそれに固有な言葉から、一般に通ずる言葉に飜譯出來るやうにして呉れる。飜譯はエロチックなものになる。尾卽ち Coda（コオダ）は最も有名な象徵の一つであり、男根の代用名であり、伊太利語に於てもまた自國語に於ても同一に使用されてゐる。禿鷹が小兒の口を開き尾でその口を强く撫でたといふ空想の中に含まれてゐる狀況は Fellatio（フエラチオ）の概念、卽ち男根を人間の口に挿入する性行爲に一致してゐる。この空想が飽く迄も受動的性質を帶びてゐることは奇怪である。この空想は女子若くは受動的同性愛者（性交に於て女子の役目をする）のある夢とも類似してゐる。

讀者はここで暫く我慢して、憤慨に眞赤になつて、精神分析に從ふのを拒絶しないようにおたのみしたい。と申すのは、精神分析は早くもそれの最初の應用をもつて、偉大なる純潔なる人間の追想に許し難い侮辱を加へたからである。併しいくら憤慨したところで、讀者の憤慨はレオナルドの小兒期空想が何を意味するかを私達に解くことの出來ないのは分かり切つてゐる。

レオナルドはこの空想を明白に告白してゐる。そして私達はかかる一つの空想が他の心的產物、例へば夢、幻覺、妄想と同じやうに、必然何等かの意味を含んでゐるといふ期待――言ひ換へれば偏見を懷かずにをられなくなる。この故にむしろ讀者は暫時の間正しい耳を、未だ最後の言葉を發してゐない分析研究に向けて欲しい。

男根を口に入れてそれを吸ふといふ欲望は、ブルジョア社會にあつては穢しい倒錯性慾の中に數へられてゐるが、現代の女子に於ても――そして古い繪畫が示すやうに昔にあつても――たびたび現れ、戀愛狀態ではそれの穢しいといふ性質を全然消失してしまふ。醫者はクラフト・エビングの『變態性慾』を讀んだことのない、あるひは、何等かの書物からかやうな性滿足があり得るといふ知識を持つたことのない女子に於ても、この欲望の上に形成された空想に遭遇することがある。自ら勝手にこのやうな願望空想を作るのは、女子にとつてはたやすいやうに思はれる。慣習によつてかくも强烈に蔑視されてゐるこの情況が、探索の結果、最も無邪氣なところから發してゐることを私達は敎示される。それは他の情況の變更に過ぎない。卽ち乳兒期に（「essendo io in culla」「私が搖籃の中にゐた時に」）母または乳母の乳首を口

にくはへてそれを吸つた時に、私達のすべてが嘗ては快感を味はつた情況である。人生に於ける我等の最初のこの快感の器質的印象は破壞されずに、そのまま心の中に刻みこまれてゐる。子供が後年機能によつては乳首に、形態と下腹に於ける位置によつては陰莖に匹敵する牝牛の乳首を知つた時に、その知識はあの穢しい性的空想の後年の形成に對する前段階となるのである。

今や私達はレオナルドが何故にその乳兒期の中へ禿鷹とのさやうな經驗の回想を轉移したかを解した。この空想の背面に母親の乳首を吸つた回想に外ならぬものが隱蔽されてゐる。この人間らしい美しい光景をレオナルド及び他の多くの畫家が、神なる母とその子供の畫によつて描かうとした。勿論、未だ解するには到らぬが、男女兩性にとつて等しく有意義なこの回想が、男子であるレオナルドによつて、何故に受動的同性愛の空想に變形されたかを私達は確定したいと思ふ。同性愛と母の乳房を吸ふことが、どういふ關係で結びついてゐるかの疑問を暫くおいて、傳說によると、レオナルドが實際同性愛を感じた人だつたといふことをここで一寸思ひ出したい。青年レオナルドに對するあの非難が正しいか正しくないかは私達にとつてはさした

る問題でない。實践的な活動によつてでなく、むしろ感情の態度によつて、何人かに倒錯の本質を賦すべきか否かを決定すべきである。

レオナルドの小兒期回想の中の他の不可解な姿が、先づ第一に私達の興味をひきつける。私達はこの空想を母によつて授乳されると解して、母が一匹の禿鷹で置換されてゐるのを發見する。ではこの禿鷹がどこに由來し、この禿鷹がどうしてこの場所にやつて來たのか。

ここに一つの聯想が浮んでくる。非常に遠いところにあるために、世人はこの聯想を棄てようと誘はれるだらう。古代埃及の神聖な象形文字には母は禿鷹の繪で表現されてゐる。埃及人はまた母なる神を祭つた。この神は禿鷹の頭に形づくられてゐた。あるひは數種の頭に形づくられて、少くともその一箇は禿鷹の頭であつた。この女神の名前はムウトとよばれた。この發音が獨逸語の母なるムツタアと似てゐるのは單に偶然であらうか。禿鷹が實際母と關係があるなら、それはどういふ役に立つだらうか。フランソワ・シャンポリン(一千七百九十年——一千八百三十二年)が初めて象形文字の讀み方に成功した時に、レオナルドがこの知識に接してゐたと私達は推測すべきであるか。

どういふ道筋から古代埃及人が禿鷹を母性の象徴に選ぶやうになつたかは興味深い。埃及人の宗教と文明は希臘人や羅馬人にとつて早くも學術的好奇の對象となつてゐた。そして埃及の碑銘の文字が未だ讀めなかつたずつと昔の年代の古文書から、それに關してある報告を手にすることが出來る。古文書のあるものは、一部は有名な著者、例へばストラボ、プルタルク、アミニアヌス・マルセルスの文書、一部はその起原と時代が分明しない無名の著者、例へばホラポロ・ニイルスの象形文字とかヘルメス・トリスメギストスといふ神の名で傳はつた東洋僧の悟道書である。かういふ書物から私達は禿鷹が母性の象徴であり、古人はこの鳥類には雌だけで雄がゐないと信じてゐたことを學ぶ。古代人の博物學はこの制限に對して對照を知つてゐた。埃及人が神とあがめた甲蟲には雄だけしかゐないと信ぜられてゐた。

では雌だけしかゐないのに、禿鷹はどうして受胎するのか。これに關してホラポロの書物にうまい説明が載つてゐる。ある時期に禿鷹は飛揚中に空にとまつて、膣を開いて風で受胎すると言ふのだ。

私達が今しがた荒唐無稽と擯斥せずにはをられなかつたあるものを、思ひがけなく正しと見

ゐやうになつてくる。埃及人が母の概念を禿鷹の繪で描いた科學的童話をレオナルドは知つてゐた。彼は非常な讀書家であり、彼の興味は文學と科學のあらゆる領域にわたつてゐた。コデツクス・アトランチクスの中に、レオナルドがある時期に藏してゐたすべての書物の目錄があがつてゐる。その中に彼が友人から借用したいろんな書物に關して無數の書き込みがしてある。そしてリヒタアが彼のスケツチから編輯した拔萃によると、彼の讀書の範圍は殆ど測り知ることの出來ぬほどである。これ等の無數の書目の中に、古代及び當代の自然科學に關する書物もまた缺けてゐなかつた。さういふ書物はすべてその當時旣に印刷にされて、ミラノは丁度伊太利の若き印刷術の首府であつた。前進するに從つて私達は今やレオナルドが禿鷹の話を知つてゐたといふ推測を裏づけるやうな報告に出くはす。ホラポロの書物の博識な出版者兼註釋者が前に引用した原文百七十三頁に次のやうな覺書をしてゐる。「Caeterum hanc fabulam de vu-lturibus cupide amplexi sunt Patres Ecclesiastici, ut ita argumento ex rerum natura petito refutarent eos, qui Virginis partum negabant; itaque apud omnes fere hujus rei mentio oc-currit」（自然からのあの證據を論難するために、教會の教父達は貪慾な者の情慾に就いての別

な物語を議論した。彼等は乙女マリヤが一人で子を生むことを否定する人達を論駁した。かくてこの問題は廣く總ての人人の注意を喚起した。）

禿鷹の單性と受胎に關する物語は決して甲蟲の話と同じやうな、いい加減な出鱈目ではなかつた。教會の教父は聖書の話を信じようとしない庶民に對して、博物學かられつきとした證據を借りようとしてこの物語を利用した。古代の最も立派な報告によつて、禿鷹が風から受胎出來ると極まつてゐるなら、何故に同じことが人間の女子に一遍も可能でなかつたのか。この可能を立證せんために、教父はこぞつて禿鷹の物語を口にした。そしてかやうな有力な後楯をもつてレオナルドもまた一度はこの物語を耳にしたことは明白である。

私達はレオナルドの禿鷹の空想の發生を次のやうに假定することが出來る。教父の書物あるひは自然科學の書物の中で、禿鷹はすべて雌だけで、雄なしに生殖するのだといふ記事を讀んだ時に、彼に一つの記憶が浮んだ。その記憶はさきの空想に變形されたが、その記憶はさらに自分もまた禿鷹の子供であつたこと、その子供には母はあつたが父がなかつたことを意味しようとした。そして彼が母の乳房で味はつた快感の餘韻が、丁度古い印象が自然に浮び上つてく

るやうにその記憶に結びついた。すべての美術家にとつて尊い、あの子供を抱いた聖母の觀念への著述家の發見にかかるこの諷示こそ、この空想を貴重な意義深いものと彼に思はしむるやうに貢獻したに相違ない。彼は自らを子供の基督、萬民の母の慰安者、救濟者に同視するに到つた。

小兒期空想を分解する時に、私達はその空想の現實的な記憶內容を、その內容を變形さし歪めさす後年の動機から分離するように努める。レオナルドの場合に就いて、私達は今や空想の現實的內容を知つた。母を禿鷹で代用したのは、子供が父を失つて母とたつた二人で住まつてゐたことを示す。レオナルドが私生兒であつた事實は彼の禿鷹の空想と合致する。この故にのみ彼は自らを禿鷹の子供に比較することが出來たのである。併し私達は彼の少年時代に就いてさきに知つた事實として、彼が五歲の時に父の家にひきとられたことを學ぶ。いつひきとられたか、その時日が彼の誕生數箇月後であつたか、臺帳に登錄された數週前であつたか、確然としたことはわれわれには分かつてゐない。今や禿鷹の空想の解釋から、レオナルドは生後一年間は彼の父と繼母の側でなく、貧しい一人ぼつちの實母の側で暮し、そのために父を知らずに

過ごしたといふ事實を知る。この主張は精神分析研究の引出した貧弱なしかも無鐵砲な結果であるが、若しこの主張をさらに前進さすならば大きな意義を有してくる。レオナルドの小兒期の事實の上の關係を考察すればその確實性はさらに堅固になる。記錄によると彼の父なるセル・ピエロ・ダ・ギンチはレオナルドの出生の時は、既に上流のドンナ・アルビエラと結婚してゐた。二人の中に子供が生まれなかつたために、レオナルドは五歳の時に父の家、むしろ祖父の家に正式にひきとられたのだ。將來子供を生むかも知れぬ若い妻に新婚早早私生兒を養育するようにおしつけるのは世間普通のことでない。可愛ゆく成長した私生兒を、待ち望んでも生まれぬ夫婦の間の正式な子供の代償としてひきとるように決心する迄には、失望の數年が過ぎたに相違ない。レオナルドが一人ほつちの實母の膝下を離れて、父の家に移る迄に少くとも三年、恐らく五年は經過しただらうと考へる時に、禿鷹の空想の解釋は立派な一致點を有してくる。だが一切のことはあまり遲すぎた。生後三年乃至五年の間に印象は固着され、外界に對する反應のしかたはきまつてしまひ、後年のいかなる體驗といへども、その小兒期體驗を滅却さすことは不可能である。

不可解な小兒期の記憶とその記憶の上に作られた空想が、常に人間の精神發展上の最も重大なものを示すといふことが正しいなら、禿鷹の空想によつて鞏固にされた事實、卽ちレオナルドが彼の誕生後の最初の生活を母親と二人ぎりで過ごしたといふ事實は、彼の內部生活の形成の上に最も決定的な影響を與へたに違ひない。この情況の作用の下に、彼はその少年時代に一般の子供よりもつと眞劍に一つの問題に直面し、特別熱心にこの謎を解かうと穿鑿し始め、彼は早くも、どこから赤ん坊がくるか、子供の出生に父がどう關係してゐるかといふ大問題に煩悶する科學者になつてしまつたのは確實である。彼の研究心と彼の小兒期の歷史を結ぶこの關聯の觀念が、彼が早くも搖籃の中にあつて禿鷹の訪問をうけたがために、鳥の飛揚の問題に潛心するやうに自分は昔から運命づけられてゐたといふ叫びを後年彼の口から發せしめたのである。鳥の飛揚に向けられた知識欲を小兒期性的好奇から摑み出すといふことは極めてたやすく解決のつく我等の今後の任務となる。

三

禿鷹の要素はレオナルドの小兒期空想中へ現實的回想內容として示されてゐる。レオナルド自らがその空想を置いた關聯をもつて、この內容の彼の後年の生活に及ぼす意義は明瞭になつて來た。解釋を進めるに從つて、今や私達は何故にこの回想內容が同性愛的狀況に轉化されたかの奇怪な問題に逢着する。赤ん坊を哺乳した――うまく言へば、赤ん坊が乳首を吸つた母は赤ん坊の口に尾を入れた禿鷹に變形された。私達はこの禿鷹の尾(コオダ)が一般の俗語によれば男根、卽ち陰莖に外ならぬと解釋出來ると主張した。併しどうして空想力がこの母性的な鳥に男性の記號を與へたかを知つてゐない。そしてかやうな荒唐無稽に直面して、私達はこの空想形像に理性的な意味をどのやうに與へてよいかをも知つてゐない。

併し何も絶望する必要はない。私達はいかに無數の夢にそれの含む意味を告白さすように強ひたことだらう。同じことが小兒期空想の場合にあたつて夢の場合に比して困難であるべき筈があらうか。

一つの孤立した奇怪を見附けるのがよいことでないことを私達は思ひ出す。そして私達はその奇怪に第二のもつと顯著な別の奇怪を附加しようと急ぐ。

禿鷹の頭に象つた埃及の女神ムウト、ロツセエルの字書の中でドレクスラアが斷定したやうな最も非人格的性質の形體は、しばしば、イシスとハトオルのやうに、もつと生命力のある個性を有する他の母性の神體に融合するものだが、同時にまた原神はそれの別個の存在と崇拜を保つてゐる。各個の神神が混合に墮しても元の個性を失はなかつたのは埃及のパンテオンの特有な特徴であつた。神神の合體と並んで、各個の神はその獨立性を保つてゐた。埃及人は禿鷹の頭を有するこの母性の神を一般の表現に於て男根的に形づくつた。乳房によつて女性を示してゐる肉體が勃起狀態にある男根を具へてゐる。

即ちムウトなる女神の像の中に、レオナルドの禿鷹の空想のやうに、母の性質と男子の性質

が結合されてゐる。私達はこの結合をレオナルドが本學問から母なる禿鷹のアンドロギンの本性を知つてゐたといふ假設を借りて說明すべきであらうか。かかる可能は疑問以上である。彼が手にしてゐた源泉は、この注目すべき確定に說明を下すやうなものを一つも含んでゐないやうに思はれる。むしろこの符合をある共通した、ここかしこに働きかけてゐる未知の動機に歸せしめる方が適切である。

神話學は私達にアンドロギンの形體、卽ち男子と女子の性特徵の結合がムウトばかしでなく、イシスやハトオルのやうな他の神神にも存してゐることを知らして吳れるが、後者の場合では、彼等もまた母性的性質を有してムウトと融合した範圍に於てのみ存在してゐたと數へる。神話學はさらに私達に、後年希臘のアテネになつた原神サイスのナイトのやうな埃及のある神が、その起原にあつてはアンドロギン卽ち半男女と觀ぜられ、同一のことが多くの希臘の神神特にヂオニソスの圈內の神、さらに後年女性的な愛の女神に限られたアフロヂテにもあてはまることを敎へて吳れる。神話學はまた女體にぶらさがつてゐる男根が自然の創造的原動力を意味すること、かやうな半男女の神の形體のすべてが、男性と女性が結合して初めて、神の有すべき

完全性の描寫が可能であるといふ觀念を表現することを說明して吳れた。併しかういふ說明は決して、母なる本質を具體すべき姿に、男性の力といふ母性と對立した象徵を與へる時に、人間の空想が撞着を感じなかつたかの心理學上の謎を私達に解いて吳れない。

今や小兒の性慾說から立派な說明が現れてくる。勿論男根が母の描寫に結合するまでにはある時日を要する。男の子供がその知識欲をまづ第一に性生活の謎に向ける時に、その知識欲は自らの生殖器への興味によつて支配される。男の子は自分の肉體のこの部分を非常に尊い非常に重大なものと觀じ、自分と同じ肉體を有してゐると思ふ他人にはその部分が缺けてゐると信ずる程である。彼は陰莖と同一價値を有する別の生殖器の實在を發見することが出來ないために、當然すべての人間、女子もまた自分が所持してゐるやうな陰莖を有してゐるといふ假設に達してくる。この偏見は若い研究家の頭にしつかり固着されて、よし小さい女の子の生殖器を初めて發見しても、この偏見は一朝一夕に毀されてしまはない。勿論この認識は自分の所持してゐるものと形は違つてゐることを語るが、この認識の內容として、彼が女の子に於て陰莖を發見することが出來なかつたと白狀する迄には到らない。陰莖がないなどといふことは、男の

子にとつては氣味惡い、堪へ切れない觀念である。この故に彼は陰莖は女の子にもあるべきだが未だうんと小さい、あとで大きくなるのだといふ妥協說を組み立てる。この豫想が後年の觀察に於て的中しないために、彼は別の逃路を案出する。陰莖は女の子にもあつたのだが、切り落とされて、その跡に切傷が殘つてゐる。學說のこの發展は早くも苦痛な性質を帶びた自己の體驗を利用する。彼があまり熱心に自分の陰莖を氣にする時に、大人からこの尊い器官をとつてしまふぞといふ威嚇をこれ迄に耳にしてゐた。この去勢威嚇の影響の下に、今や彼は女子の生殖器に對する自らの觀念を訂正する。彼はこの時以來自分が男子であることに戰慄し、同時に、彼の意見によれば、早くもこの恐ろしい刑罰を受けた不幸な人間を蔑視するやうになる。(*)

(*) 西洋民族の間に本能的に現れる、非常に不合理なる姿を示してゐる、猶太人憎惡の起原はまたここに發してゐると敢て私は主張してみたい。割禮は人類によつて無意識的に去勢と同じものと觀ぜられてゐる。私達の臆說を人類史の太古に適用するなら、割禮はその起原に於ては、去勢をやはらげる代償であり償却であつたことを想像することが出來る。

子供が去勢錯綜の統治下に來る前、即ち子供が未だ女子を蔑視するに到らない時代に、熾烈なのぞきたい欲望が、エロチックな衝動活動として發現し始める。子供は他人の生殖器をのぞきたがる。その起原では自分のものと他人のものを比較したいために覗くのである。母といふ人間から發散されるエロチックな魅力は、忽ち自らが陰莖と信じ切つてゐる母の生殖器への憧憬に高まつて行く。女子は陰莖を所持してゐないといふ、後年に辛うじて贏ち得た認識の下に、この憧憬はしばしば正反對のものに轉換され、憧憬の代りに憎惡が發現してくる。この憎惡は思春期の年齡に際して精神陰萎、女嫌ひ、恆久的同性愛への原因となり得る。併し嘗ては熱望した對象、即ち女子の陰莖への固着は、小兒期性的好奇といふあの段階を特別深刻に通過した子供の精神生活に根絕し難い痕跡を遺す。女の足とか靴を崇物的に尊敬することは、嘗ては崇拜した、その時以來失はれた、女子の陰莖の代用象徵としてのみ、足を對象にとるやうに思はれる。あの「女髮切り」は自らその動機を知らずに、女子の生殖器に去勢刑罰を行ふ人間の役割を演じてゐるのである。

一般生殖器及び性機能の文化的蔑視の見地を放棄しない限りは、世人は小兒性慾の活動に正

しい見解を下すことが不可能である。恐らく世人は今のやうな報告を出鱈目なものとたたきつける人達に荷擔をするだらう。小兒の精神生活を理解する上に原始時代との類同が役立つ。われわれにとつて生殖器は太古から早くも隱部、即ち羞恥の對象となり、性抑壓がますます强烈になるに從つて、終に嫌忌の對象となつた。私達が現代の性生活、特に人類の文化を代表する階級の性生活を大觀する時に、今日生存してゐる大多數の人間が、穢しいものと思ひつつ、生殖の命令に服し、この際人間的尊嚴を冒瀆されたやうに感ずることを知る。一方性生活の別の見解の語るものは、非文明な低級な民族層にのみ存してゐて、さらに高級な精練された民族層にあつては、文化的に劣等なものとして隱蔽され、それの活動は、良心の悲痛な呵責の下に於てのみ實踐に移さる。人類の原始時代にあつてはすべては全く違つてゐた。文明史家の熱心な蒐集から私達は、生殖器がその起原に於て生あるものの誇りであり希望であり、神格の崇拜を一身に集め、生殖機能の神性は、人間が新しく習得したあらゆる活動に移されたといふ確信に到達することが出來る。生殖器の本質の昇華を通して無數の神神が作られた。そして公認宗教の性活動との關聯が大衆の意識から隱蔽されてしまつた時に、淫祠邪敎が無數の信心家の間に、

その性活動との關聯を生かさうと努めた。最後に文化發展の途上にあつて、多數の神なるもの聖なるものが、性なるものから抽出されて、その搾りとられた殘滓が劣等なものとして蔑視されるに到つた。しかしながら、あらゆる精神印象の本性に存する不滅性を考察するならば、生殖器崇拜の最も原始的な形態が最近に到る迄證明されること、現代の人類の俗語、慣習、迷信はかやうな進化軌道のあらゆる段階の遺物を藏してゐることを發見したとて毫も驚くに足りないのである。

重要な生物學的類同から私達は、個體の精神發展は人類進化の道筋を短縮して再演するといふ事實をちやんと手にしてゐる。そしてこの故にのみ小兒精神の精神分析研究が生殖に對する小兒的評價に就いて教示したものは、嘘だとやつつけてしまふことが出來ないのだ。小兒が母にも陰莖があると假設することは今や、埃及のムウトのやうな母性の神のアンドロギンの姿、及びレオナルドの小兒期空想に於ける禿鷹の尾が發した共通の源泉となる。だが誤つてかやうな神の姿を醫學の言葉を借りて二形（ヘルマフロヂチッシュ）に解してゐる。成程時には多くの畸形の中に二形があつて、人間の目に厭忌の感を與へるが、何もそんな男女兩性の二つの生殖器が一人の神樣にく

つついてゐるのでない。小兒が母の肉體に對して最初に空想したやうに、母性の表象としての乳房の上に、なほ男根がついてゐるだけである。神話こそその起原に於て空想された、この尊敬すべき母體の姿を信仰者のために保存してゐる。レオナルドの空想に於ける禿鷹の尾を只今私達は次のやうに飜譯することが出來る。私のやさしい好奇心を母に向けた當時、私は自分と同じ陰莖が未だ母にもあると信じてゐた。私達の意見によれば、それはレオナルドの後年の全生活を決定した、早期の性的好奇に對する一歩進んだ證據になる。

併し只今一寸反省すれば、レオナルドの小兒期空想にある禿鷹の尾の説明に滿足してはならないことに氣が附く。この空想の中に私達が未だ理解してゐないものが澤山含まれてゐる。この空想は母の乳房を吸ふといふことを吸はされること、卽ち受動性に、從つて明白な同性愛的性質の狀況に轉化してゐる點が最もめざましい特徵である。レオナルドに同性愛者の行動があつたといふ歷史的臆測を思ひ出せば、この空想が果して母に對するレオナルドの小兒時代の關係と、彼の後年の顯在的同性愛むしろ理想的同性愛の原因的關聯を證據だててゐるかどうかの疑問が私達におしよせてくる。同性愛患者の精神分析研究から、私達がかかる事實が存在する

れた回想から、かやうな事實を抽き出す勇氣が出なかつたに相違ない。

現代に於て彼等の性活動に對する法律的束縛に反抗運動を續けてゐる同性愛の男子は、同性愛の理論的代辨者の意見を借りて、我等は生まれつき獨立した性的變種、性中間者、「第三性」だと好んで宣傳したがる。我等は胚種の器質的條件のために、女子に對して許されぬ快感を、男子に於て感ずるやうに運命づけられてゐる男性であると言つてゐる。今人道的動機から彼等の要求に賛同して、進んで署名してやらうと思ふ時に、同性愛の心的發生の考察なしに樹立された、彼等の理論に尻込みしなければならなくなる。精神分析はこの間隙をうづめ、もつて同性愛者の主張を吟味しようとする手段を提供した。この使命のために、精神分析は少數の人間で十二分に成功した。今日迄行つたすべての研究は、同一な驚くべき成績を齎らした。私達が研究した同性愛のすべての男子にあつて、個體によつて忘却された、第一年の小兒期に於て、女子に對し、大部分は母に對し非常に熾烈なエロチックな愛着が存してゐる。ある時はこの愛着は母の溺愛によつて增長され、さらに小兒生活中父の不在によつて支持される。サドガアは

同性愛患者によつては母がしばしば男女であり、父をその占むべき地位から放逐出來た嬶天下の性格の妻であつたことを特記してゐる。私も時折同じことを見たが、父が最初から不在であつたとか、父が早くに死んでしまつたために、小兒は母親の感化にいひなりになつたといふ實例に出會つて强い感銘を受けた。恰も强い父親の存在は、息子に異性對象選擇への正しい決定を確保するもののやうに思はれた。（＊）

（＊）精神分析研究は同性愛を理解する上に極めて明白なこの事實を提供した。尤もこの性迷行の誘因がこれだけで說明し盡されるとは申せない。第一の事實は前述の戀愛欲求の母への固着である。第二の事實はどんな人間でも、最も正常な人間でも、同性愛的對象選擇への能力を有し、いつかどこかでこの對象選擇を實行し、彼の無意識に於てこれを所持するか、若くは力强い反動によつて、これを防禦してゐるといふ主張の中に表現されてゐる。この二つの確證は自らを「第三性」と名乘る同性愛者の要求と、また先天的と後天的の同性愛を重要な區別と主張する學說の二つながらをたたきふせてしまふ。異性の肉體的特徵の存在（心的半男女）は、同性愛的對象選擇の現出を非常に促進さすといへ、それは決して決定的因子とはなり得ない。同性愛者の代辨者が科學に於て、精神分析の確實な報告にまるで耳を借さなかつたのは、誠に遺憾至極と言はなくてはならぬ。

この前段階のあとで一つの轉換が現れる。私達はそれの機構を知つてゐるが、それの推進力を未だ知つてはゐない。母への愛は意識的に前方に發展さすことは出來ぬ。それは抑壓の運命をとる。子供は母への愛を抑壓する。子供は母の地位に自らを置き、自らを母と同視し、彼自らの身體を典型とし、それの類似の中に、彼は新しい愛の對象を選擇する。かやうにして彼は同性愛者となる。眞實は自己春情に舞ひ戻るのである。大人が只今愛する子供は、母が子供として愛したやうに彼が愛する、自らの小兒時代の身體の代用人物か、あるひはそれの再生に過ぎないからである。彼はナルチス型の道を通つて愛の對象を發見する。希臘神話は水に寫る自らの姿に戀慕し、焦れ死にして美しい花と化した青年をナルチッススと名附けた。

深奥な心理學的考察から、かやうな道程を通つて同性愛となつた人間は、無意識に於て母の回想形像に永遠にぶらさがつてゐるといふ主張を正しとする。母への愛の抑壓によつて、彼はその無意識に於て同一のものを保存し、その時以來彼は母に對して貞操をたてる。彼が戀人として少年をおつかけ廻すのは、換言すれば母に對して自らを不貞ならしめる他の女から逃避してゐることになる。私達は直接の觀察からも、一見男性の刺激にのみ感じやすい男子は、眞實

は常人と同じに女子から發する魅力に屈服してゐることを立證し得た。併し彼はいつでも女子から受けた興奮を直ちに男性の對象にふりむけ、このやうにして、自らが同性愛を獲得した同一の機構を絶えず反復してゐるのである。

私達は同性愛の心的發生に關する只今の説明の含む意義を誇張してゐるのでない。只今の説明が同性愛の代辯者の公表した學説と甚しく矛盾撞着してゐることは明白であるが、その説明がこの問題を徹底的に闡明するに足りる程句括的でないことは私達とて十分知つてゐる。實地上同性愛と稱せられるものは、雜多な性心理的抑制過程から發したものであらう。そして私達が認識した過程は恐らくこれ等多數の過程の中の一つ、「同性愛」のある類型にのみ適用出來るものであるかも知れぬ。この同性愛の類型に於て、私達が求めてゐる條件を示して吳れた實例の數は、治療の效果が本當に現れた實例の數に比してずつと多かつた故に、世人が同性愛一般の原因としたがる、未知の體質的因子の共同作用を否定することが出來ぬと私達もまた告白せねばならぬ。禿鷹の空想を出發點として私達が分析を進めようとしたレオナルドが、同性愛のこの類型に屬してゐるといふ確乎たる臆測が存してゐなかつたなら、私達の研究した同性愛

のこの類型の心的發生に潛入する機會などなかつた筈である。

この偉大なる藝術家及び科學者がとつた性的態度に關してあまり詳しいことが分かつてゐなくても、同時代の人達の陳述はさう無茶苦茶なものでないといふところに信をおいても差支へない。この傳說の光彩の中に、性欲求と性活動の異常に低下した人間としての、恰も人類の高級な追求のために人類の卑俗な動物本能を離脫した人間としてのレオナルドの姿が現れて來る。ではレオナルドがいつ又いかなる方法によつて直接性滿足を追求したか、あるひはレオナルドが全然性滿足を拒否することが出來たかの疑問が殘されてゐる。だが私達は他人を絕對的に性行爲に驅りたたすある感情の流を彼に於てもまた探偵する權利を有してゐる。と申すのは、私達は廣義の性慾卽ちリビドがたとへ本來の目標から隔離され、あるひは遂行に躊躇してゐても、リビドそのものが人間の精神生活の構成分子をなしてゐないなどと信ずることが出來ぬからである。

私達は原型のままの性欲求の痕跡以外のものをレオナルドに豫期するを許されぬが、この痕跡こそ一つの方向を指示して、彼をどこ迄も同性愛者の中に數へるやうにして吳れる。彼が非

常に美しい少年や青年を門弟にしたといふことは誰もが特記してゐる事實である。彼がさういふ弟子に對して親切であり寛大であり、病氣になつた時は、まるで母が子供をいたはるやうに、實母が昔彼を愛撫したのもかくやと思はれるぐらゐ懇に自ら弟子を看病した。彼は弟子を才幹でなしに美貌によつて選んだがために、その門弟チエサレ・ダ・セスト、ボルトラフイオ、アンドレア・サライナ、フランチエスコ・メルチ等の中の一人も第一流の畫家とはならなかつた。彼等の多くは師匠を離れて一本立になることが出來なかつた。彼等は師匠の死後美術史に何の名前も殘さずに消滅してしまつた。その畫風からいへば當然レオナルドの門弟と稱してもよい他の人、例へばルイニ・ソドマの號で通つたバッヂは實は個人的にレオナルドと一面識もない人であつた。

門弟に對するレオナルドのそんな態度は一般性的動機などと何の關係もない、そんなことから彼の性特徴の結論は作れないといふ抗議が舞ひ上るのを私達はよく承知してゐる。だがわれわれの獨得な見方は師匠のふるまひの中から普通なら謎として棄て去るべき二、三の奇怪な性癖をつかみ出したと十分愼重に主張したいのである。レオナルドは日記をつけてゐた。彼は右

とを教はれ。」と書いてゐる。「私はボルトラフィオに旋盤を出させて、それで石を磨かしめ。……トランク二箇を注文する。おまへはボルトラ……」

から左に書いた小さい文字で自分にだけ分かる文句を綴つた。この日記のなかで不思議なことに、自分のことを「おまへ」とよんで、「レカ先生について根の乗法を教はれ。」と書いてゐる。「おまへはアボッカ先生から球體の求積法を教示して貰へ。」――あるひは旅行のところで「私は庭園の用件でミラノに行かうとしてゐる。……トランク二箇を注文する。おまへはボルトラフィオに旋盤を出させて、それで石を磨かしめ。――アンドレア・イル・トデスコ先生に書物をおいて行け。」あるところではまるで違つた意味の決心を書いてゐる。「おまへはその手記の中へ、地球は月と同じ、あるひは月に似た星であることを示し、もつて我が地球の高貴なる所以を立證せよ。」

この日記帳の中に――ほかの人間の日記と同じに、彼は日記の中で日常の重要な出來事に稀には一寸觸れたが、大抵は全然筆にしなかつた――その珍奇なためにレオナルドのどの傳記者も引用してゐるある記入が存してゐる。それは師匠のこまかい小遣錢のきはめて精細な記入である。恰も打算に汲汲たる一家の主人が記入したやうに綿密である。一方その中へは高額の支出がまるで記入されてない。この藝術家が經濟を理解してゐたことを物語るやうなものは何も

書かれてない。かかる種の記入の一つに、彼が門弟アンドレア・サライナに買つてやつた新調の外套の金額が載つてゐる。

錦　襴……………………………………一五リラ　四ソルヂ
縁飾り用の赤い天鵞絨…………………九〃　　　〃
紐…………………………………………――　　九〃
ボタン……………………………………――　　一二〃

別の非常に詳しい記入は、彼がある門弟の不良と盗癖のために損をしたすべての支出をさらけ出してゐる。「一千四百九十年四月二十一日に私はこの日記を書き始め、同時に再び馬の製作に着手した。ジヤコモは一千四百九十年マグダレエナの日に私の家にやつて來た。年齢は十歳である。(傍註。盗癖、嘘つき、我儘、大食。)二日目に私は彼のためにシヤツ二枚、ズボン一對ジヤケツを注文した。それに要する金額を支拂ふために、私がお金を別にして入れておいたのに、彼は私の財布から別にしたお金を盗んでしまつた。そして彼が盗んだのは分かりきつてゐたが、私はどうしても彼に白状さすことが出來なかつた。(傍註。四リラ……。)」それ

から、ずうと子供の惡事を並べたてて最後にお金の勘定を記入してゐる。「一年のうちに外套、二リラ、シャツ六枚、四リラ、ジャケツ三着、六リラ、靴下六足、七リラ。」

レオナルドの精神生活の謎を、彼の小さい弱點や性癖から解かうと想像だにしなかつた傳記者は、この珍奇な勘定書に出くはして、それは師匠の門弟に對する親切と寛大を强める證據だと證明書するのがおきまりである。傳記者はレオナルドのかやうな態度でなく、レオナルドがわれわれにかやうな態度のこの證據を遺したといふ事實に說明が要することを忘れてゐる。自分の親切を示す證據を私達に弄ばさす動機など彼にはなかつたのだから、私達は他の情緒的動機が彼にこんな記入をさしたのだと假定しなければならなくなる。ではその動機が何であるかを容易に摘發することは出來ぬ。そしてレオナルドの遺した手帳の中で見附かつた別の勘定書が、弟子の衣服等に關するこの不思議なこまかしい記入に光明を與へなかつたなら、私達は結局その動機が何であるかを報告することが出來なかつたのである。

カタリナの死後埋葬迄の費用……………………………………………二七フロリンス
蠟燭　二磅…………………………………………………………………一八　〃

十字架の建立費……………………………………………………一二 〃
葬龕……………………………………………………………………………四 〃
人夫費………………………………………………………………………八 〃
僧侶四人と小僧四人への謝禮……………………………二〇 〃
鐘つきへ……………………………………………………………………二 〃
墓掘人足へ………………………………………………………………一六 〃
許可證のために――役所へ…………………………………一 〃

合計　一〇八フロリンス

以前の費用

醫者へ……………………………………………四フロリンス

砂糖と燈料……………………………………一二 〃　一六 〃

總計　一二四フロリンス(二)

詩人メレジカウスキイのみがこのカタリナがどういふ人物かを私達に語つて呉れた人であ

る。別の二つの短いノオトから、彼はレオナルドの實母、ギンチ生まれの貧しい百姓女が一千四百九十三年にミラノにやつて來て、その當時四十一歳になつた息子を訪問したこと、女はそこで病氣に罹り、レオナルドの手によつて病院に入院させて貰ひ、彼女が死んだ時彼は澤山の費用を出して鄭重に埋葬してやつたことを知つた。

（一） メレジカウスキイより。――レオナルドの內部生活に就いてもきはめて僅の報告しかないが、その不確實な報告の悲しい典據として私は、同一の勘定書がソルミの本に非常に變更されて引用されてゐるのを知らしておかう。その本ではフロリンスをソルヂに變へてあるのはどうかと思はれる。この計算ではフロリンスは古い金貨でなくて、後年用ひられた一リラ三分の二、若くは三十三ソルヂ三分の一にあたる貨幣を意味してゐると考へてよい。――ソルミはカタリナなある時代レオナルドの家に傭はれてゐた女中としてゐる。この勘定書の二つの記錄をどういふものから採錄したかその原書は私の手にはひらない。

この人間心理に通じた小說家の今の解釋がどこまで本當だか分からぬが、この解釋は澤山の內在的な尤もらしさを含んでゐ、私達がレオナルドの感情活動から知つてゐるすべてと立派に合致してゐる。その故に私はこの小說家の解釋を正しと認めずにはをられない。レオナルドは

彼の感情を研究といふ桎梏に縛りつけ、感情の自由な表現を禁止する狀態にあつた。併し彼にとつてもまたおしこめたものが、ある機會に無理やりにおもてにはみ出る場合があつた。そしてレオナルドが嘗ては熱愛した母の死がさやうな機會を作つたのである。葬式の費用のこの勘定書の中に、母を哀悼する不可解にまで歪められた表現が示されてゐる。どうしてそのやうな歪みが現れたかは不思議なぐらゐである。そして常態な精神過程の見地からはその歪みは決して理解出來るものでない。しかるに私達は神經症特に所謂强迫神經症の變態條件の下に同じものを知つてゐる。さういふ疾患にあつては、熾烈なしかも抑壓によつて無意識となつた感情の表現がとるにも足らぬ、馬鹿馬鹿しいからくりの中に轉移されてゐるのを見る。この抑壓された感情の表現を極度に壓迫して、この感情の强度をとるにも足らぬものと批評さすまでにしたのは、實にそれに對立する反對力のためである。このとるにも足らぬ表現行爲を遂行さす絕對的な强迫の中に、意識へ上るのを拒否しようとする衝動の無意識內に根を持つた眞の權力が暴露されてゐる。强迫神經症の機構を想起することによつてのみ、私達は母の死に際してのレオナルドの埋葬費用の勘定書を說明することが出來る。無意識に於て彼は未だ小兒時代のやうに、

小兒時代の愛情に對して後年にはひつて來た抑壓の抗爭は、母のために日記帳の中に他のもつと手厚い記念碑をたてることを許さなかつたが、この神經症的葛藤から妥協として現れたものが實行されねばならなかつた。かやうにして勘定書が記入され、後世の人の知識に不可解な姿をとつたのである。

埋葬の勘定書から得た見方をそのまま、弟子のために消費した勘定書に移すことは決して冒險とは思はれない。この見方から考察すれば、それはレオナルドに於てリビド衝動の僅少な殘物が歪められた表現を强迫的に作つた實例であつたといへる。母と弟子、彼自らの小兒時代の美しさの生寫は——彼の本質を支配する性抑壓がかやうな特徴を許した限りは——實に彼の性對象になつてゐたのである。そして彼等のために使つた勘定書をきはめて精密に書きつけるといふ强迫は、この始原的な葛藤の奇怪な暴露であつた。かくてレオナルドの戀愛生活が眞實同性愛の類型に屬してゐたことが分明してくる。私達こそその心的發展を發見することが出來たのだ。そして、彼の禿鷹の空想に於ける同性愛的狀況の現出は、私達の理解に屆くものとなつた。何となれば、それは同性愛のあの類型に就いて私達がさきに主張したものを明確に語つて

ゐるからである。それは「母へのこのエロチックな關係によつて私は同性愛者となつた。」といふ飜譯を必要とするのである。

レオナルドの禿鷹の空想はやはり私達をひきつける。性行爲の敍述をかくも明瞭に想起せしむる言葉「そして幾度も幾度も彼の尾で私の唇をなでて呉れた。」の中に、レオナルドは母と子供のエロチツクな關係の强度を高調してゐる。母（禿鷹）の活動と口帶への集中とのこの結合から、空想の第二の回想内容を摘發するのは困難でない。私はかう飜譯出來る。母は私の口に幾度も幾度も力强くキスして呉れた。この空想は母からの授乳と母からの接吻の回想から合成されてゐる。

四

親切な性質はその最も祕密な、彼自らにさへ姿を見せない精神衝動を、他人、彼を知らない他人を、その感動がどこから湧き出るかを自ら氣附かずに强烈に感動せしむる創作を借りてこ

の藝術家に表現さすやうに許した。レオナルドの畢生の作品から、その小兒時代の最も强い印象として彼の回想の中に保存されてゐるものを立證することが出來ないものだらうか。私達は立證出來ると期待しなくてならぬ。併しこの藝術家が作品の中へ寄與する以前に、彼の生活印象がいかなる深刻な轉向を經驗したかを考察するにあたつて、レオナルドに關しては、さやうなものを證據立てようとする見込を斷然とひつこめなくてはならないだらう。

レオナルドの繪を考へた人は、彼がその女性の唇に漂はした驚くべき、魅するが如き、謎にも似たあのほほゑみの記憶を思ひ出す。つむんだ、うねつた唇の上に漂ふ不斷のほほゑみ、それは彼の繪畫の特徵となり、「レオナルド風」と好んで稱せらるるものである。フイレンチエ女なるモンナ・リサ・デル・ジオコンドの世にも稀なる美貌に漂ふそのほほゑみは、見る人を激しく感動せしめ、見る人の頭を混亂せしむ。このほほゑみは解釋を必要とした。そして種種さまざまな解釋が下された。とはいへ、その一つとして滿足なものとは申されない。「モンナ・リサを暫しの間じつと見つめたあとで、彼女に就いて語るすべての人の頭を恍惚とさしてより、早くも四百年の歲月は流れた。」

ムウテルは書いてゐる。「見る人の心を特に魅するものは、このほほゑみの悪魔的な魅惑である。百千の詩人と著述家がこの女に就いて筆をとつた。この女はある時は私達に誘惑するやうにほほゑみかける。この女はある時は冷やかに茫然と虚空を凝視してゐる。何人も彼女のほほゑみを解くことが出來ず、何人も彼女の心胸を解することが出來なかつた。一切は、風景さへ神祕な夢見るやうな姿である。恰も官能の鬱陶しさに戰慄してゐるやうである。」

多くの批評家はモンナ・リサの微笑の中に、異つたこの二つの要素が結びついてゐるといふ考へを懷いた。そのために彼等はこの美しいフイレンチエ女の表情の中に、女性の戀愛生活を支配する矛盾、内氣と誘惑、身も心も捧げるしとやかさと男を異物のやうに食ひはむ一徹に燃え上る肉慾の完全無缺な描寫を摑んだ。ミユンチエも言つてゐる。「モンナ・リサ・ジオコンドが殆ど四世紀にわたつて、彼女の前に群る讚美家に蠱惑に滿ちた不可解な謎を投げたかを世人は知つてゐる。（私はピエル・ド・コルレイのペン・ネエムに隱れた纖細な著述家の筆致を借りる。）女性なるものの精髓をこのやうに飜譯したものがあらうか。やさしさとコケツトリイ、貞淑と沈默の官能、祕めようとする心臟の高鳴りの、反映する腦髓の、自らを堅固に守り、

それの光輝にのみ一身をゆだねようとする人格のすべての神祕……。」伊太利のアンジエロ・コンチはルウヴルに於て太陽の光に照り映えてゐるこの繪畫の前に立つた。「女は尊い靜寂の中にほほゑんでゐる。征服の、殘虐の、彼女の本能、民族の全遺傳、誘惑と籠絡の意志、嘘つく女の優美、むごい目的を祕めた親切、すべてはほほゑみの帷のうしろに、ある時は現れある時は消えて、彼女の微笑の詩の中に溶けこんで行く……。善と惡、殘虐と憐愍、優美と狡猾、彼女はほほゑんでゐる……。」

レオナルドはこの肖像畫を多分一千五百三年から一千五百七年にわたつて四年間もかかつて、丁度フイレエンチエの第二回の滯在中五十歲以上の年齡の時に書いたのである。ワサリの報告によると、レオナルドは着坐中の夫人の氣を散ぜしめ、彼女の顏にその微笑を保たさすために特別の技巧を使用した。繪筆がカンバスの上に表現した當時の優美の殆どすべては、現在遺されてゐる繪面の上に姿をとどめてゐない。書き上げられたその當時、この繪畫は凡そ藝術が製作出來るものの最高の作品とまで激賞された。それにも拘らず、レオナルドは自らこの繪畫に滿足しなかつた。彼は未完成だと斷言して、注文した人に手渡さずに佛蘭西迄一緒にもつ

て行つた。佛蘭西で彼のパトロンなるフランソワ一世がこの肖像畫を彼からルウヴルに買ひとつた。

モンナ・リサの表情の謎は解けないものとしてすて去つて、私達は彼女の微笑が四百年この方この畫を見る人達と等しく、美術家をもまた強く感動さしたといふ明白な事實を記してみたい。この魅力あるほほゑみは爾來彼及び彼の門弟のすべての畫に移された。レオナルドのモンナ・リサが一つの肖像畫であるなら、彼が勝手にモンナ・リサの顔へモデル女自らが所持してゐない、表現するに殆ど困難なその特徴を賦與したと假定することは出來ない。むしろ彼がこのほほゑみをこのモデルの夫人に見ひ出し、それの魅力にひきつけられ、その時以來彼は自らの空想の放膽なる創作の上に、このほほゑみを賦與したのだと私達は考へたくなる。例へばコンスタンチノフはこのやうな考へ方をもつて次のやうに敍してゐる。

「モンナ・リサ・デル・ジオコンドの肖像畫に夢中になてゐた長い年月に、彼はこの夫人の顔に漂ふ表情の上の微妙に感情の激しい共鳴をよびさまされてこの特徴――特にあの神祕なほほゑみと世にも稀なるまなざし――を彼が後年描いたすべての顔に移し植ゑたのである。ジオコ

ンドの表情上の特色はルウヴルの洗禮者ヨハネの繪の上にさへ見ひ出すことが出來る。――だがその特色は何をいつても聖アンナのあのマリヤの顏に明瞭に描かれてゐる。」

併し實相は全く違つてゐた。ジオコンドのほほゑみがこの藝術家を最早片時も離すまいまでにひきつけたあの魅力が、どういふ深い理由に基づいてゐるかを探らうとする希望が、彼の數多い傳記者の心に燃えてゐた。モンナ・リサの繪に於て「文化人の戀愛體驗の一切の權化」と評し、「レオナルドに於て、常に不吉なものを告知するあるものと結びついてゐるやうに見える、あの測り知るべからざるほほゑみ」とたくみに評したペエタアは、次の言葉をもつて私達を別の道に導いて吳れた。

「加ふるにこの繪は肖像畫である。この顏が子供時代から彼の夢の蜘蛛の巢に織りこまれてゐたやうに想像することが出來る。そしてたとへ公然たる證據がなくとも、この顏こそ彼が遂に發見して形體を與へた理想の女であると信じたくなつてくる……。」

モンナ・リサに於てレオナルドは自らに邂逅した。この故に彼自らが所持する本質の極めて多くのものを、繪畫の中に搬入することが出來るやうになつた。「その畫中の顏は昔から謎の

やうな同情をもつてレオナルドの精神に宿つてゐた。」とヘルツフエルトが申す時に、その考へ方は只今のと非常に似通つてゐる。

私達はこの指示を明瞭な輪郭に築き上げようと試みたい。レオナルドはモンナ・リサのほほゑみの俘となつた。何故なら、このほほゑみは昔から彼の心にうごめいてゐたあるもの、恐らくある古い回想を彼によびさましたと想像することが出來る。この回想はひと度よびさまされば、最早片時も彼を離さないまでに重大なものであつた。彼はその回想を再び新しく表現しなければならなかつた。モンナ・リサのやうな顏が子供時代から彼の夢の蜘蛛の巣に織りこまれてゐたやうに想像出來るといふベエタアの斷言は、信ずべきものでありそのまま受けとつてよい價値のあるものである。

ワサリはレオナルドの最初の藝術上の試作は「ほほゑんでゐる女の顏」(teste di femmine, che ridono)であつたと報告してゐる。疑ふ餘地のない、それだけでも證據として十二分な文句が次のやうに綴られてゐる。「彼は少年時代に粘土でもつてほほゑんでゐる女の顏を作つて、石膏で複製した。そして子供の顏も作つた。まるで大家が作つたやうに實に麗しい顏であつた。」

即ち彼の美術上の實習は二種の對象の描寫で始められたことを敎はる。この二種の對象は私達が禿鷹の空想から抽き出した二種の性對象を思ひ出さしめる。若し美しい子供の顏が自らの小兒時代の彼の姿の複寫であつたなら、ほほゑんでゐる女は彼の實母カタリナの複寫に外ならないといへる。そして彼の母が不可思議な微笑をいつも漂はしてゐたが、彼はこの微笑を永遠に失ひ、後年あのフィレンチエの貴婦人の顏に再びそれを見ひ出した時に、彼は忽ちその微笑の俘になつたといふ可能を想像し始めてくる。

モンナ・リサと年代的に最も近いレオナルドの繪畫は聖アンナ、マリヤ、子供の基督を描いた所謂「聖アンナ」である。二人の女の顏にレオナルド風のほほゑみが最も美しく描かれてゐる。この繪がモンナ・リサの肖像畫にくらべてどれほど先きに、あるひはどれ程あとに書き始められたか報告されてない。二つの製作が數年に亙つてゐたのだから、レオナルドは同時に二つの繪畫に手を着けたと推定してもよい。モンナ・リサの姿への潛心が丁度レオナルドに聖アンナの構圖を空想から作るやうに使嗾したなら、それは私達の豫想にきつぱりあてはまつてくるものである。ジオコンドのほほゑみが彼に母への回想をよびさましたのなら、私達は母性の

榮光を創造し、貴婦人に於て發見した微笑を、母に再現さすようにまづ彼を驅りやつたと解することが出來る。かくてモンナ・リサの肖像畫に懷く私達の興味を、今日ルウヴルに保存されてゐる、同じに美しい別の繪畫に移すやうに許して呉れる。

娘と天使の子供が側にゐる聖アンナは、伊太利の繪畫に於てはあまり人が手をつけたことのない題材である。ムウテルは述べてゐる。レオナルドの描寫はいつでも昔からのありきたりと非常に隔たつてゐた。「ハンス・フリイス、ホルバイン、ジロラモ・デイ・リブリのやうな二三の畫家はマリヤの側にアンナを坐らし、二人の女の間に子供を配した。伯林畫のヤコブ・コルネリツツのやうな畫家は、アンナがマリヤの小さいからだを兩手に抱き、マリヤの膝の上にそれより更に小さい子供の基督を坐らすやうに聖アンナを描出した。」レオナルドの場合では、マリヤは母の膝の上に坐つて、小犬と戯れてゐる、恐らく小犬をいぢめてゐる子供を少しかがんで兩手で掴まへようとしてゐる。祖母は片方の露はな腕を腰に立てて、靜かな微笑を浮べて二人を眺めてゐる。三人の位置の構圖は確に不自然といへない。併し二人の女の唇の上に漂ふほほゑみは、たとへモンナ・リサの繪に於けるものと明かに同じものであつても、あの無氣味な

不可解な性質を失つてゐる。そのほほゑみは親しみと靜かな幸福を示してゐる。(*)

この繪畫にある程度まで潛心すれば、見る人の心に突然にある理解が開けてくる。レオナルドのみがこの繪を、彼のみに禿鷹の空想が創作出來たと同じに、描寫することが出來たのだ。この繪畫の中に彼の小兒時代の歷史の合成が挿入されてゐる。その繪畫上のこまかしい點はレオナルドの極めて人間的な生活印象から說明がつく。父の家にはひつて彼はやさしい繼母ドンナ・アルビエラばかしでなく、父の母である祖母モンナ・ルチヤを見た。この祖母はこの世の大抵の祖母がその庶子に對するやうには決して冷淡でなかつたと私達は想像したい。かやうな情況が彼をして母と祖母に守護された幼年時代の描寫を實現せしめたに相違ない。この繪畫の他の著明な特徵はなほ大きな意義を有してゐる。マリヤの母であり、子供の祖母である聖アンナは刀自であるべきだのに、この繪では聖マリヤより幾分か年上に、幾分か嚴肅に、未だ凋まない美しさに輝く若い女として描かれてゐる。レオナルドは事實子供に二人の母を與へた。一人の母は子供の方に手をさしのべ、一人の母はうしろの方に坐つて、二人とも母なる幸福の靜かなほほゑみを浮べてゐる。この繪畫の特色は必然批評家の驚異をよびさますものであつた。例

へばムウテルはレオナルドは老い、皺を描く元氣が出なかつた、この故にアンナをも輝くやうに美しい若い女に描いたのだと說明してゐる。併し私達はこの證明に滿足することが出來ようか。他の批評家は「母と娘の同年配」を否認せんとする態度をとつた。併しムウテル流の說明は聖アンナの若返つた姿は繪空事であつて、ある目的のために作られた空想でないといふ事實の證明で十分である。

（*）コンスタンチノワ。「マリヤはジオコンドのあの謎のやうな表情を思ひ出さす微笑を浮べて、愛兒をやさしく見下ろしてゐる。」そして別の箇所でマリヤに就いて「彼女の額にジオコンドの微笑が漂つてゐる。」と書いてゐる。

レオナルドの小兒時代はこの繪のやうに注目すべきものであつた。彼は二人の母を有してゐた。一人は彼の實母即ちカタリナである。彼は三歲と五歲の間にその實母を永遠に失つてしまつた。もう一人は若いやさしい繼母、彼の父の妻、ドンナ・アルビエラである。彼は小兒時代のこの事實を前述の事實、即ち母と祖母の存在に結びつけ、これ等二つの事實を一つの混合したものに壓縮し、かやうにして聖アンナの構圖を形成したのである。子供から離れたところに

ゐる母の姿は、祖母といふべきだが、その容貌からみても、子供との空間的關係からみても、昔の實母カタリナに匹敵してゐる。聖アンナの靜かな微笑を借りてこの藝術家は、この不幸な女カタリナが最初は夫、次いで息子を、おのが競爭者なる上流の女に渡さなければならなかつた際に、心の底に滾りわたつた嫉妬を否定し嫉妬を隱蔽した。(*)

かくて私達はレオナルドのほかの作品から、モンナ・リサ・デル・ジオコンドのほほゑみは、その第一年の小兒時代の母の回想を男子によびさますといふ豫想を立證することが出來た。レオナルド以來伊太利の畫家は、マドンナと貴婦人の中に、繪を書き、物を究め、耐へ忍ぶやうに運命づけられたこの偉大な息子を、この世界に生み落とした貧しい百姓娘カタリナの、謙遜に首を垂れ、不可思議までに靜かなほほゑみを浮べた姿を描くやうになつた。レオナルドがモンナ・リサの顏にこのほほゑみが有する二重の意味、卽ち果てしなき愛情の囑望と不吉を告知する威嚇(ペエタアの言葉)を再現することに成功した時に、彼はこの繪に於てもまた小兒時代の回想內容に忠實であつた。何となれば、母の愛情は彼に對して宿命となり、彼の運命を決し、彼を待ち伏せる窮迫を決した。その禿鷹の空想が意味するやうな愛撫の激しさは、あまり

にも自然なものであつた。棄てられた貧しい母は、嘗て味はつた愛撫の思ひ出のすべてと新しき愛撫へのあこがれを、母性愛の中へ集中させなければならなかつた。自分が夫を持たないことを自らに償ふためばかりでなく、愛撫して與れる父を持たないことを子供に償ふために、彼女はさうせざるを得なかつた。この世の中の滿たされない母と同じに、彼女は小さい息子を夫の代償にとり、彼のエロチィクのあまりの早熟なめざめをもつて、その男らしさの一部を奪ひとつてしまつた。自ら授乳し養育する乳兒に注がれる母の愛は、大人になつた子供に注がれる彼女の後年の愛情に比しては、譬へようもないほど深刻なものである。その愛はあらゆる精神的願望ばかりでなく、あらゆる肉體的欲求をも果たして與れる、滿ち切つた戀愛關係の性質を帶びてゐる。若しこの愛が人間の手に達し得る幸福の形態の一つを描くなら、これは昔の昔に抑壓された倒錯と名附くべき願望衝動をも婉曲に滿たして與れる可能に由來してゐる。幸福に浸る若い夫婦關係に於て、父は自分の子供特に小さい息子が、自分の戀敵になつたやうに感じ、同時にそれは後年愛子に懷く深い無意識的な敵愾心の出發點となる。

レオナルドがその生涯の高潮時に、嘗ては愛撫して與れた母の唇に漂つてゐたやうな、あの

静かに魅するが如きほほゑみに再會する迄はずうと、女の唇に漂ふかやうな愛情を二度と貪らないやうに嚴禁された抑制の支配に縛られてゐた。併し彼は既に畫家となつてゐた。この故に彼はこのほほゑみを繪筆を通して再現しようと刻苦した。そして彼自らが筆をとつて描いたすべての繪にも、弟子を督して描かしめたすべての繪畫、レダ、ヨハネ、バッカスにもその微笑を與へたのである。ヨハネとバッカスはこの類型から轉化したものである。ムウテルは言ふ、「聖書の蝗食鳥からレオナルドはバッカス、アポロを作つた。それは不思議な微笑を唇に浮べやはらかい太股をぴつたり組み、魅するが如きまなざしでわれわれを見つめてゐる。」これ等の繪畫は一つの神祕を呼吸してゐる。この神祕の殿堂へ我等はおしいる勇氣がない。僅にレオナルドの初期の作品へ連絡をつけようとする試みだけが許される。これ等の姿は例によつて男女であるが、それは最早禿鷹の空想の意味に於てでない。それは女の肉體を持つた、女のやうにやさしい美青年である。青年は目を伏せてゐない。勝ち誇つたやうな、恰も青年が口に出してはならないある大きな幸福を知つてゐるやうな、不思議なまなざしで見つめてゐる。あの魅するが如きほほゑみから、それが戀の祕密であると想像出來る。かやうな姿の中に、レオナル

ドは自らの戀愛生活の不幸を否定し、母に眩惑された子供の願望實現を、男性と女性のかかる陶然たる合體の中に描寫することによつて、自らの不幸を藝術的に克服したのである。

五

レオルナルドの日記の一章に、その特異な內容及び一つの微細な形式上の間違ひによつて、讀者の注意をひきつけるものが存してゐる。

彼は一千五百四年七月にかう書いてゐる。「Adi 9 di Luglio, 1504, mercoledi, a ore 7 morì Ser Piero da Vinci, notalio al palazzo del Potestà, mio padre, a ore 7. Era d' età d' anni 80, lasciò 10 figlioli maschi e 2 femmine.」（一千五百四年七月九日火曜日七時セル・ピエロ・ダ・ギンチ、ポテスタ宮殿の公證人、私の父は七時に死んだ。行年八十歲。十人の息子と二人の娘を殘して去つた。）

卽ちこの記事はレオナルドの父の死去に關してゐる。形式上の小さい間違ひといふのは、七

時といふ時間を二度も反復してゐるところにある。恰もレオナルドが初めに既に書いたのを終りに忘れてゐるやうに反復してゐる。これはとるにも足らぬ些細な間違ひである。精神分析家以外の人は、こんなこまかいことに注意など向けない。たとへ注意を拂つても、そんな忘却は放心の時、興奮の時に誰にでも現れるもので、別にとりたてた意味などないといふ。

精神分析家はこれとはまるで違つた考へをとる。精神分析家にとつては、隱れた精神過程の表現ほど小さいものはない。かやうな忘却若くは反復は意味重大であること、さやうなものの中へ普通隱蔽されてゐる衝動がはみ出る時に、世人はそれを放心と考へなくてならぬことを、精神分析家は早くに學んだのである。

カタリナの葬式のための勘定書、弟子のための勘定書と同じに、その記事もまた、レオナルドが自らの情緒の抑壓にしくじつて、ずつと長らくおしこめておいたものが、歪んだ表現を借りて飛び出た實例だと言ひたくなる。形式もまた同じである。それは同一の鹿爪らしい正確、數字の同じ進出である。(二)

私達はかやうな反復を躊躇と名附ける。反復は情緒的强調を示す有名な方法である。かやう

な事實は、私達に例へばダンテの「天國篇」の中にある、地上の品位なき法王に吐きつけるサン・ピエトロの怒の言葉を想起せしむる。(三)

„Quegli ch' usurpa in terra il luogo mio

Il luogo mio, il luogo mio, che vaca

Nella presenza del Figliuol di Dio,

Fatto ha del cimiterio mio cloaca."

若しレオナルドに情緒抑制が存さなかつたなら、日記の記事は次のやうになつたであらう。「今日七時私の父、セル・ピエロ・ダ・ギンチ、私の哀れな父は死んだ。」併し躊躇を死亡通知といふ一番どうでもよい限定、卽ち死亡時間に轉移する事によつて、その記事から總ての悲哀を拭ひ去り、私達をしてここにあるものが隱蔽され、あるものが抑壓されてゐる事を頷かしめる。

公證人であり、代代公證人を家業とする彼セル・ピエロ・ダ・ギンチは精力旺盛な男であつた。そのために彼は人氣と富を一身に集めた。彼は妻を四人も娶つた。最初の妻二人は子供もなし

にこの世を去つた。三番目の妻はレオナルドが二十四歳の時即ち父の屋敷から師匠であるヱロッキオの仕事場に移つて可なりしてから最初の嫡子を生んだ。五十歳になつてから娶つた四番目の最後の妻は、九人の息子と二人の娘を生んだ。(三)

(一) この記事でレオナルドは非常な間違ひをしてゐる。即ち父が七十七歳であるのを八十歳だと書いてゐる。私はこの誤謬を問題にしたくない。

(二)「神の子の御まへに空しかる、わが位、わが位、わが位をば僭奪したる者わが墳墓を溝となしたり。」(天國篇。第二十七曲、二十二―二十五。)

(三) レオナルドは日記のこの箇所で同胞の數をも間違へてゐる。それは同胞の人數の一見した正確に對して注目すべき對照を作つてゐる。

確にこの父もまたレオナルドの性心理的發展に對して意義あるものとなつた。小兒の第一年に父が存在してゐなかつたための陰性の意味だけでなく、後年の少年時代に父が存在してゐたために直接影響を與へた。小兒として母を熱望するものは、父の地位を僭奪しようと欲し、彼の空想に於て自らを父と同視し、後年父を克服することを人生の使命と觀ずるやうになる。レオナルドがやつと五歳になつて祖父の屋敷にひきとられた時に、若い繼母アルビエラは少年の

感情に於ては確に母の地位にあつた。そして少年は父に向つては常態と名附けてよい競爭關係に立つてゐた。同性愛への決定は思春期の近づいた頃に初めて現れたのである。この決定がレオナルドに下された時に、父との同視作用は彼の性生活に意義を失つたが、それは非エロチックな活動の他の領域に續いて行つた。私達は彼が華美を好み、美しい衣服を愛し、從僕を雇ひ、馬を飼つたことを聞いてゐる。尤もワサリは彼が「殆ど無一物であまり働かなかつた。」と述べてゐるが。私達は彼の審美感がこの道樂の原因をなしてゐたと思はぬが、その道樂の中にまた父を模倣し、父を凌駕しようとする强迫を認める。父は貧しい百姓娘の目には貴公子であつた。この故に貴公子を眞似ようとする拍車、「ヘロド以上のヘロドをぶらう」とする衝動、いかに自分が本物の貴族に見えるかを父に誇示しようとする衝動が息子の心に存してゐた。

藝術家として働く人は自らの作品に向つては父のやうな態度を持つものだ。畫家としてのレオナルドの作品の中に、父との同視作用は宿命的な結果を齎した。彼は作品を創つたが、丁度父が自分の息子のことを一向心に留めないと同じに、彼もまた自らの作品を一向心に留めなかつた。父が彼に懷いた配慮も、この强迫の中の何物をも變化さすことが出來なかつた。何とな

れば、この强迫は最初の乳兒時代の印象に發し、無意識の中へ抑壓されたものは、後年の體驗をもつて決して訂正することが出來ぬからである。

文藝復興の時代にあつては——勿論その後と雖も同じであるが——どんな藝術家とて最屓にして吳れる大名や後楯、卽ちパトロンなしには行けなかつた。藝術家の運命はさういふパトロンの掌中にあつた。レオナルドは自分のパトロンに野心に滿滿たる、豪奢な、外交的に老猾なしかも氣まぐれで信用のおけぬ、黑奴の渾名で通つたロドギコ・スフオルツアを持つた。ミラノの彼の宮殿で彼は生涯での最も華美な時代をおくつた。大公に抱へられてレオナルドは最も放膽に創作力を發揮した。聖餐、フランチエスコ・スフオルツアの乘馬像がその當時の活動を物語つてゐる。ロドギコ・モロの身に破滅の日が來る迄に旣にレオナルドはミラノを去つてゐた。そして大公は佛蘭西の牢獄に幽囚の身となつて、終に獄死の最後を遂げた。パトロンの悲愴な最後の通知を手にした時に、彼は日記にかう書きつけた。「Il duca perse lo stato e la roba e liberta e nessuna sua opera si fini per lui.」(大公は領土、財寶、自由を失つた。そして大公が企てた事業は何一つ完成されなかつた。)彼がここで自分のパトロンに對して、後世の人

が自分に對して放つたと同一の非難を加へた。恰も自らが作品を完成しなかつたのは父と同じ地位にある人の責任であるやうに非難したのは、誠に注目すべきものであり、確に意義深いものといへる。だが現實では彼は一度も大公を非難したことはなかつたのである。

だが父の模倣が藝術家としての彼を損ねたのなら、父への反抗は科學者としての藝術に劣らぬ、彼の偉大な業績の小兒的條件であつた。メレジカウスキイの美しい言葉を借れば、他人が未だ眠つてゐる暗黒の中に、彼は餘りに早くめざめた人になぞらへられる。すべての自由研究の辯護を包括する大膽な掟「Chi disputa allegando l' autorità non adopra l' ingegno ma piuttosto la memoria.」(權威に囚はれて論爭する人は、悟性でなしに、記憶によつて動く人である。)を彼は敢て公言したのである。かくて彼は近代的な自然科學者の第一戰に立つた。そして驚くべく豐富なる認識と觀念は彼の勇氣に酬いた。彼は觀察と自らの批判に立脚して自然の祕密に觸れようとした希臘以來の最初の人であつた。併し彼が權威の蔑視と「古代」の模倣の排撃を學び、自然研究こそあらゆる眞理の根元であると反復指示した時に、世界を驚異の目で眺めたあの小さい男の子に早くも押し迫つた荷擔を、人間が達し得る最高の昇華に於て再演し

たに過ぎなかつた。科學的抽象を具體的な個人的な體驗に反譯することによつて、古代と權威は單に父に相當し、自然はここでもまた彼を養育した、やさしい親しい母であつた。大概の人の子に於て——今日にあつても又原始時代にあつても——何等かの權威に賴らうとする欲求が絕對的になり、ために、若しこの權威が脅されるなら、彼等の世界が動搖する時に、レオナルドのみはこの權威の支持なしにやつて行ける人間であつた。彼がその生涯の第一年に父なしにやつて行くことを學ばなかつたなら、彼は到底さやうな眞似は出來なかつたであらう。後年の科學的硏究に於ける彼の大膽と不羈獨立は、父によつて抑制されない小兒期性的好奇を前提とし、同じ精神は性なるものの拒絕の下にもなほ存續してゐたのである。

レオナルドのやうに、何人かがその第一年に父が下す威嚇を逃れ、彼の探究に於て權威の桎梏を蹂躙した時に、若しこの人が後年信仰者となり、この人にドグマ的な宗敎を拒む力がないことを私達が發見したなら、それは私達の豫想に非常に矛盾するものである。精神分析は私達に父錯綜と神の信仰の密接な關聯を敎示して吳れ、人間的な神は心理學的には高められた父に外ならぬことを示して吳れ、父の權威が崩壞するや、いかに靑年が忽ち宗敎的信仰を失ふかを

日常私達の眼前に展開してくれた。私達は親錯綜の中に宗教的要求の根元を認識する。全能の正しき神と慈悲深き自然は父母の巨大な昇華、早期小兒時代の父母に對する觀念の復活と再興のやうに思はれる。宗教心の起原は生物學的には人間の小さい子供の、自分一人では生存出來ぬ、そして他人の保護を必要とするあの長い期間の中に求められる。若し子供が大人になつて生活の大きな權力に直面して、自らの眞の孤獨と自らの眞の弱さを認識する時に、その時の立場を小兒時代に於けるやうに感じ、その絕望を小兒時代の保護力の退行的復活をもつて否認しようと試みる。宗教がそれの信仰者を救ふ神經症的疾患への防禦は、宗教が個體及び全人類の罪惡意識の中核をなす親錯綜を信仰者から除去し、親錯綜から彼等を解放してやるが、不信仰者はこの使命を自力で解放しなければならぬといふ事實から立派に說明がつく。

レオナルドが示す實例は宗教的信仰に關するこの見解を證據づけるやうに思はれる。彼を不信仰者、あるひはその時代に世間一般からよばれたやうに、基督教の背叛者と責めよつた彈劾は早くも彼の存命中に放たれてゐた。それに關してはワサリがレオナルドに就いて物語つた最初の傳記の中に確實な言葉が發見出來る。一千五百六十八年に出た彼の傳記の第二版ではその

言葉は削除されてゐる。宗教に關してその時代の人が極度に神經過敏であつたにも拘らず、レオナルドがその手記の中でも基督敎に對する自らの態度を公然と宣言してゐるのは、私達には十分合點の出來るところである。科學者として彼は聖書の創世記の記事に一歩も迷はされなかつた。例へば彼はノアの洪水の可能を反駁し、地質學的には現代の科學者と同じに大膽にも百萬年の大昔のことだと嘯いた。

彼の「豫言」の中に敬虔な基督教信者の感情を侮辱するやうな言葉が澤山ものされてゐる。例へば聖徒の像への祈禱に就いて次のやうに書いてゐる。

「人間は耳があつても聲の聞けない、開いた目があつても物の見えない人間に聲をかける。彼等はその人間に聲をかけても何の返答も得られない。彼等は耳があつても物の聞えぬ人間から祝福を乞ひ求め、盲目である人間のために燈明をささげる。」

あるひは受苦日の悲歎に就いて次のやうに書いてゐる。

「歐羅巴のどんな土地でも、澤山の民衆が東洋で死んだたつた一人の人間の死のために泪を流すのである。」

レオナルドの藝術から世人は、彼が聖徒の像から敎會的桎梏の最後の遺物を剝ぎとつて、偉大にして美麗なる人間的感覺を表現するために、聖徒の像を人間的なるものに引きおろしたと判斷した。ムウテルはレオナルドが廢頽情緒を克服し、人間に官能と生活享樂の權利を復活さしてやつたことを稱讃してゐる。偉大なる自然の謎の探究の深さを示すその手記に於て、レオナルドは造物主、この莊嚴なる一切の神祕の究極の原因に向つて決して驚歎の叫びを惜まなかつたとはいへ、自らこの神の力に對して個人的關係を固持しようとする態度を寸毫も示さなかつた。彼の晩年の深奧な學識を示す信條の中に、アナンケ、即ち自然法則に自らを委ね、神の慈悲、神の惠みから何等の輕減をも求めようとしない人間のあきらめが呼吸してゐる。レオナルドがドグマ的な宗敎、個人的な宗敎を克服し、その燃ゆるが如き科學研究によつて、敬虔な基督敎信者の世界觀から遠く離反したのは明かである。

小兒の精神生活の發展に關する如上の見解から、レオナルドもまた小兒時代にその最初の探究心を性の問題に集中したといふ假定が考へられる。だが彼はそれを透明な隱蔽を通して私達に透かして見せて吳れただけである。即ち彼はその探究心を禿鷹の空想に結びつけ、鳥の飛揚

の問題を特別な運命の鐵鎖によつて、彼に研究するやうに命ぜられたもののやうに力說した。鳥の飛揚を論じたその手記の朦朧としたしかも豫言のやうな響を持つ一章は、彼が飛行術を自ら模倣しようとする願望に、いかに多大の情緒的興味を結びつけたかを最も美しい筆致で證據立ててゐる。「大きな鳥は彼の大きな白鳥の背中からその最初の飛行を試みる。宇宙は驚歎の聲でうづまり、あらゆる文書は彼の名聲でうづまる。そして久遠の榮光は彼が生誕した昔の古巢に運ばれる。」彼は多分一度は自分で飛行出來るものと希望してゐた。そして私達は人間の願望實現の夢から人間がこの希望の實現によつていかなる歡喜を期待したかを知ることが出來る。

だが何故に澤山の人間が飛行の夢を見るのであるか。精神分析はその疑問に返答を與へた。飛行あるひは鳥はある願望の隱蔽に過ぎない。この願望を認めるために、言語學的、客觀的の橋梁以上のものを必要とする。大人が知識欲に燃えてゐる子供に、かうの鳥のやうな大きな鳥が赤ん坊を連れてくるとお話する時に、古代人が翼を具へた男根を作つた時に、人間の性交を俗語で獨逸語では「vögeln（フエゲルン）」（飛ぶ）といひ、陰莖は伊太利語で直接「l'uccello（ルッチエロ）」（鳥）といふ時に、飛びたいといふ願望は夢にあつては單に性行爲の實行への憧憬を意味すると私達に教示す

る、あの大きな關聯の一小部分を示してゐるに過ぎぬのである。飛びたいといふ願望は早期小兒時代の願望である。大人が小兒時代を回顧する時に、その小兒時代は樂しい時代のやうに思はれる。この時代では人間は瞬間を樂しみ明日の心配なしに未來を迎へる。この故に大人は子供を羨むのである。併し子供がその時代に自らの氣持を報告することが出來るなら、彼は恐らくまるで違つたことを述べるであらう。子供時代は決して大人が後年歪めて見るあの靜かな田園詩でない。子供はむしろ早く大人になりたい、早く大人と同じことがやつてみたいといふ願望に鞭つて、その小兒時代の數年を突貫するのだ。この願望は彼の行ふ遊戲のすべてを鼓舞する。子供がその性的好奇の時代に不可解なしかも重大な領域に於て大人が、子供が知つてはならない、行つてはならない、ある偉大なことをやつてゐると想像するなら、同じことを自分も試みてみたいといふ一徹な願望が子供の心にこみ上つてくる。そして飛行の形をもつてその願望の實現の夢を見、あるひは後年の飛行の夢に對して願望のこの假裝を準備する。この故に現代にはひつて遂に目的を達した飛行術は、人間の小兒時代のエロチックに根元を有してゐるといへる。

レオナルドが小兒時代から飛行の問題に特別な因緣を感じたと私達に告白することによつて、現代の兒童研究に就いて私達が推測したと同じに、彼の小兒期の探究心もまた性なるものに向けられてゐたことを立證した。この一つの問題だけが、後年彼に性なるものと絕緣せしめた抑壓の目を逃れたのである。小兒時代から最も完全な知的成熟の時代に到るまで連綿として同一のものが僅の意味の變更をもつて彼の興味を領してゐた。そして彼が懷抱した藝術に於て、彼が機械的な意味にあつても、始原的な性的の意味にあつても成功を見ることなしに、二つながら禁制の願望となつたことは、恐らく想像に難くないものである。

偉大なるレオナルドは各種の領域に於て全生涯子供であつた。偉人はすべて子供臭いあるものを帶びなくてはならぬと世人は言ふ。彼は大人になつても玩具を弄んだ。このために同時代の人の目に彼は無氣味に不可解に感ぜられた。彼が宮廷の饗宴や儀式の接待のために極めて藝術的な器械の玩具を作つた時に、巨匠がそんなつまらない玩具に精力を浪費したことに私達はむしろ不滿を感ずる。だが彼自らそんなことに心底から熱中したやうに思はれる。ワサリはレオナルドが他人から特別注文されなくても自分勝手にそんな玩具を作つたのだと語つてゐる。

「當地に於て（羅馬に於て）彼は蠟をこねて柔かくなつた時に、それでもつて中のうつろの非常に可愛い動物を作つた。そのうつろに空氣を吹きこむと動物は飛揚し、空氣が出ると動物は落下した。ベルヱデレの葡萄園の番人が見附けた珍らしい蜥蜴に彼は、別の蜥蜴から剝ひだ皮で作つた翼をつけ、その翼に水銀をつめた。そのために蜥蜴が這ひ出す時は、翼は動いて慄へた。それからその蜥蜴に目、髭、角をつけてやつた。それを馴らして小箱に入れて友達をおどかした。」時にはかやうなふざけはある眞面目な內容の思想の表現の役目をした。「しばしば羊の腸管を奇麗に洗つて手の中に丸めることが出來るやうにした。この腸管を大きな部屋にもつて來て、隣の部屋に鞴を備へ腸管に結びつけて脹らした。腸管は脹れて部屋一杯になり、人は部屋の隅つこへ退却しなければならなかつた。かくの如くにしてレオナルドは、いかに腸管がしだいしだいに透明になつて空氣に滿たされて行くかを示した。そして最初は小さい空間に限極されてゐても、しだいしだいに大きな空間を領して行く事實を借りて、彼はこの腸管を天才になぞらへた。」彼のものした寓話とか謎は無邪氣な隱蔽と巧妙な比喩のこもつた同一なおどけ好きを證明してゐる。そしてその謎は「豫言」の形で表現され、その殆どすべては深い思想

に滿ち溢れ徹頭徹尾機智を缺いてゐた。

レオナルドが自らの空想に許したふざけと突飛はたまたま彼の性格を誤解してゐる傳記者に非常な誤謬を冒さしめた。一例を借ればレオナルドのミラノの手記の中に、「バビロニアの土耳其大帝の總督、ソリオ（シリエン）のヂオダリオ」に與へた手紙の草稿がものされてゐる。その手紙でレオナルドはある事業を起すために東洋のこの地に派遣された土木技師だと自ら名乘り、懶者だといふ非難を自ら辯護して、都市や山嶽の地理を敍述し、最後にレオナルドの滯在中に突發したある天災を記してゐる。

リヒタアは一千八百八十一年にこの手紙を根據として、レオナルドが實際埃及の土耳其帝の幕下にあつた時にこの旅行を行つて、東洋の地を踏んで自ら回回敎を感得したと推論してゐる。この滯在は一千四百八十三年の頃、卽ちミラノ大公の宮廷にはひる前であつた。だが他の著者の批評から、レオナルドの東洋旅行のこの證據は本當にあつたこと、卽ち自らの娛樂のために描いた靑年藝術家の空想的所產であつたことを容易に察することが出來る。この空想によつて彼は多分世界を漫遊し冒險を體驗したいといふ願望を表現したのであらう。

「アカデミア・ギンチアナ」もまた一つの空想の所產である。アカデミアの銘をもつた五つ又は六つの最も藝術的に縺れ合つた裝飾の存在がその推測になる。ワサリはこの繪を述べてゐるがアカデミアに就いては一言も觸れてゐない。(*) レオナルドの大きな傳記の表紙にこの裝飾をつけたミユンツは「アカデミア・ギンチアナ」の實在を信ずる少數派に屬してゐる。

レオナルドの遊戲心はその成年期に消失したこと、この遊戲心はまた彼の人格の最後のそして最高の發展を意味する研究心に合流したことは想像するに難くない。併し彼がかくも長い間その遊戲心を保持してゐたといふ事實は私達に、その小兒時代に於て後年二度と味ふことの出來ぬ程强いエロチツクな歡喜を享樂した人は、その童心から脫却するためにいかに長い歲月を要するかを敎示してあまりあるものである。

(*) 「なほ彼が絲の組合せを描くためにかなりの時間を費した。この組合せの中で一本の絲を始めから終り迄追ふと一つの完全な圓になつてゐるのに氣が附く。この種の裝飾の非常にこみいつた美しい繪は銅版にされた。その中央に Leonardus Vinci Academia の文字が讀まれる。」

六

今日讀者がパトグラフィのすべてを無意味なものと片附けられるのは無益なことである。偉人のパトグラフィ方面の研究によつては決して彼の眞價と彼の業蹟を理解するに到らない、このゆゑに、他の一流の人物に就いて發見出來る事物をその偉人に就いて研究するのは無謀なことだといふ非難の衣裳をまとつて讀者の抗議が現れる。讀者の批判は明白に間違つてゐる。さやうな批判は口實と隱蔽としか思はれぬ。パトグラフィは決して偉人の事蹟を理解するを目標としてゐない。つひぞ約束しなかつたのに、履行しなかつたと、私を非難されるのは迷惑千萬である。讀者の反抗の眞の動機は別のところに存してゐる。傳記者といふものは、非常に特異な態度でもつて自分の研究しようとする偉人に固着してゐるといふことを考慮してみれば、こ

の眞の動機が何であるかは容易に發見出來るものだ。傳記者は自らの個人的な感情生活の立場から、未だ研究などしないうちから、その偉人に特別な好意を懷いてゐるために、その人を自分の研究の對象に選んだのである。その時傳記者はその偉人を子供時代の模範人物の系列にひき入れ、その偉人に於て子供時代の父に對する觀念を新しく復活さすといふ、理想化の仕事に熱中することになる。彼等はこの願望にこびりついて偉人の相貌から個體的特徵を消去して、內外の抵抗に對するその生活鬪爭の足跡を拭ひ去り、人間らしい弱點や人間らしい瑕瑾の痕跡すら彼に許さうとせず、その結果人間の代りに私達と非常にかけへだたつた感じのする、冷やかな人間離れの理想人を展開する。傳記者がこんなことを行ふのはあまりにも遺憾なことである。何となれば、傳記者はかやうにして眞實を幻想の犧牲に供し、自らの小兒的空想を支持せんために、人性に於ける最も魅力ある祕密に突入する好機を逸するからである。(*)

(*) この批評は特別にレオナルドの傳說と限らず、すべての場合にきつぱりあてはまる。

たとへ私達がレオナルドの本質の小さい奇癖と謎を緒口として、彼の精神發展と智力發展の條件を摘發する研究を企てたところで、レオナルド自らは彼の眞理熱愛と知識欲をもつてして

は、敢て私達の研究を墓場の蔭から拒まないだらうと思はれる。私達が彼に就いて學ぶことによつて、彼に對する畏敬の念は倍加する。小兒時代以來彼の進化發展を侵害した犠牲を研究し、彼の人物に不幸といふ悲劇的特徴をやきつけた因子を蒐集したとて、それは決してレオナルドの偉大を傷つけるものでない。

私達はレオナルドを一度だつて、神經症者とかあの不快な響をもつ「神經病患者」の中に數へなかつたことを特に力說しておきたい。病理學から得た見地を向う見ずにも、レオナルドに應用したと抗議されるお方は、私達が今日正當に放棄したと思ふ偏見に未だ未練たらしくこびりついていらつしやるのである。健康と病氣、常態と神經質にきつぱり區別がついてゐるとか、神經症的特徴は一般低格性の證據と判定しなくてならぬとかいふ說は最早通用しない學說である。神經症的症候とは小兒から文化人への發展の途上に於て惹起された、ある抑壓行爲に對する代用形成であること、健康といへる人間のすべてが、かやうな代用形成を産出すること、さういふ代用形成の數、强度、分布のみが、疾患といふ實地的概念と體質的低格性の結論を正當にすることを私達は知つた。レオナルドといふ人物に於ける小さい表示によつて、私達は彼を

「强迫型」と呼ばれてゐるあの神經症的類型に近接せしめ、彼の研究欲を神經症者の穿鑿欲に、彼の抑制を神經症者の所謂意志薄弱に比較せしめてもよかつたのである。

私達の研究目的はレオナルドの性生活及び彼の藝術的活動に於ける抑制を說明するところに存してゐた。今や彼の精神發展の道程に於て摘發出來る一切を、この目的の下に總括することが私達に許される。

彼の遺傳關係に就いては私達は知るよしがないが、彼の小兒時代の偶然的環境が彼に深刻な攪亂作用を與へたことは私達が知つてゐる。私生兒といふことが凡そ五歲迄彼に父の影響を除去し、母の愛情の惑溺の中に放任せしめ、彼は母の唯一無二の慰藉物となつた。母によつて性的早熟にまで愛撫されたまま、彼は小兒期性活動の段階にはひつたに相違ない。この段階に於ける唯一の表現は熾烈なる彼の小兒期性的好奇が證據立てて吳れる。見たい、知りたいといふ衝動は、彼の早期小兒時代の印象によつて最高に興奮された。口といふ發情帶は最早捨て去ることの出來ぬ强調を受けいれた。例へば動物に對しての過大な同情といふ後年の反對した振舞から、私達は彼の小兒期に强いサド風の特徵が缺けてゐなかつたことを推測することが出來

る。力強い抑壓の推進力はこの小兒性過大を終結せしめ、もつて思春期の年代に現出すべき素因を確立した。あらゆる肉慾的活動からの離反は、この轉換の最もめざましい成果であつた。レオナルドは禁慾的に生活出來る人となり、無性的人間の印象を與へる人となつた。たとへ思春期的衝動の潮が子供に差迫つて來ようとも、强制的に贅澤な有毒な代用を形成せしむることによつて、子供を病氣に陷らさせないものである。性衝動の欲求の大部分は、性的好奇への早期の選擇のお蔭で、一般の知識欲に昇華され得るだらう。その結果抑壓がくひとめられる。そしてリビドのきはめて一少部分だけが性目標にさしむけられて、大人のいぢけた性生活の代表となる。母への愛情が抑壓されるために、この部分が同性愛的態度におしやられ、理想的稚兒戀愛の姿をとつて現れる。無意識界にあつては、母への固着、母に對する關係の幸福な回想への固着がそのまま保存されるが、暫時の間は無活動狀態にとどまつてゐる。かやうにして抑壓、固着及び昇華が、性慾のレオナルドの精神生活に及ぼした貢獻を處理したのである。

暗黑な少年時代の中から早くも、その小兒時代の初期に於けるのぞきたい衝動の早熟的な覺醒のために强められた、一つの特殊な天稟のお蔭をもつて、藝術家、畫家、彫刻家としてのレ

オナルドの風貌が私達の面前に現れてくる。若し私達の方法でもつて達し得られるなら、精神的原始衝動からいかなる道程を經て藝術的活動が發するものかを諸君に報告したい。私達は藝術家の作品もまた彼の性的熱望から誘導されたものだといふ明明白白な事實を特記して、レオナルドに關しては、ほほゑんでゐる女と美しい子供のかほ、即ち彼の性對象の描寫が、彼の最初の藝術的試作であつたといふワサリの傳へた話を根據にしたい決心である。青春の高潮期にまづ第一にレオナルドは何等の束縛も受けずに放膽に創作を行つたやうに思はれる。外觀の生活行爲にあつては父を模範にとつたやうに、彼は男性的な創作力と藝術的生産力の一期をミラノで送り、この地に於て、運命の幸運は彼をしてロドギコ・モロの中に父の代用を發見せしめた。しかし間もなく彼は、現實的な絕對禁慾が昇華された性追求の活動に必ずしも都合よい條件でないといふ事實を自らに體驗した。性生活の理想化が主力をふるひ、活動と斷行への能力は緩み始め、反省と躊躇の傾向が早くも聖餐の繪の上にかき亂すやうに顏を出し、技術上の影響のために、この大作の來るべき運命を決した。今やしだいしだいにレオナルドの心中に、神經症患者に見られる退行にしか匹敵出來ぬ過程が行はれ始めた。彼の本質の藝術家への思春期

的發展は、早期小兒時代に於て決定された科學者への發展によつて凌駕され、彼のエロチックの衝動の第二の昇華は、第一の抑壓に際して豫備された始原的な衝動に對して退却し始めた。彼は科學者となつた。最初は未だ彼の藝術に奉仕し、後年は彼の藝術から獨立し、彼の藝術から離反した。父の代用であるパトロンを失ひ、ますます深められ行く人生の憂鬱に包まれて、この退行的轉移は漸次に擴大されて行つた。レオナルドに一枚の繪でも書いて貰はうと懇望した領主夫人イサベラ・デストの通信員が報告したやうに、レオナルドは「impacientissimo al pennello」刷毛に最も性急な人となつた。小兒時代といふ過去が彼の一切を支配するやうになつた。併し今や彼の藝術的創作の代用となつた研究心は、無意識的衝動の活動を特徴づけるある二、三の姿、貪慾、無遠慮な强情、現實的環境に適應する能力の不足といふ特色を帶びて來た。

人生の絕頂、彼の四十歲の初め、女子にあつては性特徵が早くも衰頽する年代、男子にあつてはしばしばなほリビドの强い噴出を見る年代に於て、新しい轉換が彼を襲つた。彼の精神內容の深層は新しく活躍し始めたが、さらに進み行く退化は萎縮に瀕してゐた彼の藝術に利益を

與へた。彼は思ひがけなく一人の婦人にめぐり會つたのである。この婦人こそ彼に母の浮べた幸福なほほゑみ、官能的に恍惚としたほほゑみの回想を覺醒せしめ、この覺醒の影響の下に彼は昔ほほゑんでゐる女を描いた時代に、あの藝術的試作への端緒を開いて吳れた刺激を再び手にすることが出來た。彼はモンナ・リサ、聖アンナ、謎のやうなほほゑみを特色とした數葉の繪畫をものした。あの始原的なエロチツクな衝動に後援されて、彼は自らの藝術に於ける抑制をもう一度克服出來る勝鬪をあげた。この最後の發展は一般われわれにとつては、迫りくる老年の暗黑の中に消失するものである。併しレオナルドの知識は既にその時代から遙に進んだ世界觀の最高能力にまで飛躍されてゐた。

前章に於て私はレオナルドの踏んだ進化軌道のかかる描寫、彼の生涯のかかる構成、藝術と科學への彼の動搖のかかる說明を證據づけるものを列擧した。このやうな詳論を捉へて、私の友人や精神分析の專門家が、私が單に精神分析風の小說を書いたのだと批判されるなら、私は何もこの收穫の正確を自らに買ひ冠つてゐないと卽答したい。私もまたほかの人と御同然に、この偉大なこの不可解な人物の放つ魅力にひきつけられてゐたのである。この偉人の本質の中

に、人は蒸發によつてのみ發散出來る、巨大な、衝動的な情熱を感ずるやうに信ずる。

レオナルドの生涯に關する眞實がどうであらうとも、私達が今一つの課業を完成しないうちは、その眞實を精神分析的に探究しようとする只今の試みを途中でよすことが出來ない。私達は一般傳記學に精神分析が那邊まで活用出來るかの境界線を示さなくてはならぬ。その境界線が分明すれば私達が途中で省略した説明は失敗とはならない筈である。精神分析研究は材料としては生活史の資料を利用する。卽ち一方に於ては事件及び環境影響の偶然、他方に於ては傳記に遺る個體の反應を材料とする。精神機構に關する精神分析の知識の上に立つて、今やこの研究は個體の本質をその個體の示す反應から動的に探究し、その始原的な精神衝動力及びその衝動力の轉化と發展を發見しようと追求する。若しこれ等のことが實事成就すれば、その人物の生活態度は體質と運命、內力と外力の協同作用によつて説明が下せるやうになる。レオナルドで試みたやうに、かやうな企圖が確實な結果を與へなかつたなら、その責任は精神分析の誤つた、あるひは不適切な方法にあるのでなしに、この人物に關して傳へられてゐる材料の不正確と杜撰に存してゐるのである。

然しながら、たとへ史料を十二分に利用しても、たとへ精神機構を極めて正確に活用しても、精神分析研究は二つの重大な疑問に對して、即ち個體といふものはさうあり得てかうあり得なかつたといふ必然性に對して確乎たる見解を與へることが出來なかつたであらう。私達はレオナルドに於て、小兒段階の後にはひつた性抑壓が、彼のリビドを知識欲に昇華せしめ、もつて來るべき全生涯に對する彼の性的無活動を確立した事實より、私生兒といふ偶然と母の溺愛が、彼の性格形成と彼の將來の運命に決定的な影響を與へたといふ意見を代表しなければならなかつた。併し小兒時代の最初のエロチックな滿足の後に來たこの抑壓は、現れる必要がなかつたかも知れぬ。この抑壓は他の個體に於ては全然現れないか、たとへ現れても、その作用力は微弱であるのを常とする。ここに到つて私達は精神分析的には最早氷解出來ぬ、自由の範圍を認めなくてはならぬ。同樣にしてこの抑壓推進の結末が、唯一可能な結末と思惟することが出來なくなる。他のある人物なら知識欲への昇華によつて、リビドの重要部分を抑壓の運命から脱出せしむることに成功しなかつたであらう。たとへレオナルドと同一の影響の下にあつても、彼はその思考活動への永遠の障害か、あるひは神經症への不可抗的な素因を贏ち得たかも

知れぬ。從つてレオナルドのこの二つの特徴、即ち衝動抑壓に對しての彼の特異な全傾向と、原始衝動の昇華に對しての彼の異常な能力とは、精神分析研究によつても説明の施せぬものとして殘される。

衝動及び衝動の轉化は精神分析をもつて知り得る最終のものである。それ以上のことは、生物學的研究に讓らなくてはならぬ。抑壓傾向といひ、昇華能力といひ、私達はともどもに性格の器質的土臺に歸せしむるやうに强ひられる。藝術的天稟と藝術的才幹は昇華作用に密接してゐる故に、私達は藝術的創作の本質も同じく精神分析的に説明出來ると主張しなければならぬ。現代の生物學的研究は人類の器質的體質の主徴を、材料的の意味に於て、男性の素因と女性の素因の混合によつて理論づけようとする大勢にある。レオナルドの美貌と左利はこの點に關して多數の支持を與へた。だが私達は純粹なる心理學的研究の地盤を捨てたくなかつた。私達の懷抱する目的は、外界經驗とその人物が衝動活動の進路を越えていかに反應したかの關係を立證するところにある。たとへ精神分析がレオナルドの藝術家たる事實を闡明しなかつたとしても、精神分析は私達に藝術家としての表現と藝術家としての拘束を理解せしめた。恰もレ

オナルドと同じ小兒期體驗を持つた男はモンナ・リサ、聖アンナを描き、その作品にあの悲劇的な運命を準備し、自然科學者としての不朽の飛躍をとることが出來たやうに見える。恰も彼の一切の業蹟と彼の一切の不幸の鍵が禿鷹の小兒期空想の中に藏せられてゐたやうに見える。

だが兩親との關係が生む偶然性が、人間の運命にかくも決定的な影響を與へるといふ、例へばレオナルドの運命が、彼の私生兒と彼の最初の繼母ドンナ・アルビエラの不姙にかかつてゐるといふ、研究の結果に對して抗議が起らないだらうか。世人にはそんな抗議を起す權利などないと私は信じてゐる。若し世人が偶然といふものには人間の運命を決定する資格など存してゐないと觀ずるなら、それは宗教的宇宙觀への逆行を示すに過ぎない。レオナルド自らが太陽は動かないと大書したその時に、彼は明かにこの宗教的宇宙觀の克服への一歩をとつたのである。正義なる神と慈悲あつき神意すら、われわれの儚い生涯に存する偶然といふ作用を防禦することが出來ぬと知つて、私達とて勿論淋しい氣持がする。だが生命に於ける一切のものが偶然であること、精子と卵子のめぐり合せによる私達の發生からして偶然であること、しかもこの偶然はこの故にこそ自然の合目的性と必然性に關與し、單に人間の願望と幻覺への關聯を缺

いてゐることを私達は全然忘却してしまつてゐる。われわれの生涯の決定を體質の「必然性」と小兒時代の「偶然」の二つに分割することは、一つ一つの場合に對しては未だ確實性を缺いてゐるかも知れぬ。併し全體としては、われわれの丁度最初の小兒時代が有する意義を最早疑ふ譯に行かなくなる。ハムレットの臺詞を思ひ出さしむるやうなレオナルドの深い言葉「體驗の中に未だ嘗て姿を見せぬ無數の原因に滿されてゐる自然」（La natura è piena d' infinite ragioni che non furono mai in isperienza）に對して、私達のすべては未だ心からなる尊敬を拂つてゐない。われわれ人間の各個體は無數の實驗の一つに相當してゐる。そしてこの實驗をもつて初めて、自然のこの原因がわれわれの體驗の中に割り込んでくるのである。

妄想と夢

一

「夢判斷」の筆者（＊）の努力のお蔭で夢の根本の謎は解決したと認めて吳れる人達の間に、「ある日のこと、決して夢に見られない夢、作家が創作した架空の人物が物語の脈絡に於て見る夢はどういふものかといふ好奇心が湧き上つて來た。この種の夢を夢判斷の俎上に置かうとする動議は一寸見ればくだらない奇怪なもののやうに思はれたが、一方から見れば、それは正當なものと觀じてもよかつた。夢が意味深深たるもの、解釋が施せるものとは世人は決して一般に信じてゐない。科學及び敎養ある多數の人士が萬一夢判斷の課業をおしつけられたなら噴き出すだらう。だが迷信にこびりつき、古代の信念を迷信を通して繼承してゐる民間の人達は、夢が解釋可能だといふ信仰から脫却しようとしない。そして夢判斷の筆者は正統科學の抗議に反逆し敢て古代人と迷信に左袒したのであつた。筆者とて勿論夢の中に未來の豫告を認めようとす

るのでなかつた。人間と申すものは未來を卜するために太古からいろんな方法を講じたが結局すべては徒勞に終つた。併し筆者もまた夢と未來の關係を全然擯斥することは出來なかつた。といふのは、夢の飜譯といふ苦心慘憺たる仕事が完成した後に、夢と申すものは夢見た人が懷く願望を實現の姿で描寫したものだといふことが分明した。而して願望が多く未來に關聯しないなどとは誰が反駁出來ようか。

(*) Freud, Die Traumdeutung, 1900.

私は丁度かう申した。夢は實現された願望である。一つの難解な書物を讀破せんとする勇氣を所持する人は、難解な問題のために努力を惜まず、誠實と眞實を犧牲に供してまで問題を平易に簡明にしようと希望しない人は、さきに紹介した「夢判斷」の書物の中に、この論題への詳細なる證據を探し、今日迄のところ、夢と願望實現が同等のものだといふ事實に對して必然に放たれるあらゆる反駁を拂ひのけてゐる。

然しながら私達はもつともつと前進してゐた。夢の意味なるものが、どういふ場合にも、實現の姿をとつた願望をもつて描寫されるかどうか、若くは、頻繁に見るやうに、不安な期待、

決心、熟考等によつて描寫されるかどうかを確定することは未だ問題の核心に觸れてゐない。むしろ、夢なるものが一般に意味を含んでゐるかどうか、人が夢にある精神過程の資格を與へるべきかどうかの疑問がまづ第一に現れてくる。科學は否と返答する。科學は夢とは單なる生理的過程であり、その過程の裏面にわざわざ意味や意義、目的を探し出す必要はないと説明する。肉體的刺激は睡眠中の精神機關の上に作用して、あらゆる精神的連鎖を失つた觀念の、ある時は甲なるもの、ある時は乙なるものを意識の中に甦らす。夢とは單なる痙攣である。決して精神生活の表出運動に比較出來るものでない。

夢の評價に關するこの論爭に於て、詩人は太古人、迷信深い大衆及び「夢判斷」の著者の味方に立つてゐるやうに思はれる。何となれば、詩人が自らの空想をもつて形成した作中の人物に夢を見さす場合に、詩人は人間の思惟と感情は睡眠中もずつと斷絶せずに持續してゐるといふ一般の經驗に從つて、作中の人物の精神狀態をその人物の見る夢を借りて描出しようと求める。詩人こそ我等の貴重な聯盟者であり、詩人の證左こそ高く見積つてやる價値がある。詩人は常に我等の學校知識をもつてして未だ夢見ることを許さない、天地間の多くの事物を知つて

ゐるからである。精神學に關しては詩人の方が私達平凡人より一步を踏み出してゐる。彼等はわれわれが未だ科學の中に包括しなかつた源泉から創作するからである。では夢が意味深長だといふ本質に對する詩人のかかる荷擔は確乎たるものであつたか。一つの鋭い批判の火蓋が切られる。詩人は何も箇箇の夢の心的意味に關する反對說にも贊成說にも荷擔してゐるのでない、詩人は睡つてゐる精神が覺醒生活の蔓としてその中にはびこつてゐた刺激に對してどんな風に興奮するものかを示すだけで滿足してゐる。

詩人が夢をいかやうに活用したかの方法論に關して私達の懷く興味はこの喝棒をもつて遞減するものでない。たとへ研究から夢の本質に就いて何等の新知識が與へられなくても、研究を通して多分私達にこの角度から詩的產物の本質に向つてのある小さい洞察が許される。眞なる夢の構造はほしいままな支離滅裂なものと旣に觀ぜられてゐる。そして只今初めてかかる夢の自由な模寫が問題となる。だが世人が假定したがる程には精神生活に自由とか勝手氣儘といふものが許されてゐない。恐らくそんなものは絕對にあり得ないだらう。世間で偶然とよばれるものでも分解して見た曉には立派に法則に從つてゐることが分かる。精神生活で勝手氣儘とよ

ばれるものも――よしその當座は朦朧たるものであつても――やつぱりちやんと法則の上に立脚しゐる。私達はさらに進んでそれを眺めてみたい。

この研究に二つの方法が存してゐた。第一の方法はある特殊な實例に就いて、即ちその作品に存する作家の創作した夢を一意に研究することであつた。第二の方法はいろんな作家の作品に於て夢を利用したすべての實例を比較し對照することであつた。この第二の方法は一見非常に立派な、恐らく唯一正當な方法であるやうに思はれる。この方法は「作家」の藝術的統一觀の採用に結びつく危險から直ちに私達を救つて與れるからである。だが廣くいろんな作家の個性を研究するならばこんな統一は分裂してしまふ。さういふ作家のうち私達は人間の精神生活に對する最も深い理解者のみを個人的に尊敬するやうになつてゐる。とはいへこのやうな頁は第一の研究方法で埋めることが出來る。動議を出した人達の中で、ふとある人が最近非常に興深く感じたある小説の中に澤山夢がのつてゐるのを思ひ出した。その夢は親しい姿で讀者を見つめ、「夢判斷」の方法をかけよとばかりに讀者によびかけるやうに見えた。この小さい物語に取扱はれた材料と場面が殊に自分の興味をひきつける原因であつたと彼は告白した。と申

すのは、その物語はポンペイの土地で演ぜられ、その作中の中心人物が青年考古學者であつたからである。この考古學者は人生に對する自らの興味を古代の過去の遺物に集中せしめ、今や驚くべき然も最も正しい迂回を通つて再び人生にまひ戻つて來たのであつた。この純粹な詩的材料を追求する間に、讀者の心胸に親密と共鳴のあらゆる種類の感情が波うつた。その作品はギルヘルム・エンセンの「ポンペイの夢幻劇」と銘打つたものである。

さて讀者は私の書物を離して、暫しの間その代り、一千九百三年に本屋の店頭に現れたかの「グラヂワ」を手にされんことを希望する。一度お讀みになれば私が後段に述べることがよくお分かりになることと思ふ。「グラヂワ」を既にお讀みになつたお方は、話の梗概を記憶の中に甦らして貰ひたい。そして讀者は自らの記憶を借りて消え去つたすべての魅惑をめいめい御隨意によびさまされたい。

青年考古學者、ノルベルト・ハノルドは羅馬に於ける古美術蒐集に際してはからずも一つの浮彫を發見した。その浮彫に彼の心は强く惹きつけられて、喜びのあまり原像から立派な石膏

模型を作らせて、獨逸の大學町の自分の書齋にそれをかけ、熱心な興味に驅られて研究することになつた。その浮彫の繪は年頃の娘が歩行してゐる姿を描いてゐる。娘は襞の多い着物を少しからげてゐるために、サンダレの履物をうがつた足が着物の裾から見えてゐる。一方の足は地面にぴつたりつき歩行姿のために他方の足は地面を離れ、爪先のみが地について、蹠と踵が殆ど地面に對して垂直になつてゐる。ここに描寫したこの特異な歩行姿は美術家の注意をひき、數千年後の今日この考古學者の目をも惹きつけたのである。

作中のこの主人公が今述べたこの浮彫の姿に懷いた興味はこの物語の心理學的根本事實である。だがそれは直ちに說明が施せるものでない。「考古學の講師。ノルベルト・ハノルド博士はこの浮彫に對して、自分の專門學の立場から別にこれといふ特別貴重なものを發見しなかつた。」（グラヂワ、三頁。）「何が自分の注意をかくまで惹きつけたかを彼は明瞭にすることが出來なかつた。あるものに惹きつけられたことだけは分かつてゐる。そしてこの作用が爾來そのまま持續された。」併し彼の空想はますます浮彫の姿に熱中して行つた。恰も美術家が街頭に於ける瞥見を「生命から」捉へたやうに、彼はその繪の中に「現代的」なあるものを發見した。

この女は確に名門の娘、多分「チエレスの御名において職掌についてゐる貴族エヂリスの娘」、女神の宮へと歩んで行く途中を模寫したものと假想した。次いで彼女のしづかなしとやかな姿を大都市の熱鬧の巷に置いておくことが青年の心に不調和に思はれて來た。むしろ彼女をポンペイに移すべきである。彼女はポンペイのどこか、雨天の日は一側から他側へ濡れずに横斷出來るといふ、車輪もまた自由に通行出來るといふ、あの發掘された獨得な踏石の上を歩いてゐると信ずるやうになつて來た。娘の顏の輪郭は希臘式に思はれる。彼女の脈管には明かに希臘の血が波うつてゐる。彼の所持する考古學の一切はしだいしだいにこの浮彫の姿をかこんで渦まく種種さまざまの空想に利用されて行くやうになつた。

だが表面では學術上の問題が彼の心におしよせて解決を迫つた。「美術家が果してグラヂワの歩行の過程を生きてゐる人間から寫したものかどうか。」といふ批判的命題がその疑問の核心となつた。彼は自らやつてみてもその歩行を眞似ることが出來なかつた。この歩き方の「生きた姿」を探すために、今や彼は「眞相を解決するためには自ら生きた人間に就いて觀察しな

ければならぬ。」（グラヂワ、九頁。）といふ結論に到達した。このために青年は自分にも十分に奇怪と分かり切つてゐる行動に驅り立てられた。「女性なるものはこの日迄彼にとつては大理石上または青銅上の概念に過ぎなかつた。この故に彼は現代の女性に對して殆ど一瞥も與へなかつたのである。」社交は避け難い災厄としか考へられなかつた。青年は社交で出會ふ若い令孃達にはまるで目も吳れなかつた故に、次の場所で同じ令孃に出會つても別に挨拶もせずに素通りしてしまふ程であつた。さういふ行爲は必然若い娘さん達の輕侮心を唆るものである。然しながら今や青年は自らが提出した學術上の課題に驅り立てられて、晴天の日、特に雨天の日に熱心に街頭の婦人とか娘の裾にはみ出た足をのぞき込むやうになつた。こんな行爲は當然のぞき込まれた女達の不快なけはしい眼差をもつて酬いられるに十分である。「といへさういふ行爲は他人にも自分にも解し難いものであつた。」（グラヂワ、十頁。）このやうな綿密な研究の結果として、グラヂワの步き方は現實では存在を許されないと結論せざるを得なかつた。この發見に達するや青年の心中に悲哀と焦燥の感情がたぎりわたつた。

その後まもなく一日彼は恐怖につつまれた惡夢を見た。その夢の中で彼は昔のヹスヸォ火山

の爆發の日にポンペイにあつて、ポンペイの最後の光景を目のあたりに見た。「丁度ジユピタア神社の近傍のフオルムの緣に立つてゐた時に、彼は突然間近にグラヂワの姿を見附けた。今の今までグラヂワがそんなところにゐるなどとは想像にもつかなかつたことである。だが、ポンペイ女なるが故に、グラヂワがその生まれた町のポンペイに住んでゐること、そして何の疑惑もなしに、彼女が自分と同時代の人間だといふ考へがこの時突然にしかも當然に青年の頭に浮び上つた。」（グラヂワ、十二頁。）彼女に切迫する運命を思ふ恐怖から彼は我を忘れて思はず警戒の叫びを放つた。この青年の聲を聞いてしとやかに歩んで行く姿がふと青年の方に顏をむけた。併し娘は再び落ついて神社の柱廊の方に歩みを續け、階段の上に跪き靜かに頭をたれて行つた。その瞬間彼女の顏色はまるで白い大理石に變つて行くやうに、ずんずん蒼白になつて行つた。青年がその場へ馳けつけた時に、娘は丁度眠つてゐるやうな靜かな顏つきで、廣い階段に寢てゐるのを見た。やがて降灰が娘の全身をうづめて行つた。

彼が目覺めた時に、救助を求めるポンペイ市民の阿鼻叫喚と荒れ狂ふ津浪の怒濤が今もなほ耳の底に聞えるやうであつた。覺めて行くうちに、その音響がざわめきわたる大都市の生命の

躍動であることに氣附いても、夢に見たものが現實であるといふ信仰が長い時間青年の頭から拭ひ去られなかつた。自分が殆ど二千年の昔ポンペイの最後の日に實際にゐたといふ觀念をつひに打破した後も、やつぱり强い信仰のやうに、グラヂワは本當にポンペイに居住してゐて、その地で西曆七十九年に火山の灰に埋沒されてしまつたといふ觀念が彼の頭にこびりついてしまつた。この夢の餘韻のやうにグラヂワへの空想が次から次へと展開されて、今や初めてグラヂワを亡きものとして悲む念が彼の心に芽生え始めた。

このやうな思ひにうつとりして窓ぎはによりかかつてゐる時に、向ひの家の開け離した窓にぶらさがつてゐる鳥籠の中で囀るカナリヤの唄が彼の注意をひきつけた。突然射貫れたやうに、あるものが夢からはつきり覺め切らないこの目覺めた人間を擊つた。下の通にあのグラヂワと同じ姿を見たと信じた。その步み方までがグラヂワと寸分違つてゐないと信じた。思はず知らず青年は彼女を追ひかけようと街頭に驅け降りた。そして人人の嘲笑と嘲弄の聲に寢卷き姿の自分にはつと氣がついて、狼狽てて自分の部屋に逃げ戻つた。部屋にはやつぱり鳥籠のカナリヤの囀りが響き互つてゐる。この囀りを聞きつつ青年はしみじみ自分の身を籠の鳥にひき較べ

た。自分も鳥籠の中にこもつてゐると同じである。だが鳥籠から飛び出すことは自分には容易である。さらに夢の餘韻のやうに、多分やはらかい春先きの風に誘はれてか、青年の心の中に伊太利へ春の旅に出てみたい決心が湧き上つて來た。この旅行の目的に學術のためといふ口實が早速に見附かつた。勿論「この旅行へのあこがれはある名狀し難い感情から發してゐるのであつた。」（グラヂワ、二十四頁。）

私達は動機の明瞭でないこの旅行に暫し留意して、この主人公の個性と行動を詳細に眺めてみよう。私達の目にも彼の行動はやつぱり不可解なもの馬鹿馬鹿しいものに見える。彼のこの特殊な馬鹿馬鹿しさが私達の興味をひきよせる人間的なるものとどのやうに結びついてゐるかを想像することが出來ない。このやうな不安定なところへ私達讀者をやりつぱなしにしておくことの出來るのは誠に作家の有する特權である。その言葉の美しさ、その聯想の巧妙さをもつて、作家は間もなく、われわれが作家に拂ふべき信頼と及びわれわれがその主人公に許すべき不當なる同情に酬いて吳れる。この青年に就いて作家は讀者にその主人公が早くも家の傳統として考古學者に運命づけられて、彼の後年の孤獨と獨立の中に自らの學問に沒頭し實生活と生

活享樂を完全に抛棄したことを敎へて吳れる。大理石と靑銅は彼の感情に對しては唯一眞實なる生きたものであり、人間生活の目的と價値を表現するものであつた。だが自然は好意に溢れた目的の下に、この靑年の脈管の中に全然非科學的な種類の懲治を注ぎ、夢に於てばかりか、覺醒時に於てさへしばしば肆になり行く熾烈な空想力を注いだ。空想と思考能力のかやうな分離をもつて、彼は詩人若くは神經症患者になるやうに運命づけられねばならなかつた。彼は現實世界を超越した王國を所持する人間に屬してゐた。獨得な步行姿の娘を描いた浮彫に全身の興味をなげこんで、この浮彫の姿に彼の空想をからみかけ、その浮彫の姿に名前と素性を假想し、自らの創作した人物を殆ど一千八百年の昔に埋沒したポンペイに据ゑつけ、最後に恐ろしい惡夢のあとで、グラヂワと命名した娘の實在と滅亡の空想を一つの妄想にでつち上げ、最後にこの妄想が彼の行動の上に影響するに到つた。若し私達が本當の生きた人間に於て空想のかやうな演出に出くはすならば、それはわれわれの目に奇怪に不可解に映ずるに相違ない。併しわが主人公ノルベルト・ハノルドは作家の架空人物であるから、私達は主人公の空想が自らの氣儘以外の他の權力によつて決定されてゐるかどうかといふ眞劍な疑問を作家に提出してみた

くなつてくる。

さて主人公が見掛だけカナリヤの囀りをきつかけに動機のまるで分らない旅行に出かけるところで話を一寸打ち切つたが、私達はさらにこの旅行の行く先きもこの旅行の目的も彼に確乎たるものでなかつたことを學ぶ。悶悶たる不安と不滿は彼を羅馬からナポリに、さらに南方に驅りやつた。新婚旅行の人達の雜沓にまきこまれ、蜜より甘い「アウグストとグレエテ」を見せつけられ、かやうな新婚夫婦達の行動と衝動が彼にますます不可解になつて行つた。人性のあらゆるたはけたもののうち、「結婚が結局最大のもの、最も神祕なもの、最高のものと觀ぜられてゐる。」といふ結論に達した。そして「伊太利への狂態にも近い新婚旅行こそある點このたはけの絶頂のものであつた。」(グラヂワ、二十七頁。)羅馬に於て隣室の新婚夫婦の甘いささやきに睡をかきみだされて、起きるが早くナポリをさして飛び出した。だがナポリでも別組のアウグストとグレエテに出會ふばかりである。この地を訪れた大抵の鳥の番はポンペイの廢墟の中に巢を作らずに、カプリをさして飛び去る豫定であることを男女の談話から竊み聞いた彼は、彼等の行かないところへ行かうと決心した。そして數日の旅の後「期待と目的に反して」

彼はポンペイの都に着いた。

併しポンペイにはひつても求むる落着は得られなかつた。彼の氣持を不安にし彼の感覺を沈鬱たらしめた新婚夫婦がこの日迄演じてゐた役割を、彼がともすれば至上の惡とやくざなものの權化と觀じてゐた家蠅がとつてかはつた。新婚夫婦と家蠅の二種の厄介者が一つのものに融合してしまつた。澤山の蠅の番が青年に新婚旅行の夫婦を思ひ出さしめ、それ等の蠅のささやきの中に「妾一人のアウグストさま」「僕の愛するグレエテよ」と語り合ふやうに思はれた。最後に彼は「自分の不滿が自分の周圍に存するものから發するのでなく、ある點までその不滿の根元が自分の心中に存する。」（グラヂワ、四十二頁。）と認めざるを得なかつた。彼は「何だとはつきりは說明出來ぬあるものが自分に缺けてゐるがために不滿である。」と感じた。

翌朝「イングレッソ」を通つてポンペイに足をむけ、案內者と別れて、あてどもなしに町をそぞろ步いた。注目すべきはその時青年は自らが嘗て夢の中でポンペイの最後の數時間前までゐたことをまるで思ひ出さなかつた。暑い、神聖な眞晝、古人が妖怪の時刻と名附けた眞晝、澤山の見物人の姿が消えて、廢墟の累積が荒寥として太陽の光にぎらぎらと照りかへる、その

時、彼の心中に落ちこんで行く生活を元に戻さうとする力が湧き上つて來た。だが學問の力を借りてでない。「これが敎ふるものは生命のない、考古學的人生觀であつた。これの口から發せられるものは死せる哲學的言語であつた。學問の力によつては決して世人が名附けようとする精神、情緒、ハアトは解することが出來ない。さやうなものに渇する人は、ただ生きた人間として、ただ獨り暑い正午の中に、過去の遺跡の間に、肉體の目で見ることなしに肉體の耳で聽くことなしに坐らねばならなかつた。その時………死者は甦りポンペイは再び動き始めた。」（グラヂワ、五十五頁。）

靑年がそのやうに過去の空想に浸つてゐた時に、突然あの浮彫の中の、まがふかたなきグラヂワが一つの家から出て來て、足元輕く溶岩の踏石を横切つて道の向側へ歩いて行く。丁度あの夜の夢の中で、アポロ神社の階段の上に寢ようと横たはつた時の彼女そのままの姿である。「そしてこの回想と諸共に初めてある他のものが彼の意識にのぼつて來た。靑年は自らの心の中の眞の動機に氣附かずに——自分はこのためにこそ伊太利に、羅馬やナポリに滯在せずに、彼女の痕跡が發見出來るかを探るがために、はるばるポンペイにまでやつて來たのだ。そして言

葉の意味に於て、彼女は他人とは立派に區別のつく蹠の足跡を火山灰の中に殘してゐるに違ひないからである。」（グラヂワ、五十八頁。）

作家がここまで讀者をひつぱつて來た緊張はこの箇所に來て一瞬悲痛な混亂に高められる。わが主人公が明かに心の平衡を失つたためばかりでなく、この時まで石の姿であり次いで空想の姿であつたグラヂワの現出に直面して、私達が正氣を失つたからである。それは妄想に憑かれた主人公の幻覺であるか、本當の妖怪であるか、あるひは生きた人間であるか。幽靈などこの世に存在しないから、そんなものは數へる必要がない。この物語を「夢幻劇」と銘打つた作家は、科學法則が支配する、冷靜とけなされ勝ちなわれわれの現實世界を棄て去つたのか、あるひは精靈と妖怪が語りあふ他の空想世界へ私達を誘つたのか、作家は未だこれ等を説明する機會を惠まなかつた。ハムレットやマクベスの實例が示すやうに、私達は何の躊躇もなしにこれもまた同じたぐひであるぞと考へたくなる。あるひは空想好きなこの考古學者の妄想はこの場合別の尺度ではからなくてはならぬか。然り。あの古代の浮彫に生寫の娘が本當にこの世に實在してゐるなどとは、なんと馬鹿げたことではないかと考へる時に、私達がさきに列擧した

三つのものは、幻覺か眞晝の妖怪かのどちらかになつてくる。敍景のこまかい描寫は幻覺といふ可能を消却してしまふ。大きい蜥蜴が日の光を一杯に浴びじつと動かずに寢そべつてゐた。だがグラヂワの足音を聞いて逃げ出して、街路の溶岩の踏石を横切つて向の方へもぐりこんでしまつた。この故にこの姿は幻覺といへない。夢見る人の心の外にあるものがある。併し再生の現實が蜥蜴をかきみだすやうなことが出來るものだらうか。

メレアグロの家の前に來てグラヂワの姿は消えた。ノルベルト・ハノルドはその妄想をここまで續けたこと、ポンペイが妖怪の眞晝に彼の周圍に再び生き始め、グラヂワもまた甦つて、西暦七十九年の宿命深い夏の最後の日まで棲んでゐた家の中にはひつたことを知つたとて何も驚き入る必要はない。この時メレアグロとよばれる家の戶主の素性とその戶主とグラヂワの關係に對する鋭い臆測が靑年の頭を電光のやうにかすめた。誠に彼の學問は今や全く彼の空想の奴隸に墮してしまつたことを物語る。この家の中に足を踏み入れた時に、突然黃色い石柱の間にある低い階段の下に坐つてゐるグラヂワの姿を再び見附けた。「膝の上に何か白いものをひろげてゐる。それが何であるか見別けることが出來ぬが、パピルス紙のやうに見える……。」

彼女の素姓に關して最近立てた前提の下に、彼は希臘語でその娘に話しかけた。まぼろしの姿の女が口をきくことが出來るだらうかと青年はおづおづしながらその返答を待つた。娘が口をきかないために、今度は拉丁語で話しかけた。その時微笑を浮べて唇が開いた。「あたしにお話しなさいますなら獨逸語で仰しやいませな。」

私達に對して何といふ恥辱であらう。讀者よ。作家はかくて私達をもからかつた。そして赫灼たる太陽の反映をもつてのやうに、作家は私達をも小さい妄想の中に誘ひこんだ。そのために讀者は現實の眞晝の太陽を浴びてゐるこの哀れなる人間を溫く判決してやらねばならなくなる。併し短い混亂から覺めて今や私達はグラヂヷが生き生きした獨逸娘であることを知る。この事實は私達が信じ難きものとして全然卻けたいと思つたものであつた。冷靜に反省して、この娘と浮彫の姿とがどういふ關係で結びつけられてゐるか、またわが青年考古學者が彼女の眞の個性を示す空想にどのやうにして到達したかを私達が知るまで待たなくてはならぬ。

私と同じにやつとしてわが主人公は自らの妄想から覺めた。作家は語る。「たとへ信念が幸福になつても到るところで彼は不可解といふ莫大な總額と取引した。」（グラヂヷ、百四十頁。）

なほこの上に、この妄想の根元は恐らく私達の推察を許さない、私達には存在してゐない、彼の內部から發してゐたのである。彼を現實にひき戾してやるために根本的な治療が必要であつた。當分のところその妄想を丁度今知つた驚くべき發見と一致さすより外に彼には施す術がない。ポンペイの最後と共に滅亡したグラヂワは、短い妖怪の時刻に生命に甦つてくる眞晝の幽靈に外ならなかつた。然しながら獨逸語で話された彼女の返答を耳にして何故に彼が「あんたの聲には憶えがある。」といふ叫びを發したのであるか。私達ばかりでなく、娘自らもまた尋ねなくてはならぬ。そしてハノルドは娘の聲を未だ嘗て耳にしたことはなかつたが、夢の中で、丁度彼女が神社の階段に寢ようと橫たはる間に彼が呼びかけた時に、その聲を當然耳にすべきであつたと認めなくてはならなかつた。靑年が娘にあの時と同じやうにして下さいと哀願した時に、娘は立ち上つていぶかるやうな眼差で彼を見つめ、數步あるいて中庭の石柱の間に姿を消した。その直前一匹の美しい蝶蝶が彼女のまはりを二、三度ひらひら飛びまはつた。眞晝の妖怪の時刻が過ぎ去つたため、彼女の歸來を促す黃泉の使者とそれを解した。消えて行く姿をじつと見送りつつハノルドは「あんたは明日も正午にここへ歸つてこられますか。」と叫ぶことが出來た。

併しもつと眞面目な解釋を斷行する私達には、若い令孃がハノルドのさしむけた要求の中にある不穩當のものを見附け、男の見た夢などまるで知つてゐないために、まるで侮辱されたやうな氣持でここから立ち去つたやうに考へたくなる。娘の纖細な感情は、夢との關聯を通してハノルドを驅りやつたその要求に含まれる、エロチックな色彩を嗅ぎつけなかつたといへるか。

グラヂワの姿がかき消えた後、わが主人公はホテル・ヂオメエドの食卓についてゐるお客をいちいち檢べ、次いで同じにホテル・スイスのお客をも調べたが、ポンペイの彼だけが知つてゐる二軒の旅館には、グラヂワに一寸でも似よつてゐるやうな娘を見附けることが出來なかつた。勿論彼とて二軒のホテルのどちらかで、本當にグラヂワに會へるかも知れぬといふ期待を不合理と卻けた。ヹスギオの熱い土壤の上で搾られた葡萄酒は晝の眩暈をさらに強くした。

ハノルドはその翌日から正午迄にきつちりメレアグロの家に行かなくてならぬきまりになつた。この正午の時刻を待ちあぐみつつ、古い町の圍壁を拔け、道なき道を辿つてポンペイにはひつた。白いつりがねの花の垂れてゐるけいびらんは黃泉の花のやうに見え、摘んで採つて行きたいほど意味深く見えた。自らの有する全考古學の知識は、正午を待ちあぐむ彼には、この

世のうちの最も無意義な最も無關心なもののやうに思はれた。全く別の興味、「死んでの後眞晝の妖怪の時刻にのみこの世に甦へるグラヂワのやうな、幽靈の持つ肉體の姿はどういふものだらうか。」（グラヂワ、八十頁。）といふ疑問が彼の腦裡を支配してゐたからである。會ひたい人に今日は會へまいだらうかといふ懸念が蠢き始める。恐らくあの娘は長い歳月が過ぎて後今度始めてこの世に甦るやうに許されたのかも知れぬ。そして石柱の間に娘の姿を再び見た時に、その姿は自分の空想の奇術のやうに思はれた。その姿は彼をして思はず悲痛な叫びを發せしめた。「ああ。あんたは未だ生きてゐたんですね。」併し今度こそ彼は明白に批判的であつた。その妖怪はあなたは私に白い花を持つて來るつもりだつたかと質問する肉聲を有してゐた。そしてその妖怪はこの心の平衡を失つてゐる青年と長い談話を試みた。生きた人間としてのグラヂワに早くも興味を覺えて來たわれわれ讀者に、作家は前日彼女の眼に現れたあの不機嫌なはねつけるやうな眼差が、今日は貪るやうな好奇心と知識欲の表現に變化してゐることをわざわざ語つて呉れる。彼女もまた彼を本當に探らうとしてゐる。そして丁度昨日彼女がここで寢ようと横になりかけた時に、彼が側に立つて口に出した言葉の意味をたづねた。このやうにして

グラヂワは自らがポンペイと一緒に滅亡してしまつたといふ夢、それから考古學者をひきつけたあの浮彫と足つきの話を聞くことが出來た。今や彼女は自分の歩み方を青年の面前で實地に見せようとする。この時浮彫のグラヂワの原型と少し違つてゐるところは、その足にサンダレの代りに砂色に光つた革の靴がついてゐる。娘は青年にこの靴は丁度現代にふさはしいと說明した。明かに娘はこの青年の妄想の中にはひりこんで來た。その妄想の全周邊から彼女は逆ふことなしに婉曲に彼を誘ひ出して來た。青年がグラヂワの浮彫の姿のつもりで、あなたといふことは一と目で分かつたと主張した時に、娘はたつた一度だけ、特殊な情緒によつて自分の役割から外れさうになつた。談話のこのところでは未だ彼女は浮彫のことに就いては何も知つてゐなかつたのだから、ハノルドの言葉の意味をつひ誤解しかけた。だが瞬間卽座に再びうまく調子を合せた。かやうにして讀者には彼女の語る言葉の多くに二重の意味が籠つてゐるやうに思はれる。妄想に關聯する言葉の意味の外に現實的な現代的なあるものが同時に意味されてゐる。例へば彼がグラヂワの步み方を街頭で立證することが出來なかつたといふのを娘が殘念がる時に、「まあお氣毒ですわ。何もわざわざこんな遠いところへ旅行などなされなくてもよか

つたのですのに。」（グラヂヮ、八十九頁。）青年がその浮彫の姿に「グラヂヮ」といふ名前をつけたことも娘は知つた。そして娘は自分の本當の名前はツォエといふと話した。「そのお名前はあんたに本當に似合ひます。ですが、そのお名前は私にはどうも嘲弄の意味に響きます。ツォエは生命の意味ですからね。」――「人間は死の命令に從はねばなりません。そしてあたしは長い間死んでゐることに馴れ切つてゐます。」と彼女は答へた。明日も正午にここでお目にかかりませうとの約束を結んで娘は別離をとつた。別離に際して娘は明日もまたけいびらんの花を呉れるやうに賴んだ。「もつと幸福な人達へは春には薔薇を贈ります。でもあたしにはあんたの手から忘れた花をいただく方が似つかはしうございますわ。」（グラヂヮ、九十頁。）短い時間のみ生命に甦つてくるこの昔に死んだ女のために哀愁はふさはしい。

今や私達は理解し始めた。一つの希望が輝き始めた。グラヂヮの再生の役目を演じてゐるこの若い令孃が、かくも完全にハノルドの妄想を把握したなら、この令孃こそ恐らく青年から妄想を追拂つてやることが出來るだらう。これ以上の方法は存在してゐない。萬一彼に反抗すれば、回復への折角の望は絕たれてしまふ。この種の疾患狀態を眞劍に治療しようと思へば、何

はともあれ妄想といふ殿堂の床下にもぐりこんで、出來るかぎり綿密にその殿堂を探索するより外に手段はない。ツェォが適任者であるなら、わが主人公のやうな妄想がどんな風に治療されるかを學ぶことが出來る。さらにまたかやうな妄想がどのやうに發生して來たかを知りたい。妄想の治療と妄想の研究が合致し、妄想の發生史が分明すると同時に妄想それ自體も崩壞するならば、さういふ事實は決して不思議なことでない。かかる實例やお手本は澤山轉がつてゐる。私達のこの病例は「平凡」な戀物語に墮してしまひさうだが、妄想の治療力としての戀愛を決して輕蔑してはならぬ。そしてこの主人公がそのグラヂワの浮彫の囚となつたのは、過去のもの、死んだものに一徹に注がれた盲目な戀であつたらうか。

グラヂワの姿がかき消えるや、廢墟の町をかすめ行く飛鳥の嘲けるやうな聲がもう一度遠方から響き互つた。ただ一人あとに殘された青年はグラヂワの忘れて行つた白いものを拾つた。それはパピルス紙でなく、種種な感興の下にポンペイの風物を寫生したスケッチ・ブックであつた。彼女がこの場所に小さい手帳を置き忘れたのは彼女の明日も來るといふ抵當であると私達は言ひたい。人間といふものは、ある祕密な原因若くはある內密を動機なしに物品を置き忘

れるものでないと力說したことがある。

その一日はハノルドにこの日まで一つのものにまとめるのを怠つてゐたいろんな注目すべき發見と確定を齎した。グラヂワの姿のかき消えたポルチコの壁に、今日はせまい裂目のあるのを發見した。非常に細い人ならくぐつて行けるぐらゐの大きさである。ツオエ・グラヂワは何もわざわざ地面の中へ姿を消す必要はないと彼は覺つた。そんな考へはあまりに不合理である。彼は今日までの自分の考へに我ながら恥しくなつた。彼女は墓地に歸るためにこの裂目を利用したのであらう。薄い人影が墓地の通をつきあたつた所謂ヂオメエドのギラの前でかき消されたやうに思はれた。昨日と同じやうに眩暈をおぼえつつ、昨日と同じやうに問題に熱中しつつ、彼はポンペイの近郊をさまよひあるいた。ツオエ・グラヂワはどういふ肉體をしてゐるだらうか、若し彼女の手に觸れるならどういふ感じがするだらうか。不思議な衝動がこの實驗を決行してみようといふ決心を彼の心に作らした。併し同樣に大きい羞恥の念が觀念に於てもその決心をおしとどめた。日の照りつけた阪路で彼は老紳士にあつた。紳士はその風體から見て動物學者か植物學者に違ひない。そして何かの採集に熱中してゐるやうに見えた。「君もファラリオ

ネンシスに興味を持つていらつしやるのですか。僕はまるで想像が出來なかつたのですがね。カプリのファラリオニだけでなく、大陸の方にも昔からゐるに違ひないと睨んでゐるのです。同僚のアイマア君が考案して呉れた方法は理想的ですね。その方法でならいつやつても成功しますよ。一寸動かずにゐて下さい――。」（グラヂワ、九十六頁。）紳士はそこで話を切つて、長い草莖から作つた係蹄を岩の裂目の前に下げた。その裂目から靑くぎらぎら光つた蜥蜴がちよろちよろ頭を見せてゐた。ハノルドはこの蜥蜴採集家から離れた。この時彼の頭に、こんな馬鹿げた目的のために、はるばるポンペイ三界に迄旅に出る人もあるとはといふ批判的觀念が浮んだ。だがこの批判の中に、彼は自分自らと、そしてポンペイの火山灰の中にグラヂワの足跡を探す自らの目的をのぞいてしまつてゐた。紳士の顏はどこか見覺があるやうに思はれた。さきの二軒の旅館のどちらかで一寸見たやうな氣がした。紳士の話し振りはまるで知人にでもするやうである。あちらこちらをさまよふうちに、ふと脇道にはひつた。そこに今迄知らなかつた家があつた。それは第三番目の旅館、「アルベルゴ・デル・ソレ」である。手持不沙汰の宿の主人は彼をとらへて自慢たらしく自分の旅館や所藏の發掘物を吹聽した。フォルムの近傍

で若い男女を發掘した時に自分もそこに居合せてゐたと彼は話した。その男女は自分達の避け難い破滅を知つてしつかといだき合つたまま死を待つてゐる姿であつた。その話はハノルドも昔に聞いたことがある。そしてその時は空想好きな咄し家の作り話とせせらわらつたものだが、今日のこの宿の主人の話しぶりから、その話が本當のやうに思はれて來た。話し終つて宿の主人が自分の面前で女の遺骸とともに灰の中からかきあつめて貰つたといふ、青鏽を着せたブロオチを出して見せた時には、その話はたちまち眞實のやうに思はれて來た。青年は何の批判的躊躇もなしに早速にそのブロオチを買ひ求めた。アルベルゴから立ち去らうとした際に、ふと旅館の一つの開いた窓に白い花の咲いてゐるけいびらんがうなだれてゐるのを見た。墓場の花のこの姿は買ひ求めたブロオチが本物であるといふ證明のやうに彼の總身に浸みわたつた。

次いでこのブロオチを中心として、新しい妄想が彼を包んでしまつた。いや、むしろ古い妄想がなほしばらく持續して、それは火蓋を切られた治療に對して、幸先よいものに見えなかつた。フォルムから程遠からぬところで、いだきあつた姿のままの若い男女の死體が發掘された。そして彼は夢の中で丁度この附近のアポロ神社でグラヂワが寢ようと横たはつたのを見た。現

實にあつて彼女はその時一緒に死んだどこかの男に會ふために、フォルムよりずつと向うに行つてゐたといふことが可能でなかつたらうか。嫉妬に匹敵出來るなやましい感情がこの假想から湧き上つて來た。だがそんな聯想は確でないと考へ直して自らの感情をおししづめ、青年は再び正氣にたちかへり、そのままホテル・ヂオメエドで夕飯をしたためることが出來た。新來の二人のお客、男と女がここで彼の注意をひきつけた。髪の色は同じでなかつたが、二人はどつか似てゐるところがあるためにどうしても兄と妹のやうに思はれた。今度の旅行中行き會つた人達のうちで、この二人が初めて彼にいい印象を與へた。若い娘が胸につけた赤いソレントの薔薇が彼にある記憶をよびさますやうであつたが、どういふ記憶だか思ひ出すことが出來なかつた。つひに彼はベットにはひつて夢を見た。その夢は非常に馬鹿馬鹿しいものであつたが、明かに晝の經驗に關聯してゐた。蜥蜴をとらへるために草莖でもつて係蹄を作りながら、どこか太陽でグラヂワが坐つてゐた。そして口をきいた。「一寸動かずにゐて下さいませ。――私の女同僚は間違つてゐません。この方法は本當に素敵ですわ。この方法でなら成功いたします。」未だ覺め切らない中に、これはあまり氣違ひじみてゐるといふ批評でもつて彼は自らの

えない鳥の救ひで彼は自らの夢を破つた。

夢が怪談じみてゐたにも拘らず、目覺めた時はむしろ頭が澄み切つて心が平靜に落ついてゐた。薔薇の花束、昨日若い娘の胸に見たやうな種類の花から、夜中に誰かが春には薔薇を與げませうと語つた記憶をよびさまし、思はず知らず花束から薔薇の一本をつまみとつた。そして彼の心の狂ひを拂ひのけて呉れるあるものがこの薔薇と關聯してゐるに違ひなかつた。自らの人間嫌ひを拂ひのけて、青年は薔薇とブロオチとスケッチ・ブックを手にもつて、いつもの道をポンペイに歩んだ。そして歩きつつグラヂワをとりまく種種雜多な問題を頭に描いた。古い忘想にはひびが出來た。彼は早くもグラヂワが正午とはかぎらずに、ほかの時刻にもポンペイに姿を見せてゐないものだらうかと疑ひ出して來た。このためにアクセントは最近附加された問題に轉移され、これにからまる嫉妬が千差萬別な假裝をまとつて彼を苦めた。彼女の妖怪が自分の目にだけ見えて、どうか他人の目に見えないやうにと希望するまでになつた。青年は彼女を自分の獨占物と觀じたくなつた。正午の時刻を待ちながら、あちらこちらとさまよふうち

に、ふと驚くべき光景にぶちあたつた。カサ・デル・フアウノで彼は男女の姿を見た。二人は道の曲り角で人目に立たないと思つてか、相擁して唇をつけてゐた。彼はその男女が昨夜自分に好感を與へたあの二人であると知つて魂消た。今のふるまひ、長い時間の抱擁と接吻から二人を兄と妹と考へることが出來なくなつた。二人は戀人か恐らく新婚旅行の若夫婦、やつぱり例のアウグストとグレエテであつたのだ。不思議なことに、この光景は今日に限つて快感だけをよびおこさした。そしてまるで他人の祈禱の邪魔をしたやうな恐れに包まれて、見て見ぬふりをしてその場を去つた。彼に長い間缺けてゐた一つの尊敬が青年の心によみがへつて來た。

メレアグロの家の前に來た時に、もしやグラヂワが男と一緒にゐるところに出くはさないだらうかといふ心配が突然彼を襲つた。この心配が非常に激しかつたために、妖怪の女に「あんたお一人ですか。」といふ質問でつひうつかり挨拶をしてしまつた。彼が自分に薔薇をもつて來たことを娘が青年の意識にのぼしてやることが困難であつた。やがて青年はグラヂワがフオルムで抱き合つた姿のまま發掘された、綠色のブロオチを持つてゐたあの娘であるといふ最近の妄想を彼女に告白した。冷笑半分に娘は彼が太陽で何か一部を掘り出したかと質問する。太

陽――ここでは「ソレ」と呼ばれる――はこの種のいろんなものを持ち出して來る。眩暈がするとの青年の訴へにそれを直してあげようと、彼女は私のお辨當を一緒にたべませうと提議して、彼に紙に包んだ白パンを半分與へた。そして殘りの半分を娘自らうまさうに食べてしまつた。食事の間に唇の間から彼女の美しい齒が閃き、パンの皮を嚙んだ拍子にかりつとかすかな音が響いた。「あたし達二人は二千年の昔にかうして一緒にパンを喰べたやうな氣がいたします。あんたはお思ひ出しになりませんの。」（グラヂワ、百十二頁。）といふ娘の言葉に對して、彼は何の返答も思ひ出せなかつた。併し食事と娘の示した現在といふすべての證據のために彼の頭腦の働きは强められ、それは當然彼によい效果を惠んだ。理性は今や彼の心中に頭をもたげ、グラヂワが眞晝の妖怪であるといふ全妄想を疑はしめるに到つた。これに反して、二千年の昔に二人で一緒に食事をしたことがあると彼女が現に今口にした言葉が嘘のやうに思はれた。かやうな葛藤の中に、彼が詭計と再度の勇氣を奮つて斷行した實驗が決定の鍵を與へた。娘は細い指の左の手を膝の上に靜かにのせてゐた。彼が前からあつかましさとやくざさに憤慨してゐた家蠅の一匹がその時その手の上にとまつた。突然ハノルドは手をふり上げてかなり力をこ

めて蝴とグラヂワの手をたたいた。

この思ひ切つた試みは彼に二重の效果を與へた。第一に自分は疑ひもなく本當の生きた溫い人間の手に觸れたといふ悅ばしい確信、だが次いで一つの叱責、その叱責を聞いて彼は驚きのあまり階段の自分の占めてゐる處から跳び上つた。といふのは、驚きから我に歸るや、グラヂワの唇から「あんたはやつぱりお氣が違つてゐるのですわ。ノルベルト・ハノルドさん。」といふ聲が響いた。自名の名前をよばれるといふことは、寢てゐる人や夢遊病患者をよびさます最良の方法であることは誰もが知つてゐる。ポンペイの何人にもあかしたことのない自分の名前をグラヂワの口からよばれたといふことが、ノルベルト・ハノルドの心にどういふ結果を與へたかは不幸にして觀察されてない。この危機的瞬間にカザ・デル・ファアウノからあの好感を與へた男女がそこへひよつくりはひつて來た。そして若い令孃が思はず喜しさうな聲で「ツォエさん。あんたもここに來てゐるの。でやつぱり新婚旅行なの。まああたしに一言も知らして下さらなかつたのね。」とよびかけた。グラヂワの生きてゐるといふ現實の上の新しい證據の前にハノルドは逃げ出した。

ツォエ・グラヂワもまた折角うまく進行してゐる大切な仕事の邪魔をしたこの思ひもかけぬ友達との邂逅をあまり喜ばなかつた。だが直ちに落ついて、流暢な言葉で返答をした。彼女は女友達、更にわれわれ讀者にも只今の情況の説明をして呉れる。そして彼女はこの手段でもつて若い夫婦を追ひ拂ふことを心得てゐる。彼女は祝辭を述べた。だが自分は新婚旅行に來てゐるのでない。「只今あちらへおいでになつた若いお方は少し氣がお可笑しいの。頭の中に蠅がうなつてゐると信じていらつしやるらしいのよ。でも誰だつてそんな種類の昆蟲を頭の中に持つてゐませう。昆蟲學ならあたしだつて少しは嚙つて知つてゐますもの、かういふ場合に一寸はお役に立つと思ひましたの。父とあたしは只今ソレに滯在してゐます。私が勝手にポンペイで何か面白いことをして、父の仕事の邪魔をしない條件なら、こちらに來てもよいと急に父が言つてよこしました。ポンペイで一人で何か面白いものを發掘したいとあたしはかねがね思つてゐました。本當に、こんなところであなたにひよつくりお目にかかるとは、私の發掘物としてはあまり思ひもかけないことでしたわ。ギザさん。」（グラヂワ、百二十四頁。）併しツォエは太陽にゐる父のお相手に急いで歸らねばならぬ。彼女はあの動物學者及び蜥蜴採集家の娘で

あること、及び兩意義のいろんな言葉によつて治療の計畫と別のある祕密な目的を私達讀者ににほはしたあとで、この場所を立ち去つた。だが彼女のとつた方角は父が待つてゐるといふ太陽館の方でなかつた。恰もヂオメエド・ギラの附近に於て影の人間が自分の墓地を探し、墓石の下に姿を消すやうに見せるために、彼女は爪先を殆ど直角に下げた足どりで墓場の街に歩みを進めた。羞恥と混亂に襲はれてハノルドはその場を逃れ、ポルチコのあたりをあちらこちらさまよひつつ、始終自分の問題の殘された部分を頭の働きで解決しようと焦つてゐた。ただ一つの事だけが確實に彼に明瞭になつた。多少は肉體的に再び甦つた、若いポンペイ女と自分が交際してゐると信ずるのは途方もない馬鹿な、途方もない不合理なことである。そして自分の頭が狂つてゐるといふこの明確な認識は、必然に健康な理性への復歸を根本的に促進さすものであつた。だが他方に於て、同じやうに肉體を有してゐるやうな他人とも交際してゐるやうなこの生きてゐる女はグラヂワであつた。そして彼女は自分の名前を知つてゐた。未だはつきりしてゐない彼の理性は、この謎を解くためには十分にしつかりしてゐなかつた。かやうな困難な問題にぶちあたるためには、感情の方面に於て、彼は十分に冷靜でなかつた。二千年の昔に

ヂオメエドのギラで二人が一緒に破滅してしまつた方がよかつた。さうであればツオエ・グラヂワと再びこの世でめぐりあふやうなことはなかつたであらうに。

彼女に再び會ひたいといふ激しい憧憬が、彼の心に今もなほ殘されてゐる逃避への傾向と暫しの間戰つた。

柱廊の四角を曲らうとして彼は突然に跳ねかへされた。毀れ果てた壁の上に、ヂオメエド・ギラで横死を遂げたあの娘の一人が坐つてゐる。だが狂氣の國へ逃げ戻らうとする最後のあがきは忽ち卻けられた。いや。それはグラヂワである。明かに彼に治療の最後の一片を贈らんためにここにゐるのだ。娘は青年のその本能的な行動を、その場を逃げようとする試みと正しく解釋して、そこから逃げてはいけない、外は今丁度激しい夕立だと教へた。無慈悲な娘はあなたは私の手の上の蠅をたたいて一體どうする積りだつたかといふ質問をもつて試問の火蓋を切つた。彼は一定の代名詞を口に出す勇氣が出なかつたが、露骨な質問に返答するためにうまい言葉を見附けた。

「誰かが申しましたやうに――私は少し氣が狂つてゐます。私が手をこのやうに――どうか御

免下さいませ。どうしてそんな馬鹿なことを致しましたか、私にもまるで分かりません。――ですが、その手の持主が私の――私の馬鹿を叱りつける時に、どうして私の名前をお呼びになつたのか、どうも私には合點が行きません。」（グラヂワ、百五十四頁。）

「あんたの頭の働きは未だ大してはつきりしてゐませんのね。ノルベルト・ハノルドさん。あたしはずつと前から馴れてゐますもの、別に驚きもいたしません。もう一度そんな發見をするために、何もはるばるポンペイまで來る必要はなかつたのです。あんたはそれをここよりも百哩も近いところで、あたしに示して下さつたのですもの。」

「百哩も近いところ、あんたの家とすぢ向ひの、角の家で。あたしんとこの窓にはカナリヤの鳥籠がつつてあります。」今や娘は未だはつきりしないこの青年に緒口を與へた。

この最後の言葉は青年の耳に遠い遠い國からの回想のやうに響いた。ではそれは同じ鳥だ。そのカナリヤの唄をきつかけに伊太利旅行への決心が湧いたのだ。

「あの家にあたしの父が棲んでゐます。それ動物學の教授、リヒアルド・ベルトガングつて。」隣家の娘であるために、彼女は青年の人物と名前を知つてゐたのである。私達の期待を裏切

ろやうな平凡な解決のために、私達は失望に陷る。

「ではあなたは――あなたはあのお孃さん。あのツォエ・ベルトガングさんですつて。でも隨分お變りになりましたね。」と尋ねた時には、ノルベルト・ハノルドは未だ思考の獨立を恢復したやうには見えなかつた。

ベルトガング孃の返答は二人の間に隣人關係以外なほ別の關係が存してゐたことを示してゐる。娘は「あんた」といふ親しい言葉をどのやうに使ふべきかを知つてゐた。勿論青年はその言葉を眞晝の妖怪には使つたが、肉體のある生きた人間と知つて再びその言葉をひつこめてしまつた。だが娘はこの時昔の權利を利用した。「あんたはそんな呼び方があたし達二人の間の當然なものだとお曉りになりますなら、あたしは以前のやうにあんたと呼びますわ。でも別の呼び方の方がやつぱり自然かも知れません。あたし達が毎日お隣同志としてお互に遊びまはり、時にはお互にたたき合ひましたずつと昔にくらべて、あたしが別人のやうに見えるかどうかは存じてゐません。でも若しあなたが最近一度でもあたしをちらつと御覽になりましたのなら、あたしが昔と變らぬ同じ樣子をしてゐることにお氣附になつたでせうに。」

即ち幼馴染といふ關係が二人の間に存してゐたのだ。恐らく子供同志の愛が存してゐた。このために「あんた」といふ言葉は當然なものとなつてくる。このやうな解釋は最初に假定したものと同樣に皮相であらうか。この子供時代の關係が思ひもかけず、現在の交際の間に二人の中にまき起されたいろんなこまかい事情を説明すると氣が附けば、皮相どころかこの解釋はますます深められて行く。妖怪が肉體をもつてゐるかの疑問を實際的に解決せんとする要求といふきはめて巧みな動機を口實にツォエ・グラヂワの手をたたいたことは、一方に於て、ツォエの口から二人の子供時代に存してゐたと證據立てたあの「たたき合ひ」の衝動の再發と見られないだらうか。そしてグラヂワが考古學者に、私達が二千年の昔にかうして食事を共にしたことをお思ひ出しになりませんのと質問した時に、若し私達が歷史的過去を個體的過去、娘の記憶にありありと殘つてゐるが青年の記憶には忘れ果てたやうに見える子供時代で置き換へるなら、この不可解な質問は突然に意味深長にならないだらうか。青年のそのグラヂワに關する空想は、この忘れ果てた子供時代の回想の餘韻であるといふ想像が朧に私達に湧き出てこないだらうか。その空想は彼の空想の勝手な創作でなくて、彼が意識してゐない、忘れ果てたとはい

へ、なほ彼の心中に活動してゐる、小兒時代の印象の材料によつて決定されてゐるのであつた。揣摩臆測に墮するとはいへ、空想のこの根元を詳細に證明することが出來るに相違ない。例へば、グラヂワが希臘人の血統、ある貴族の娘、恐らくチエレスの宮司の娘でなくてならぬなら、それは彼女の希臘語の名前のツオエの知識と動物學敎授の家族の一員といふ餘韻とうまく合致してゐる。併しハノルドの空想が轉化された囘想であるなら、ツオエ・ベルトガングの報告の中に、この空想の根元の暗示が發見出來ると期待してもよい。彼女が讀者に子供時代の親密な友情關係を物語るところを傾聽しよう。そして今や私達はこの子供時代の關係が、二人に於て後年どういふ發展をとつたかを學ぶであらう。

「世間の人が、どういふ譯か知りませんが、私達をバックフイシユと呼んだ時代まで、あたしは本當にあなたに心からなじんでゐました。あたしはこの世の中にあなたほど好きなお友達はないと信じてゐました。あたしにはお母さんも女姉妹も男兄弟もござりません。お父さんはあたしよりアルコホル漬の蜥蜴の方がずつとお氣に召してゐました。そして人といふものは、――その中へあたしは女の子も入れたうございます――自分の思ひ、まあさういふやうなものを

打込むことの出來るあるものを持つてゐなくてはなりません。その當時あなたこそあたしにとつてはさういふものでございましたわ。ところがあなたが考古學といふ學問に熱中されました時に、あたしは、あんたから——御免下さいませ——でもあなたの新しい御趣味はあたしには好かないものに思はれ、あたしが言ひたいものと合つてはゐないと知りました。あたしは申し上げたかつたのでございます。あんたは變なお方になつておしまひになりました。少くともあたしに對しては、目もお向けになりません、口もお利きになりませんでした。

あたし達が幼馴染であつたことなど、まるであなたの頭の中にないやうでございました。そのためにこそ、あたしはあんたの目には昔とすつかり變つたやうに見えるのです。あたしが時時社交であんたにお目にかかつても、一度この冬の時などは、あんたはあたしに目もお向けになりません、口もお利きになりませんでした。でもあの時は特別あたしだけとは限つてゐませんでした。あんたはどんな人に對してもああした態度をおとりになりましたもの。あたしなどはあなたにはあつてないやうなものでございました。昔子供の時によくかきむしつたあんたのブロンドの髪の毛は蓬蓬になつて、まるで剝製のカカドのやうに、退屈さうに面白くもなささ

うに、だまりこんでいらつしやいました。あの時はアルケオプテリツクスのやうに崇高に見えましたわ。それあの發掘された前世紀の怪鳥のやうに。あなたの頭の中には、あたしを丁度ポンペイで發掘されて再びこの世に甦つた娘にしようとする崇高な空想だけが宿つてゐたのでせう。——そんな空想などあたし、まるで存じてゐませんでしたわ。そしてあんたが思ひがけなく突然、あたしの前にお現れになつた時に、あんたの空想がどんな奇怪な妄想をお作りになつてゐるかを知るために、最初のほどは隨分苦心をいたしました。でもあたしには樂しみでございました。たとへお氣が狂つてゐても、厭な氣持はいたしませんでした。あんたがそれまでにあたしを思つてゐて下さるとは、あたしには存じもよらぬことでしたもの。」

子供時代の友情が數年の歳月の流に、彼等二人の間にどういふやうに變遷して行つたかを彼女は明瞭に語つて具れた。彼女にあつて友情は熾烈なる戀愛に展開されて行つた。乙女として人間は自らの魂をうちこむべきあるものを持たなくてはならぬからである。聰明と清澄の權化たるツォエ孃は、われわれに自らの精神生活をはつきり打開けて具れた。彼女がその愛情をまづ父にむけることが正常な娘にとつての一般法則であるなら、家庭に父親だけしかゐない彼女

にはそれはきはめて容易なことである。併し父は彼女に何物も殘さなかつた。彼の潛心する學問の對象が彼の興味の一切を奪つてしまつてゐた。かくて娘は自分のまはりに他の人を探さなければならなかつた。その結果娘は子供時代の遊び友達に特別な親しさを懷いて行つた。青年がやがて彼女に目も吳れないやうになつた時に、それは娘の戀心を冷さずに、むしろ却つて戀の熱度をたかめしめた。青年は彼女の父と同じになつた。父と同じやうに彼も學問に凝り出して、學問のために人生とツォエを忘れてしまつたからである。かくて彼女に許されるものは、不信の中になほ忠實であり、愛人の中に父を再び見ひ出し、同一の感情をもつて二人を擁することであり、私達の術語を用ふれば、二人を彼女の感情に於て同視することである。誰の目にも獨斷と見えるこの小さい心理分析を、私達は何を根據として正しいと主張するのか。作家自らが非常に特異なたつた一つの言葉の中にそれを洩らして吳れてゐるからである。ツォエがその幼友達の自分に對して悲しくも變り行くところを敍するにあたつて、彼女は青年をアルケオプテリックス、動物學上の考古學に屬するあの怪鳥の比喩をもつて侮蔑したからである。二人を同視するために、彼女は一つの具體的表現を發見した。同一の言葉をもつて、彼女は愛人に

も父にも怨恨を訴へた。アルケオプテリックスはいはば妥協の、仲介の觀念である。この觀念の中に、愛人の愚行と父の同じ愚行に對する彼女の二つの思考が結合されてゐる。

青年にあつてはすべては違つた方向をとつてゐた。考古學が彼を襲つて、大理石又は青銅で作つた女にのみ彼の興味をとどめさした。子供時代の友情は情熱に亢進されずに却つて凋落し、彼女に關する回想は深い忘却の中に沈んでたとへ社交で行きあつても、青年は昔の幼友達を認めることも注目することも出來なくなつた。だが私達が觀察を廣める時に、「忘却」なるものがわが考古學者に於けるこの回想の運命に對して、果して正當な心理學的名稱であるかどうかを疑ひたくなる。どうしても思ひ出せぬといふ特徵を持つた、恰もある內部抵抗が記憶の再生に反對するやうに、强い外來の呼びかけをもつてしても、回想が甦らないといふ一種の忘却が存してゐる。かやうな忘却は異常心理學でいふ「抑壓」といふ名前で現せる。この作家が私達に示して吳れた實例は、この種の抑壓の典型であるやうに思はれる。さて私達は一つの印象の忘却が精神生活に於けるそれの回想痕跡の消滅と結びついてゐるかどうかを一般に知つてゐない。併し「抑壓」といふことに就いて、私達は抑壓が回想の消滅、回想の消散に合致してゐな

いことを斷然と主張することが出來る。抑壓されたものは一般に記憶として活躍することは出來ないが、なほ依然としてその能力と作用力を保持し、他日外來の影響によつて、忘却した回想の轉化産物と誘導體と命名出來る心的結果を持ち來たしてくる。そしてそのやうに解釋しなければ、かかる心的結果は永遠に不可解に終るのである。グラヂワに關するノルベルト・ハノルドの空想の中にツォエ・ベルトガングとの幼馴染に對しての抑壓された印象の誘導體が早くも姿を見せてゐる。若し抑壓された印象に人間のエロチックな感情がこびりついてゐるなら、若し人間の戀愛生活が抑壓の運命に遭遇するなら、抑壓されたるもののこの種の再歸を特別な合理性をもつて期待してもよい。その起原に於ては內部葛藤でなくて、外來影響による驅逐を狙つてゐる「Naturam furca expellas, semper redibit.」(天性を肉叉で逐ひ出しても、いつも再び戻つてくる。)といふ拉丁の格言はこの點に於て眞實である。併しこの格言はすべてを語つてゐない。單に抑壓された天性の一部の再歸の事實のみを語つてゐる。そして陰險な裏切りによつて行はれるこの再歸の最も巧妙なやり方を記述してゐない。格言の肉叉(フルカ)のやうな――抑壓の道具に選ばれたものこそ再歸するものの運搬者である。抑壓するものの中に、抑壓するも

のの背面に、抑壓されたものが最後に凱歌を奏するのである。フエリシアン・ロプスの有名なエッチングは、あまり注目されてない、しかも十分に評價しなくてならぬこの事實を、雜多な說明よりずつと如實に、卽ち聖者と贖罪者の生活に於ける抑壓の典型的實例を借りて描いてゐる。禁慾生活の僧侶は——確に俗世の誘惑から——十字架にかかつた救世主の像の中へ逃げ込んだのである。次いでこの十字架はまぼろしのやうに地面に沈んで、全く同じ場所へ救世主の代りに、豐滿な肉體の裸女の像が、十字架上に同じ姿勢をとつて輝くやうにのぼつた。心理學の烱眼を缺いてゐる他の畫家は、誘惑のかやうな描寫に於て、罪業を大膽なもの勝ち誇つたものとして、十字架上の救世主の側といふ位置のところに描いた。だがロプスのみは罪業に十字架上の救世主の位置を占めさしたのだ。彼は抑壓されたものはその再歸にあたつて抑壓したもの自體からあがることを意識してゐたやうに思はれる。

人間の精神生活が抑壓狀態に於て抑壓されたものの進出にいかに敏感であり、抑壓するものの背面に、抑壓するものを利用して忍び出るために、いかにかすかないかに些細な類似で足り得るものであるかを、疾患に就いて確證せんために、暫しの間話をとどめる價値がある。私が

醫者として青年や少年に就いて、性現象の最初の思ひもかけぬ啓蒙を受けた後、心中にこみあがつてくる肉慾から逃避をとり、彼の勉强心を亢進さすために抑壓の千差萬別の手段を弄し、母への小兒性愛着を熾烈にして、一般に小兒的本質を採用せんとすることを觀察する機會を持つた。丁度母との關係のところに抑壓された性慾がいかに再び進出するかでなく、防衞裝置のある箇所が殆ど十二分と申せないある機會をきつかけに、いかに崩壞するかの稀有な異樣な實例をここで詳論したのである。性なるものを轉向さす方法として數學は最も大なる名聲を博する。旣にルッソオは彼に滿足しなかつた一婦人から「Lascia le donne e studia le matematiche.」(女を去つて數學を硏學せよ。)といふ忠告を受けた。これと同じに私の見た逃避者も特別な熱心で學校で習ふ數學と幾何學に熱中したが、一日彼の理解力は突然ある何でもない問題に出合つて弛緩してしまつた。この二つの問題のうち一つは「二個の物體が衝突する時、一個の物體の速度は…………。」一つは「mなる直徑を有する一個の圓壔に一個の圓錐體を挿入する…………。」といふ文章である。他人には別に大して性的事物の仄かしとは思はれぬこんな文章に出くはしても、彼は數學から裏切られ、數學からも逃避をとつたのである。

ノルベルト・ハノルドが幼友達への愛情と回想を考古學でもつて人世から驅逐した人物であるなら、少年の感情をもつて熱愛したあの少女の忘れ果てた回想が、古代の浮彫を通して彼によびさまされたのは、誠に合理的であり、誠に至當であると言へる。彼がグラヂワの石像に戀したのは彼の當然な運命である。朦朧たる類似の力をもつて、その石像の背面に彼から捨てられた生きたツォエが動いてゐたのである。

ツォエ孃自らが青年考古學者の妄想に對して私達と同一な見解を語つてゐるやうに思はれる。「無遠慮な、長長しい、有益な說教」の最後にあたつて彼女が表現した喜悅は、グラヂワに懷く青年の興味が最初から、自分といふ人物に結びついてゐるとの熱心に基づいてゐるからである。青年に於てはつきりさうとは信じ切ることは出來なかつたが、妄想のすべての假面を通して、彼女がさう認めたのである。併し青年にとつては彼女が口づからの心理療法は今や彼女の眞心こめた效果を發揮した。歪められた不滿足な模寫に過ぎない妄想はその模寫の原像によつて置きかへられて、青年は自由を感じた。青年は回想し、彼女を根本的には寸毫も變つてゐない、善良な、快活な、聰明な女友達と認識する上に最早何の躊躇も感じなかつた。併し青年は

非常に奇怪なあるものを發見する――、

「人間は再び甦へるためには死ななくてはなりません。でも考古學者にとつてはそれは當然必要でございませう。」（グラヂワ、百四十一頁。）と娘は語る。青年が少年時代の愛情から考古學を通つて、新しく結ばれたこの關係にまで辿り着いた迂回に對して、彼女は公然と未だ青年を許さなかつた。

「いいえ。私はあなたのお名前を知つてゐます。……ベルトガングとグラヂワは同じ意味、歩行に輝く人の意味でありますから。」（グラヂワ、百四十二頁。）

それに對して私達もまた準備がなかつた。わが主人公は憂鬱から起き上り可動的な役割を演じ始めた。彼は明かにその妄想から全快し、妄想を脱却した。そして妄想の蜘蛛の巣の最後の絲を自力で斷ち切ることによつてそれを立證した。妄想的な思考の强迫を、その底に潛む抑壓されたものの暴露を通して弛緩せしめた患者も、またこれと全く同一な態度をとる。患者が一度理解したなら、その奇怪な症狀の最終の、而して最も意味深き謎に對して、突然に浮び上る聯想をもつて自ら解決の鍵を發見する。私達は神話的なグラヂワの希臘人の血統は、ツオエ・と

いふ希臘名の暗い餘韻であると以前に想像してゐたが、「グラヂワ」といふ名前に對しては立ち入つて解剖のメスを振ふことが出來なかつた。私達はその名前をノルベルト・ハノルドの空想の勝手な創作と考へてゐた。ところが、この名前が忘却したと思はれた少年時代の戀人の抑壓された名前の誘導體、眞實それの飜譯であると立證されるのを見た。

妄想の由來と妄想の崩壞は今や完結した。そのあとへ作家が語り續けるものはこの小說の大詰に役立つ。以前は治療を要すべき人としての悲しき役割を演じなくてはならなかつた青年の恢復が進捗して、青年がその日まで抑へつけてゐた情緖のあるものを、彼女にめざめさすことに今や成功したならば、將來に關して、それは私達に幸先よいものとなり得る。メレアグロの家の中にゐた時に二人の邪魔をしたあの美しい若い夫人のことに青年が言及し、その夫人こそ自分を强く魅惑した最初の女であると告白することによつて、ツオエに嫉妬を感ぜしめるまでになつた。その時ツオエはとうとうすべてが理性にたち歸つた。併し彼女だけは少くともさうでない。彼はギザ・ハルトレエベン、結婚後の今の名前は知らないが、一度訪問して、その人のポンペイ滯在の目的を學問上から援助してあげても差支へない、だが彼女は只今アルベルゴ・

デル・ソレに行かねばならぬ。そこに父が共に中食をとるために彼女の歸りを待つてゐる、二人は再び獨逸の社交、あるひは月の世界で相見る機會があらうといふ言葉で冷やかな別離をとらうとした時に、青年は最初は彼女の頰、次に彼女の唇を我物とする口實に、一遍は戀の遊戯に於ける男の義務といふべき攻撃を始める口實に、もう一度うるさい蠅を利用した。ツオエが自分はソレでお腹をすかしてゐる父のところに本當に行かねばならぬと知らした時に、二人の幸福の上にもう一度暗い影がさし込んだやうに見えた。「あんたのお父さん――お父さんは何をしていらつしやいますか――。」（グラヂワ、百四十七頁。）併し聰明な娘は自らの不安を即座におしつつむことを心得てゐた。「多分何もしてゐないでせう。父の動物採集にはあたしの手などあつてもなくてもよいのでございます。あたしの手がそれほどまでに必要でございましたなら、無分別にもあたしはあんたをこれほどまでにお慕ひ申しはいたしませんわ。」萬一父がひよつとして彼女と違つた意見であるなら、一つの確實な方法があるであらう。ハノルドはカプリイに渡つて、その地でラチエルタ・フアラリオネンシスを捕獲しなくてはならぬ。このために彼は彼女の細い指先を借りて捕獲法を練習することが出來る。捕獲すればその場で斷

蜴を放してやつて、動物學者の目の前で蜥蜴をもう一度捕獲する。そして動物學者に大陸のファラリオネンシスと娘のどちらを選ぶかを勝手に決定さすがよい。たやすく氣附かれるやうな嘲笑に悲哀のこめられた一つの動議、愛人が彼を選んだやうなお手本そのままを踏襲しないやうにといふまるで新郎にでも賴むやうな警告。ノルベルト・ハノルドが自らを襲つた大きな轉換を種種さまざまな外觀上の小さい表示の中に現した時に、この點に關して彼はわれわれ讀者の胸をなでおろして吳れる。彼はツォエと手を携へてともに共に伊太利へ、ナポリへ新婚旅行をしようといふ決心を、つひにこの間、新婚旅行の途上にあるアウグストとグレエテに、憤慨したのを忘れてゐるやうに物語つた。獨逸の本國から百哩以上も離れたこの幸福な新婚夫婦に對して感じたものは今や彼の記憶から消滅してしまつてゐた。作家がかやうな記憶薄弱を變心の最も貴重な徵候と記載する時に、作家の見解は誠に至當といへる。ツォエは「ある點廢墟から再び發掘されたやうな彼女の幼友達」(グラヂワ、百五十頁。)によつて知らされた二人の旅行の行先の希望に對して、そんな地理的なことを決定するまでに自分は未だはつきり生きかへつてゐるやうな氣がしないと返答した。

美しき現實は今や妄想を征服した。だが二人がポンペイの地を去るにあたつて一つの尊敬が妄想を待ち受けてゐた。ストラダ・コンソラレの始まるところ、古い踏石が街路と交叉する、あのヘラクレス門のところへ二人がさしかかつた時に、ノルベルト・ハノルドは立ちとまつて娘に先に歩くやうに願つた。彼女は青年の心を解した。「そして左手で着物を少しからげてグラヂワの再生ツオエ・ベルトガングは、青年の夢見るやうな凝視に見守られて、靜かにゆらめく歩みをもつて、太陽の直射を浴びつつ、踏石を越えて街路の向うへ渡つた。」エロチックの勝利と共に妄想に於ても美しく尊くあつたものは今や認められた。

廢墟から發掘された幼友達の最後の比喩をもつて作家は、わが主人公の妄想が抑壓された回想の假裝に利用した象徵の鍵をわれわれの手に渡して吳れた。精神のあるものを隔絕し保存する抑壓を、ポンペイの運命となつた、そして鋤の作業によつて再び昔の都市に現出した、あの廢墟ほど適切な比較は眞實存してゐないだらう。この故にこそ青年考古學者は忘れ果てた少年時代の戀人を想起せしめる浮彫の原像を、空想によつてポンペイに輸送しなければならなかつた。だが作家の微妙なる感覺をもつて、個體の史的事件の一片と人類史に於ける個個の史的事

件の間にかぎつけた、貴重な類似にとどまる權利は當然作家の掌中にあつたのである。

二

グラヂワの物語に散在してゐる二、三の夢をある分析方法の武器をもつて研究することが私達が目指す眞の目的であつた。では私達がこの物語全部を分解し、二人の主要人物の精神過程を検査したのは何のためであつたか。これは餘計な研究でなかつた。確に不可缺な豫行であつた。實在の人物の眞實の夢を理解しようと思へば、私達は熱心にこの人物の性格と運命、彼が夢見た前日の經驗ばかりでなく、遠い過去の經驗をも穿鑿しなくてはならぬ。併し私達の目指す本當の目的に手をつけるには未だ前途遼遠であるために、作品そのものにもつと踏みとどまつて、十分な準備を果さねばならないと考へられる。

私達が今迄ノルベルト・ハノルドとツオエ・ベルトガングを彼等のあらゆる精神表現と精神

行動に於て、まるで二人が作家の架空人物でなくて生きた本當の人間であるやうに、まるで作家の心が屈折した曇つた媒質でなく、絕對に透明な媒質であるやうに取扱つたことに氣が附いて、讀者は可笑しく思はれたに相違ない。そして作家がその物語を「夢幻劇」と銘打つて現實の寫實から明かに遠のいてゐる場合に際して、私達のやり方はますます可笑しく見えるに相違ない。併しこの作家の描寫のすべてが現實に寸分違はぬ程忠實に描寫してあることを知る私達は、グラヂワが夢幻劇でなく精神病學の研究だといはれても、決して矛盾を感じない。二つの點に於てのみ作家は、現實の合理性の土臺に根ざさないやうに見える前提を作るために、彼に許されてゐる自由を利用してゐる。第一に作家は青年考古學者をして、步行に於ける足つきの特徴ばかりでなく、容貌と姿勢の詳しい點まで、あとで現れてくる生きた人間と寸分違はぬ姿を描いた純然たる古代浮彫を發見せしめてゐる。そのために青年考古學者はこの生きた人間の肉體の現出を生命に甦つた石像と考へることが出來たぐらゐである。第二に作家は青年考古學者をして空想によつて死者を運んだポンペイの地で丁度その生きた娘に會はさしめ、一方彼をして自分の棲む都市の街路で見たその生きた娘からポンペイへの旅行をもつて遠ざからしめた。

作家のこの第二の趣向は實生活にあり得べきものとさう隔つてゐるものでない。これを單に偶然の所爲にしてしまつてもよい。遇然なるものは人間の多くの運命に明白に干與する。加ふるに偶然なるものは當然な意味を持つてくる。この偶然は人間が丁度逃避の手段を以て自らが逃避をとつたそのものに引渡すやうに決定した宿命を反映してゐるからである。來るべきあらゆる事件の發端となつた第一の前提、卽ち石像と生きた娘の寸分違はぬ類似は、もつと空想的であり、どこ迄も作家の勝手から發してゐる。然も正氣で見れば兩者の類似は步行に於ける足つきの特徵だけに限られてゐるのであつた。人はこの時現實と結びつけるために自らの空想を弄ぶやうに試みてもよい。ベルトガングといふ名前からこの家系の女は既に昔から美しい步行といふ特徵のために有名であり、遺傳を通して、獨逸のベルトガングは、古代の美術家をして步行姿の特徵を石像にとどめしめた、あの希臘娘の家系と關聯してゐると解釋してもよい。併し人間の容姿の個體的變異は相互に無關係でないこと、私達が蒐集の中に遭遇する古代の類型が私達の中にも實際再現してゐることから、近代のベルトガングがその肉體の足つき以外の他の特質にすら古代の祖先の姿を再現することは決して不可能とは言へないだらう。創作に於ける

この部分が湧き出た源泉を作家から知らして貰ふ方が只今のやうな思索より數倍賢明なことである。臆測したやうな勝手といふこの部分を再び合理性に分解するに好都合な展望が私達に開けてゐた。だが作家の精神生活の源泉に近接することは私達の自由にならぬから、私達は飽く迄も實寫に近い發展を、眞僞さだかならぬ前提の上に構成する權利を全然作家の自由にしてやりたい。この權利は例へば沙翁もまたその「リヤ王」で要求したものである。

併し私達は繰返したい。作家は精神生活に關して私達が有する知識の眞僞を驗してもよい絕對に正しい精神病學研究、醫學的心理學のある基本的學說の嚴命に合致するやうな疾患史と治療史を私達に惠んで呉れた。作家がこれを行つたのは不思議なことである。だがこの疑問に對して作家が自分はそんな目的など絕對に有してゐなかつたと否認したならどうであるか。物事に似寄りのものを發見して、こじつけることは到つて容易なことである。美しい詩的物語に作家が豫想もしなかつた意味を籠めさしたのはむしろ私達ではないか。さうである。私達はあとでこの問題をもう一度論ずることにする。最初から私達はかやうな傾向的解釋に墮しないように努めて注意した。即ち私達はこの物語を飽くまでも作家自らの言葉から複寫し、原文も註解

も作家自らに一任してしまつた。私達の複寫を「グラヂワ」の原本と比較對照されたお方は、私達の言分の正しさを認めて下さるだらう。

彼の作品が精神病學研究だと斷言する時に、一般の批評から考へて、わが作家の顏に却つて泥を塗るやうなことになる。作家たるものは精神病學との接觸を戒めねばならぬ。病的な精神狀態の描寫は醫者に任さねばならぬと私達は聞いてゐる。併し本當に正しい作家はこんな命令に耳を借さなかつた。人間の精神生活の描寫こそ作家の本領であるのだ。作家はいつの時代でも科學の先驅者であり、從つてまた科學的心理學の先驅者であつた。常態及び變態と名附けられる精神狀態の境界線は、一部は俗習的なものであり、一部は私達の大抵が時の經過のうちに何度も踏み外すほど判然としないものである。一方精神病學は微細なる精神機關の粗大な障害の下に發生した重篤な陰慘な疾患にのみ精進したいと申すなら、この精神病學の言分は間違つてゐる。私達が今日精神力の働きに於ける障害迄ずつと溯ることの許されてない、健康なるものからの、調整出來る程ほんの僅の偏差に對して精神病學は大した興味を有してゐない。確にかやうな偏差を研究してこそ、精神病學は重篤な疾患と同じに健康なるものを理解することが

出來るのだ。かくて作家は精神病學者を、精神病學者は作家を除外することが出來なくなる。そして一つの精神病學の題目を詩的に取扱ふことは何等美を損ずることなしに正しい結論に到達するだらう。

私達が物語の完結と自らの緊張の飽滿のあとで、一そうはつきり大觀出來る、しかしていよいよこれから私達の科學の專門語で複寫したい、一つの疾患史と治療史のこの詩的描寫は確に正確であると言へる。複寫する時には、前述の物語を重複することを避けておく方がよいと思ふ。

作家はノルベルト・ハノルドの狀態をどこでも妄想とよんでゐる。私達もまたこの妄想といふ名稱を反駁する理由を有してゐない。私達は妄想に就いて二つの主要特徴を擧げることが出來る。その特徵は妄想を完全に記述しないが、大體他の障害との鑑別を明かにして呉れる。第一に妄想は直接肉體に作用力を示さないが、精神的表示によつてのみ現出する疾患狀態の部類に屬してゐる。第二に妄想では空想が支配權を握る、卽ち空想が信仰を贏ち得て行動に影響を與へることを特徵とする。火山灰の中にグラヂワの特別な形の足跡を搜すがためのポンペイへ

の旅行を想起する時に、私達はその旅行に於て行動が妄想に支配されるすばらしい實例を手にすることになる。精神病學者はノルベルト・ハノルドの妄想を恐らくパラノイアといふ大部類にふくめて、まづ「崇物型色情狂」といふ病名を奉る。その理由として、石像への懸想が患者に於て最も著明なものであること、萬象を粗雜化する精神病學者の目には、青年考古學者が女子の足と足つきに懷く興味は「崇物症の嫌疑」を與へるからである。併し妄想のいろんな種類にそんな名稱を奉つて、そのやうに分類することは、妄想の內容から一考してある點いい加減なことであり、あまり役に立たたぬことである。

さらに精神病學者閣下はいきなりわが主人公にほんと「變質者」といふ燒印をうつ。その理由として彼は奇怪な偏愛のために妄想を發展することの出來る人間であるからだと言ふ。そして容赦なくかやうな運命に驅りやつた彼の遺傳を研究する。併し作家はこの點に於てそんな精神病學者を踏襲してゐない。それは立派な理由を持つてである。作家は私達讀者の「感情移入」をたやすくせんために、その主人公を私達にずつと眞近にひきよせようとしてゐる。たとへ科學的に正當であつても正當でなくても、變質者といふ診斷は直ちに青年考古學者とわれわ

かであるからである。作家はまた精神狀態の遺傳的前提及び體質的前提に無頓着である。その代り作家はかやうな妄想の起原となり得る個人的な精神狀態を深めて吳れる。

ノルベルト・ハノルドは一つの重要な點に於て正常な人間の子とまるで違つたふるまひをする。彼は生きてゐる女に何の興味も有してゐない。彼の潛心する學問は彼からこの興味をもぎとつて、その興味を大理石の女あるひは靑銅の女に轉向さしてしまつた。これを意味もない奇癖だと簡單にかたづけてしまつてはならぬ。むしろこの奇癖こそ物語の基調となるのである。何となれば、ある日のことかやうな石像の一つのものが、生きてゐる女にのみ拂はれる一切の興味を壟斷し、これによつて妄想を發生せしむるに到つた。次いでいかにこの妄想が幸運な處置によつて囘復され、石像に集中された興味が再び生きた女に戾されるかが私達の眼前に展開される。どういふ影響の下にわが主人公が女から遠ざかるやうな狀態にはひつたかを作家は私達に探らして吳れない。作家はかやうな態度をむしろ一部の空想的欲求——私達はエロチックな欲求と補筆したい——を包括する彼の素因でもつて說明出來ないことを私達に暗示する。私

達はまた後段に於て青年がその少年時代に世間普通の子供と別に變つたところがなかつたことを知る。その當時彼は小さい女の子とお友達になり、終日彼女と遊びまはり、彼女に自分の小さいお辨當を別けてやり、彼女をぶつたり、彼女と摑み合ひをしたりした。かやうな愛着の中に、愛情と攻擊のかやうな結合の中に、兒童生活の未熟なエロチイクが姿を見せてゐる。このエロチイクは最初は後れ馳せに、次いで爆發的にその作用力を發揮し、小兒時代の間にさへ醫者と詩人だけがエロチイクと認めるのを常とするものである。わが作家は自分も同じ意見だといふことを明確に私達に洩してゐる。作家はよい潮時を促まへて突然この主人公に女子の步行と足つきへの熾烈な興味を喚起せしめた。その興味のために青年は學問に於ても多數の婦人間に於ても足の崇物者の惡評を受けた。併しその興味こそ、私達から見れば、この子供時代の遊び友達への回想から必然的に誘導されたものである。事實この娘は早くも子供の時代から步行の時に殆ど垂直に足先きをむけるといふ美しい步き方の特質を示してゐた。そして丁度この步行姿の描寫を通して古代の浮彫が後年ノルベルト・ハノルドに重大な意義を有するやうになつた。なほ私達は作家が崇物症の注目すべき姿を描く場合、科學との完全な合致を示してゐるこ

ように努めてゐる。

とを追加しておきたい。ビネエ以來私達は實際崇物症をエロチックな小兒期印象に歸せしめる

女を完全に避けるといふ狀態は個人的資格を與へる。私達をして言はしむれば、一つの妄想の形成に對する素因を與へる。偶然な印象が忘却された小兒期體驗、少くとも痕跡のやうに殘されたエロチックな小兒期體驗をめざめさす瞬間に開始される。めざめさすといふ言葉は私達が後日の結果を考察する時は確に適切な言葉と言へない。私達は作家の正しい描寫を巧みなる心理學的專門語で複寫しなくてならぬ。ノルベルト・ハノルドが浮彫を一目見た時に自分はかやうな足つきを既に子供時代のあの女友達で見たことを想起しなかつた。この時青年には別に思ひ出すやうなものはなかつた。しかも浮彫のすべての作用力は、子供時代の印象とのかやうな關聯から發したのである。即ち子供時代の印象が刺激されて活動的になり、そのためにその印象が作用力を發揮し始めたのである。併しその印象は意識へ浮ばなかつた。その印象は「無意識」にとどまつてゐた。私達は異常心理學上不可缺なものとなつた一つの術語即ち無意識を今日使用するやうになつてゐる。この無意識なる言葉を言語學的意義だけで採用する哲學者や

自然哲學者のすべての論爭から絶緣せしめたいと思ふ。活動的になつて、然も當人の意識の上にのぼらない精神過程に對して、只今のところこれ以上適切な名稱を私達は知つてゐない。そして私達の申す「無意識」にはこれ以外の意味を含んでゐない。多くの思想家はかやうな無意識の實在を不合理だと私達に反駁しようとする時に、彼等は一度だつてさやうな精神現象を自ら研究したことはなかつたと私達は斷言してもよい。活動的になり熾烈になるすべての精神は、從つて同時にまた意識的であるといふ平凡な經驗の呪文に彼等は封じこめられてゐる。彼等こそわが作家がはつきり承知してゐるもの、卽ち熾烈となり力强い作用力を發現するにも拘らず、なほ意識から隔絕されてゐる精神過程が人間に實在することを學ばなくてはならぬ。

私達は以前に一度、ツオエとの子供時代の交際の回想は、ノルベルト・ハノルドの心に「抑壓」の狀態となつて存してゐたと申した。そしてその狀態を「無意識的」回想と命名した。同じやうな意味に見えるこの二つの術語の關係に暫し注意しなくてならぬ。併しその關係を明瞭にすることは決して困難でない。「無意識」は廣義で「抑壓」は狹義である。抑壓された一切は無意識である。だが無意識であるものはすべて抑壓されたものだとは主張出來ぬ。若しハノ

ルドが浮彫を一目見た瞬間にツォエの歩行を回想したなら、昔の無意識的回想は彼の心裡に同時に活動的になり意識的になつたのである。この故にこの回想は昔に抑壓されたのでないことを示す。「無意識」は純記述的な名稱であり、いろんな點で不確實な名稱であり、所謂靜的な名稱である。「抑壓」なる名稱は精神力の活動を考量し、加ふるに、あらゆる精神力、就中意識になり得る精神力を表現する努力の存在、さらにまた反對力、卽ちこの精神力の一部分、就中意識に再びなり得るものを阻止すべき抵抗の存在を語つてゐる。抑壓されたるものの特徴は、それが熾烈であるにも拘らず、意識になり得ないところにある。この故にハノルドの場合では浮彫の出現によつてうごめいたものは、抑壓された無意識、略言すれば抑壓されたものである。

ノルベルト・ハノルドにあつては、美しい歩行姿を持つ娘との少年時代の交際の回想が抑壓されてゐた。併しかういふ言ひ方は未だ心理學的情況の正しい考察でない。回想と觀念のみを論ずる限りでは、私達は未だ事物の深層に達してゐると言へぬ。精神生活に於て唯一價値あるといふべきものはむしろ感情である。あらゆる精神力なるものは感情をよびさますといふ特質によつてのみ意義深くなる。觀念が抑壓されるのは、單にその觀念が湧出を阻まられた感情喚

ある。だがこの言ひ方は感情を觀念に結びつけて考へる時にのみ理解出來る。だからノルベルト・ハノルドにあつてはエロチツクな感情が抑壓されたのである。彼のエロチイクは少年時代のツオエ・ベルトガングといふ一つの對象しか知つてゐなかつた故に、彼女への回想は忘却される。古代の浮彫の姿は彼の心に睡つてゐるエロチイクをよびさまし、少年期の回想を可動的たらしめた。エロチイクに對しての心中の抵抗のために、これ等の回想は無意識としてのみ作用力を有することが出來た。今やこれから彼の心中で演ぜられるものは、エロチイクの力とそれを抑壓する力との闘爭である。この闘爭から表出するものが妄想である。

わが作家はこの主人公に於て戀愛生活の抑壓がどこから發してゐるかの動機を語るのを省略してゐる。科學への沒頭といふことは單に抑壓が利用する手段である。醫者はこの點に關してもつと深層を探らねばならなかつた。この實例では深層の底につきあたることは多分むづかしからう。併し私達が感嘆の叫びを發したやうに、作家は抑壓されたエロチイクの覺醒が、抑壓に利用された丁度手段の圈内からいかにして行はれるかを私達に進んで描寫して呉れる。わが

考古學者が、その戀愛からの逃避を打開し、人間が誕生以來科せられてゐる負債を人生に支拂ふやうに督促されたのは、實に古代、卽ち女の石像であつたのである。

今やハノルドの心に於て浮彫の姿を導火として行はるる過程の最初の表現は、浮彫に刻まれた人物を中心に渦まく空想である。そのモデルは最良の意味に於てある「現代的」なものに見えた。恰も藝術家が街頭を歩行する娘を「生命から」そのまま石にしたやうに思はれた。そしてその古代の娘に「グラヂワ」といふ名前を與へた。彼はその名前を戰場に行進する軍神マルス・グラヂウスの綽名から思ひついたのである。彼はますます明確な姿をその娘の人物に加へて行つた。娘は貴族の娘、恐らくある神社の宮司に關係してゐる貴族の娘であらう。娘の顏の輪郭は希臘の系統と考へられる。最後に彼をして娘を大都市の熱鬧の巷から遙かに靜寂なポンペイに移さすように强制せしめた。彼はポンペイに於て娘を街路の一側から他側に渡ることの出來る溶炭の踏石の上を歩かした。空想のこの働きはどこ迄も氣儘に見え、どこまでも無意味に見える。かやうな空想の働きから初めて行動への衝動が作られる時にさへ、考古學者がその足つきは現實に合致するかといふ疑問に煩はされ、現代の婦人や娘の足つきを實地に見んため

に、觀察の目を生命にさしむけ始めた時にさへ、この行動は恰もグラヂワの石像に懷く一切の興味が彼の考古學の專門的興味の土臺から發するやうに見える、意識的な學術的動機の假面をまとつてゐた。彼が研究の對象とした街頭の婦人や娘は、勿論彼の行爲の別な下品なエロチツクな見解をとらねばならなかつた。そして私達は女達の見るところを正しとせなければならぬ。ハノルドはグラヂワに對する自らの空想の由來と等しく、自らの研究の動機に全然無智であることはあまりに明白である。私達があとで知るやうに、彼の空想の由來は幼馴染に對する彼の回想の反響であり、その回想の誘導體であり、回想がそのままの姿で意識に出ることにしくじつた後は、その回想の轉化であり歪みである。この石像がある「現代的」なものを表現してゐるといふ所謂審美的批判は、かやうな歩行姿が彼の知つてゐる、現代に街頭を歩行する娘に屬してゐるといふ知識の代用をなしてゐる。「生命から」といふ印象と彼の希臘人といふ空想の背後に、希臘語の生命を意味する娘の名前ツォエの回想が祕められてゐる。最後に妄想からさめたこの青年が私達に語るやうに、グラヂワはまさしく彼女の家名ベルトガングの名譯である。卽ち「歩行に輝く若くは歩行に華麗な」といふ意味を含んでゐる。グラヂワの父に對する空想

の姿はツォエ・ベルトガングが大學の有名な教授の娘であるといふ知識から發してゐる。即ち大學教授は古代に於ける宮司に飜譯してもよいのである。最後に彼の空想が娘をポンペイに移したのは、「彼女の靜かなしとやかな姿が要求したやうに思はれるため」でなく、彼の學問に於て、幼友達への回想を彼が朧な偵察をもつて感知したこの特異な狀態を譬へるために、これ以外の、これ以上の適切な類似がなかつたからである。彼の眞近にあるもの、即ち自らの少年時代を彼が古代の過去と對應さすなら、ポンペイの廢墟、過去をそのまま保存したこの滅亡は、所謂「內部心的」認識を通して彼が知つた抑壓の實に見事な類似を與へる。この故に作家が物語の最後で娘に意識的に使用せしめた同一の象徵は靑年の心に働いてゐたのである。「ここで一人で何か面白いものを發掘したいとあたしはかねがね思つてゐました。本當に……私の發掘物としてはあまり思ひもかけないことでしたわ。」(グラヂワ、百二十四頁。)――それから物語の大詰で(グラヂワ、百十五頁。)娘は「ある點廢墟から再び發掘されたやうな彼女の幼友達」によつて知らされた二人の旅行の行先の希望に對して返答した。

かやうにして私達はハノルドの妄想と行動の發端に於て早くも二重の決定力、異つた二つの

源泉から流れ出る誘導體を發見する。甲の決定力はハノルド自らに現れるもの、乙の決定力は彼の精神過程の檢討に際して私達に現れるものである。甲の決定力は彼には意識的なものハノルドの人物に關聯したものであり、乙の決定力は彼には全然無意識的なものである。甲の決定力は全然考古學の觀念圈から發してをり、乙の決定力は彼の心中に活動する抑壓された少年期回想とそれに粘着する感情力に發してゐる。甲は譬へば表面にあつて乙を被つてあだかも乙は甲の背面に隱蔽されてゐるやうに見える。學術といふ動機は無意識なエロチックな動機の口實である。學術は全く妄想のだしに使はれたと言ふことが出來る。だが無意識的決定力は學術的なる意識的決定力に同時に滿足を與へるもののみを貫徹せしめることを忘れてはならぬ。妄想の症候――空想と行動――は丁度二つの精神的潮流間の一つの妥協の成果である。この妥協中に、二つの潮流の各箇の要求が算入されてゐる。併しおのおのの潮流は自らが貫徹しようと思つたものの一部を抛棄しなければならなかつた。妥協が成立したところには常に一つの鬪爭があつたのである。今の場合では、抑壓されるエロチイク自體とエロチイクを抑壓下に維持せんとする權力の間に私達の假定する葛藤があつたのだ。妄想が形成されても、この鬪爭は事實す

つくり終焉したのでない。突進と抵抗はつひぞ十分な滿足に達しない妥協形式の後でいつも再燃する。わが作家もまたこの事實を知つてゐた。そしてこの故にこそ作家は不滿の感情、特異なる不安をもつて、來るべき展開の前驅とし、保證として、この錯亂の段階にある主人公を支配せしめた。

妄想と決心に對する二重の決定力のこの重大な特徴、抑壓されたるものが行動の動機に莫大に干與した、その行動に對する意識的口實の重大な特徴は、物語の展開につれ、ますます頻繁にますます明瞭に現れてくる。そしてこれは當然である。何となれば、これをもつて作家は病的な精神過程の不可缺な主要特徴を把握し、もつて描寫の筆にのぼせたのである。

ノルベルト・ハノルドに於ける妄想の發展は一つの夢と共に前進する。一見この夢は別に新しくない事件をきつかけに、葛藤にみたされてゐる彼の精神生活から發生したやうである。然しながら、果して作家がこの夢を創作する際に私達の期待するやうな深い理解を示してゐるかを檢するにあたつて、私達は暫しの間とどまりたい。精神病學は妄想の發生の前提に關して何を語るか、精神病學は抑壓と無意識の役割に關して、葛藤及び妥協形成に關して、どういふ態

度をとるかを質問したい。換言すれば、妄想の發生に關する詩的描寫は、科學といふ判決の前に存在出來るかどうかを質問したい。

そしてこの質問に對して私達は現實にあつては事態は遺憾なことに全くあべこべだといふ豫想外な返答を下さなくてはならぬ。科學はわが作家の創作の前に存在出來ぬ。遺傳的體質的前提と妄想の一見完結したやうな創作の間に科學は一つの溝を作つた。この溝を私達はこの作家が埋めたのを知る。科學は未だ抑壓の意義を認めてゐない。科學は異常心理學の現象界を説明するために無意識が不可缺なことを知つてゐない。科學は妄想の基礎を心的葛藤に求めない。妥協の成果としての妄想の症候を考へてゐない。ではこの作家一人が全科學に對立してゐるのか。否。若しこの筆者が自らの作品をも科學の中に數へるならば――この作家一人だとは申せぬ。何となれば、筆者自らは數年間――そして最近までは私一人であつたが――エンセンの「グラヂワ」に於て摑み出せるすべての見解を代表し、その見解を專門の術語で描寫して來たのであつた。私はヒステリイと强迫觀念として知られてゐる狀態に關して、衝動生活の一部の抑壓と抑壓された衝動の代表となるべき觀念の抑壓が心的障害の個體條件となることを最も詳

細に示した。そして同一見解はその後間もなく妄想の多くの類型に迄普遍された。この誘因として考察される衝動が例外なく性衝動の成分のものか、あるひは別種のものか、それは「グラヂワ」の分析に對しては問題にする必要がない。作家の選んだ例では、エロチックな感情の抑壓が明かにその核心をなしてゐるからである。心的葛藤及び相ひ戰ふこの精神潮流の妥協による症候形成のこの見地が、私が實地について觀察し、また私が醫者として治療した病例に於て丁度私がこの作家の創作したノルベルト・ハノルドで觀察出來たと全く同じに妥當であることを確信した。偉大なるシャルコオの門弟なるジャネエは早くも私より以前に神經症的な、特にヒステリイ的な疾患活動を無意識的思惟の力に歸せしめ、ヨセフ・ブロイエルは維納で私との共同の下に同じ見解を發表した。

一千八百九十三年に續く數年間精神障害の發生に關するかやうな研究に精進した私には、當時自らの研究の眞僞を作家に就いて裏づけるといふやうな妙案は浮ばなかつた。この故に一千九百三年に發表された「グラヂワ」の中でこの作家が、私が醫者としての經驗の源泉から新しく創造しようと思つてゐた、同一の見地を土臺として創作を行つてゐるのを發見して少なから

るやうな態度にどうして到達したのであらうか——。

ノルベルト・ハノルドの妄想は彼が生地の都市の街頭にグラヂワと同じ歩行姿を發見しようと焦つてゐる最中に見た、一つの夢によつてさらに發展したと既に申した。私達はこの夢の內容を極く簡單に述べることが出來る。夢見た人はこの不幸な都が滅亡した丁度その日にポンペイにあつて、自分は危難に瀕せずに恐ろしい天災に遭遇した。丁度そこへ突然グラヂワが步いてくるのを見た。そして早速にポンペイ女なるが故に、グラヂワは生まれた町のポンペイに住んでゐること、そして「何の疑惑も懷かずに彼女が自分と同時代の人間である」ことをまるで當然なもののやうに解した。彼女を思ふ恐怖から青年は思はず警戒の叫びを上げた。その叫びに彼女はふと青年の方に顏をむけたが、青年に別に注目もせずに步みを續け、アポロ神社の階段の上に跪き火山灰の雨に埋もれた。その瞬間彼女の顏色はまるで白い大理石に變つて行くやうにずんずん蒼白になり、遂ひに全く石像に化してしまつた。目覺めた時に彼は寢臺に迫つてくる大都市のざわめきを、絕望の淵にあるポンペイ市民の救助の叫びと荒れ狂ふ津浪の怒濤と

解したのである。彼が夢見たものは自分が現實で遭遇したのだといふ感情が覺めての後もずつと拭ひ去られなかつた。そしてグラヂワがポンペイに居住して、あの不幸な日に死んでしまつたのだといふ信仰が、この夢から彼の妄想への新しい添加物として殘された。

作家がこの夢で何をもくろまうとしたのか、何が作家をして妄想の發展を一つの夢に結びつけさしたのであるかを語るのは、私達に可なりむづかしい問題である。根氣のよい夢研究家は精神障害が夢に結びつき夢から誘發される實例を澤山蒐集した。有名な人の傳記の中にも、大事業や斷行の刺激を夢から得たと傳へられてゐる。併しかやうな類似は私達の理解に大した役目をなさない。この故に私達は只今の實例、作家の創作した考古學者ノルベルト・ハノルドの實例に踏みとどまることにしよう。若し描寫上のむだな修飾が存してゐないとするなら、かやうな夢を物語の脈絡にあてはめるためにどこを摑まへねばならぬか。

讀者がこの場所に「その夢を說明することはたやすい。大都市のざわめきから惹起された單純な惡夢である。ポンペイ女に夢我夢中になつてゐるこの考古學者は、このざわめきをポンペイの滅亡に解釋したのだ。」とよびかけると私は想像する。夢の働きを一般世人は輕蔑せんが

ために、夢を說明しようとする要求を制限し、夢見た內容の一部の說明を、その內容と全然合致しない外來刺激に求めようとする。夢を形成さす外來刺激として寢てゐる人を目覺めさす音響がある。かう知ればこんな夢に懷くわれわれの興味は消失してしまふ。では大都市はこの朝に限つていつもの日より騷騷しかつたと推定してもよい何か理由があつたか。例へばハノルドは前夜にいつもの習慣を破つて窓を開け放して寢込んだのだと作家が讀者に報告するのを怠つたのか。作家がこの勞力を怠つたのは遺憾至極である。さらに惡夢はしかく單純なものであつたか。否。われわれの興味はそれ程簡單に消失してしまふものでない。

外來の感覺刺激との關聯は夢形成には根本的なものでない。寢てゐる人は外界からのこの刺激に注意しない。夢など見なくてもこの刺激のために目をさますことがある。何等かの別の動機のお役に立つなら、只今の場合のやうに、寢てゐる人はこの刺激を夢の中に織込むことが出來る。寢てゐる人の感官に達した刺激によるそんな決定力が、夢の內容中に證明出來ないやうな夢が無數に存してゐる。いや。私達は別の見地から研究を進めたい。

私達は夢がハノルドの覺醒生活にとどめた殘滓をその研究の出發點にとりたい。グラヂワが

ポンペイ女であるといふ空想は前から彼の心に存してゐた。今やこの假定は彼に確實なものとなる。そして第二の確實は彼女が西暦七十九年にポンペイの都と共に埋沒したといふ事實に結合する。悲哀の感覺がその夢を包む恐怖の餘韻のやうに妄想形成のこの進展に伴つて行く。グラヂワに對するこの新しい悲哀は正しく理解出來るものでないやうに思はれる。たとへ西暦七十九年に滅亡から命が助かつても、グラヂワはやつぱり現在では數世紀こちら死んでゐる女である。あるひはこんな工合にして、ノルベルト・ハノルドとその作家を相手どつて私達は喧嘩をしなくてはならぬか。こんなことをしてもやつぱり說明の道は開かれないやうに見える。併しこの夢から發した妄想の增殖に悲哀感の强調が附着してゐる點は特に留意すべきである。

さうでもしなくては、當面の行詰りは打開され難い。この夢はそれ自體では說明が施せぬ。私達は私の「夢判斷」から智慧を借りて、夢の氷解の上にその書物に述べられてある二、三の規則を應用しようと心を極めなくてはならぬ。

夢は常に夢見た前日の心の働きと關聯してゐるといふのがその規則の一つである。作家はこの夢を直接ハノルドの「步行調査」に結びつけて、一見この規則に從つたことを告げようと思

つてゐる。さて歩行調査といふのは青年がその特有な歩き方でもつて見分けをつけようとするグラヂワの搜索に外ならない。だからこの夢はグラヂワがどこで發見出來るかの一つの指示を含んでゐる。そして彼女をポンペイの地に示すことによつてこの夢は實際グラヂワを含んでゐる。だがこれは別に新しいものでない。

もう一つの規則はかうである。夢のあとで夢の光景の現實といふ信仰が、夢見た人が夢から脱却出來ない程迄に長くこびりついてゐるならば、これは夢の光景の生き生きしさから喚起された判斷の錯覺でなくて、反對に心的行爲それ自體であり、夢中に存するあるものは人がそれを夢見たと同じに現實であるといふ、夢の內容に關聯する保證である。そして人がこの保證を信仰するのは誠に至當である。私達がこの二つの規則に立脚するならば、この夢こそ求むるグラヂワの行方を知らしてゐると結論しなくてならぬ。而してこの行方は現實とぴつたり一致してゐる。私達は今やハノルドの夢を知る。ではこの二つの規則を夢に應用することによつて何等か理性的な意味が出てこないものか。

誠に不思議なことである。この意味はただ特殊な衣裳で變裝してゐる。そのために直ちに看

破することが出來ないのだ。ハノルドは夢の中で自らの捜す娘を一つの都市に然も自分と同時代に生存してゐることを知つた。これは立派にツォエ・ベルトガングにあてはまる。少し違ふのは、夢の中の町は獨逸の大學町でなくてポンペイであり、時代は現代でなくて西暦七十九年である。これは轉移による一種の歪みである。グラヂワが現代に移されずに、夢見た人が過去に移されたのである。併し彼が行方を捜す娘と同じ土地同じ時代にゐるといふ根本的な新事實に一言觸れておきたい。夢の本來の意味と內容に關して私達をも夢見た人をも欺瞞する轉移と假裝がどこから來たのか。私達はこの疑問に對して立派な返答を與へて呉れる手段をちやんと手にしてゐる。

私達が空想の本質と起原、妄想のこれ等の先驅者に關して耳にしたすべてのことを思ひ出したい。彼等は抑壓された回想の代用物であり誘導體である。抵抗によつてその回想はそのままの姿で意識にのぼるのを阻止されてゐるが、抵抗の檢閱官の手による變形と歪みを通過して意識に出ることは許されてゐる。この妥協が成立してしまへば、かやうな回想は意識にある人間によつてたやすく誤解され得る、言ひ換へれば、支配する心的潮流の意味に於て理解され得る

空想になつてしまふ。夢の光景は人間の所謂心理學的妄想創造であり、白日にあつても精神上絶對に健全といへるあらゆる人間に於て存在する、抑壓されるものと支配するものの間に行はれるあの鬪爭の妥協成果であると想像したくなつてくる。さらに夢の光景は歪められたあるものと觀ずべきである。そのものの背面に、あるもの、假裝しないあるもの、丁度ハノルドの空想の背面にある抑壓された回想のやうな、ある意味に於て不穩當な、あるものを搜すべきであることを曉る。只今知つたやうな對立に何等かの表現を作りたい。そこで夢見た人が覺醒に於て想起するものを夢の顯在內容と呼び、夢の基礎が檢閱官の歪みにかけられるものを夢の潛在思考と呼んで兩者を區別することにする。だからある夢を解釋するといふことは、夢の顯在內容を潛在思考に飜譯し、抵抗の檢閱官によつて抹殺されなくてはならなかつた歪みの元の姿を摑み出すことを意味する。この考へ方を只今の研究中の夢に應用するなら、私達は夢の潛在思考は「おまへが搜してゐるあの美しい步み方の娘は、おまへと同じこの都市に本當に生きてゐる。」と譯すべきことを學ぶ。併しこの形のままではその思考は意識になることが出來なかつた。而して次の事實がその思考を阻止する。以前の妥協の成果として、一つの空想がグラヂワ

はポンペイ女であるといふ觀念を確立し、若し彼と同じ場所同じ時代に、彼女が生存してゐるといふ事實を認むべきであつたなら、「おまへはグラヂワと同じ時代にポンペイに生存してゐる。」といふ歪みを假定することだけが可能となる。そしてこれこそ夢の顯在內容が實現し、彼が生存してゐる現在として描寫した觀念である。

夢はたつた一つの思考の、大抵は思考の系列の、思考組織の描寫、いはば上演であることがある。ハノルドの夢からなほ內容の他の成分を摑み出すことが出來る。その成分に加へられた歪みの面皮を剝ぐことは極めて容易であるから、私達は歪みの背面の潛在觀念を嗅ぎつけることが出來る。これは夢の一部分である。それに迄この夢が結びつく現實の保證をずつと擴張することが出來る。卽ち夢の中では步行してゐるグラヂワが石像に轉化されてゐる。これこそ現實の顚末を巧妙に詩的に描寫したものに外ならない。事實ハノルドは自らの興味を生きてゐる娘から石像に移した。愛人は彼にとつて石の浮彫に轉じた。無意識に抑留された夢の潛在思考は、この浮彫を生きた人間にひき戾さうとした。潛在思考はさきのこの關聯に於て「おまへはグラヂワの浮彫だけに興味を集中してゐる。それは現在この町に生存してゐるツオエを思ひ出

さしめるからである。」と語らうとする。だがこの思考が萬一意識になり得るなら、妄想は同時に終焉することを意味する。

夢の顯在內容の箇箇の部分をこのやうに無意識的思考で置換することが私達の任務であるか。嚴密な意味に於てさうである。夢に見られた本當の解釋にあたつて、私達はこの任務を忌避することは許されぬ。解釋の時は夢見た人も私達に忌憚なくぶちまけて吳れねばならぬ。こんな要來を作家の架空人物に提出出來ないのは自明である。併し私達がこの夢の主要內容を未だ解釋の若くは飜譯の仕事にかけてゐなかつたことを看過しようとは思はない。

ハノルドの夢は惡夢である。その內容は恐ろしいものである。夢見た人は睡眠中に恐怖を感じ、悲哀の感覺は覺めての後も殘されてゐた。私達の說明の上にこんなことはあまり役に立たない。私達はもう一度夢判斷の學說を借用するように强ひられる。その結果、夢中で感ぜられた恐怖を夢の內容から演繹せんとする誤謬に陷らないやう、夢の內容を覺醒生活の觀念內容と同一に取扱はないやうにと警告して吳れる。夢判斷の學說はさらにまた、私達がいかにしばしば微塵の恐怖も感ぜずに途方もない恐ろしいことを夢に見るものかを敎示して吳れる。眞相は

まるで違つたもの、早速に摘發は出來ぬが、確實に立證出來るものである。惡夢の恐怖は一般の神經症恐怖と同じに性的情緒、リビド感覺に相當し、抑壓過程を通つてリビドから發するものである。だから夢の解釋に際して恐怖を性興奮に置換しなくてはならぬ。このやうにして發生した恐怖は今や——例外なしでなく、頻繁に——夢の内容に選擇的な影響を逞しくし、恐怖情緒に關する夢の意識的な誤解的な見解に適切な觀念要素を夢の中に運んでくる。だが前述したやうに、いつでもさうだとは申されない。夢の內容の大して恐ろしくない惡夢が澤山存してゐる。從つてかういふ場合に感じた恐怖に意識的な說明を施すことが出來ない程である。

夢中の恐怖に關する只今の說明が非常に奇怪に響き、そのため一般の人が容易に信じようとしないことを私はよく承知してゐる。併し諸君がその說明と和解されんことをおすゝめしたい。加ふるにノルベルト・ハノルドの夢が、恐怖のこの見解と一致し、この見解から說明が下せるものなら誠に注目に價するものである。從つて、夢見た人に於て夜分に戀愛の憧憬がうごめき、愛人への回想を彼に意識せしめ、もつて妄想を引き破らうとする力強い突擊が作られたが、再び否定されて恐怖に轉化し、恐怖は今や夢見た人のアカデミックな記憶から恐ろしい光景を夢

の内容に持込んだと推斷することが出來る。かやうにして、夢の本來の無意識內容、嘗ては交際を共にしたツォエへの戀のあこがれは、ポンペイの滅亡とグラヂワの喪失といふ顯在內容に變形された。

こんな推斷はあまりこじつけのやうだと一寸は考へられるが、若しエロチックな願望がこの夢の赤裸裸な內容であるならば、歪められた夢の中のどつかに少くともかかる願望の明白な殘滓が隱蔽されてゐると指摘することが出來る。多分この事實は物語の後段に現れた生きた證據によつて立證されるだらう。妄想中のグラヂワに初めてめぐり合つた時に、ハノルドはこの夢を想起し、妖怪にあの時と同じにもう一度そこへ寢て下さいと懇願した。(*) しかし若い令孃は靑年の要求に柳眉を逆立てて立上り、この變てこな靑年のもとを去つた。令孃は妄想に支配された彼の言葉から不穩當なエロチックな願望を感じたのである。グラヂワのこの解釋をそのまま受容れてもよいと信ずる。本當の夢にあつてもエロチックな願望の描寫に對してこれ以上確乎たるものを望むことが出來ないだらう。

以上の如く、夢判斷のある規則をハノルドの第一の夢に應用することによつて、私達はこの

夢の主要特徴を理解し、この夢が物語の脈絡にぴつたりあてはまることを知る。ではこの夢はかやうな規則を顧慮して作家が多分創作したのに相違ない。何故に作家が妄想の來るべき發展の前提に、一つの夢を挿入したかの疑問を世人は提出することが出來るだらう。私はかう考へる。それは誠に巧妙に構成されてゐる、そして現實とぴつたり一致してゐる。私達は本當の疾患に於ては、妄想の形成は大抵一つの夢と結びつくことを承知してゐるが、夢の本質を闡明した後、私達は別段この事實に新しい謎を發見する必要はなかつた。夢と妄想は同一の源泉、卽ち抑壓されたものに由來してゐる。夢は譬へば正常な人間の生理的妄想である。抑壓されたるものが妄想として覺醒生活に闖入出來る迄に强大になる前に、それは睡眠狀態といふ好機を利用して、永續的に作用する夢の姿でたやすく第一步の成功を戰ひとることが出來る。卽ち睡眠中精神活動の低下をもつて、支配的精神力として抑壓されたものに對立してゐる抵抗の强さに弛緩が生ずる。この弛緩こそ夢の形成を成就さすものである。そしてこの故にこそ夢は無意識的精神の知識の扉を開くべき最良の鍵を與へる。ただ異なるのは夢は覺醒生活の心的裝塡の再建と共に消失して、無意識が贏ち得た地盤は再び空虛になるだけである。

(＊) グラヂワ、七十頁。「いいえ。あんたに口をきいたことがないといふ答がありません。――それ、あんたが寝ようと横におなりになり、丁度私があんたの側にゐました時に、あんたに聲をかけました。――あんたの顔は大理石のやうに靜かな美しさを帶びてゐました。お願ひです。――あの時のやうにもう一度階段に寢て下さい。」

三

物語の後段にもう一つの別の夢が存してゐる。この夢は前の夢よりもつともつと力強くわれわれに、飜譯を施して主人公の精神的事件の脈絡の中にあてはめよと誘ひかけることの出來るものである。だが、短刀直入にこの第二の夢をメスにかけようとして、作家の描寫を捨ててしまへば私達の得るところは極めて僅少である。他人の夢を解釋しようと欲する人は、夢見た人から外的にも內部にも體驗した一切を出來る限り詳細に打ちあけて貰はなくてはならぬ。だから物語の織緯に踏みとどまつて私達の註釋でひきつづき堅めて行くのが最良だと考へられる。

西曆七十九年のポンペイの滅亡に際するグラヂワの死亡からの新しい妄想の形成は、さつき分析を試みた第一の夢の唯一の餘韻でない。すぐその夢のあとでハノルドは伊太利への旅行を

決心する。そしてその旅行はとうとう彼をポンペイに運んだのである。併しこのすぐ前にある事件がもちあがつた。窓ぎはによりかかつてゐる時に、彼は街頭にグラヂワの姿勢と歩行そのままの姿を見たと信じた。自分の寢卷姿を忘れて靑年は彼女のあとを追ひかけ、彼女に追ひつけずに、道行く人達の嘲笑に出會つて逃げ戻つた。彼が再び自分の部屋に戻つたあとで、向ひの家の窓にぶらさげた鳥籠のカナリヤの唄が彼の胸底に、自分もまた幽閉から自由の身になりたいといふやうな氣持をひき起さした。そして春の旅行は急速に決心され急速に斷行された。

作家はこのハノルドの旅行を特別鋭い光の中に置き、その光によつて彼の內部過程の一部を照射して吳れる。勿論ハノルドはこの旅行に學術のためといふ口實を設けたが、こんな口實は通用しない。彼でも「この旅行へのあこがれはある名狀し難い感情から發してゐる。」ことを實際承知してゐたのである。ある特殊な不安が彼の出會ふあらゆることに不滿を感ぜしめ、彼を羅馬からナポリ、ナポリからポンペイに驅りやつて、この最終の地にあつてさへ彼の氣分に落つきを見なかつた。彼は新婚旅行の男女の示すたわけにいらいらし、ポンペイの旅館に群がる家蠅のあつかましさに憤慨した。併し最後に「自分の不滿が自分の周圍に存するものから發

するのでなく、ある點までその不滿の根元が自分の心中に存する。」と認めざるを得なくなつた。自分はあまり興奮し過ぎてゐると思つた。「何だとはつきりは說明出來ぬあるものが、自分に缺けてゐるがために不滿である。」と感じた。かやうな氣分の中に、彼は自らの女王なる學問にさへ謀叛氣を持つた。初めて眞晝の太陽を浴びてポンペイをさまよひ步いた時に、「彼の一切の學問は彼を見捨てたばかりでなく、學問を再び拾ひあげようとする微塵の希望も與へずに彼を棄て去つた。彼は遠い遠い國からのやうにその學問を思ひ出した。そして彼の感覺において學問は古びた干乾びた退屈な叔母であり、世界に於ける一番間拔けた無用の長物であつた。」（グラヂワ、五十五頁。）

この混沌たる不滿な心の狀態の中に、この旅行に關聯する謎の一つが、彼が初めてポンペイを步くグラヂワの姿を見た瞬間に氷解した。初めてある他のものが彼の意識にのぼつて來た。青年は自らの心の中の眞の動機に氣附かずに、自分はこのためにこそ伊太利に、羅馬やナポリに滯在せずに、彼女の痕跡が發見出來るかを探るがために、はるばるポンペイにやつて來たのだ。そして言葉の意味に於て、彼女は他人とは立派に區別のつく蹠の足跡を火山灰の中に殘し

てゐるに違ひないからである。」(クラヂワ、五十八頁。)

作家はこの旅行の描寫に綿密な注意を拂つてゐるから、その旅行とハノルドの妄想との關係、事件の關聯の中のその旅行の地位を說明する價値が十二分に存してゐる。この旅行は最初は不明だが後段になつて初めてはつきりする動機、作家が直接に「無意識的」と命名する動機から行はれたのである。これは現實生活にあつても眞なるものだ。人はかやうな行動をとるためにわざわざ妄想にはひる必要はない。むしろ健康人にあつてさへ日常茶飯な出來事である。人は自分の行動の動機に瞞着され、いろんな感情の流の葛藤によつてかやうな混亂の條件が明瞭になる時は初めてその眞の動機を意識する。だからハノルドの旅行は最初から妄想に行使されるやうに目論まれて、その地でグラヂワの搜索を持續するために彼をポンペイに驅りやつたのである。夢の前日、夢の直後に、この搜索を滿たさしめ、夢それ自體はグラヂワの行方の問題に對して單に彼の意識から抑壓される解答であつたことを思ひ出す。併し私達に未知のある何等かの權力がまづ第一に妄想に包まれた決心の意識化をもおさへつけ、そのために旅行の意識的動機に不十分な、ところどころに甦るべき口實だけを殘した。作家は夢、街頭に於けるグラヂ

ワと思はれる姿の發見及びカナリヤの唄のきつかけによる旅行への決心を、相互に關聯のない偶然事のやうに並べて私達に新しい謎を與へてゐる。

私達が後段でツォエ・ベルトガングの談話から聞く説明によつて、物語のこの暗い部分が私達の理解の上に明るくなつてくる。ハノルドが自分の窓から街頭に見たと信じてそのあとを追つた歩行の姿は、眞實グラヂワの原像、ツォエ孃であつたのだ。(グラヂワ、八十九頁。)「彼女は現在おまへと同じ町に生存してゐる。」という夢の報告はこの故に幸運な偶然によつて動かすべからざる確證を提供した。この確證に直面して彼の内部的反抗は崩壞してしまふだらう。カナリヤの唄がハノルドを旅行に驅り出したといふそのカナリヤはツォエのものである。そしてそのカナリヤの鳥籠はハノルドの家と筋向ひの彼女の家の窓にかかつてゐた。(グラヂワ、百三十五頁。)娘の問責によつて「陰性幻覺」を賦與されて、現代の人間を見ず現代の人間を認めずといふ術を解したハノルドは、最初から私達が後段に到つて初めて發見するものに對し無意識的知識を有してゐたに相違ない。ツォエの近所といふ表示、街頭に於ける彼女の姿、彼の窓近くの彼女の鳥の囀りは夢の働きを强め、エロチイクに對する彼の抵抗にかくも危險なこ

の情勢に際して――彼に逃避をとらしめた。旅行は夢に於ける戀愛衝動の闖入後の抵抗の恢復、肉體を持つ現代の戀人からの逃避の試みから發してゐる。この旅行は實際的では抑壓の勝利を意味する。彼の以前の行爲、婦人や娘の「歩行調査」に於てエロチイクが勝利を得たやうに、今度は抑壓が支配權を握つたのである。併し到るところで闘爭のこの動搖の中に決心の妥協性が保たれてゐる。生きてゐるツオエから逃れようとするポンペイへの旅行は、少くともツオエの代用たるグラヂワに導く。だが夢の潛在思考に反抗して行はれた旅行はポンペイへといふ夢の顯在内容の命令を伴つた。かやうにして、エロチイクと抵抗が新しく闘爭を開始する時は、いつでも妄想が新しく凱歌を奏するのである。

ハノルドの旅行を自分の近くにゐる愛人に對して彼の心胸にこみあがる戀愛衝動からの逃避と觀ずるこの見解は、伊太利滯在中の彼の心に描かれた情緒狀態と調和する。彼を支配してゐるエロチイクの否定は、新婚旅行の人達に對して感ずる憎惡の中に表現されてゐる。羅馬のアルベルゴで、新婚の獨逸人の夫婦「アウグストとグレエテ」の隣室に泊り合はし、薄い壁を通して二人の寢物語を聞かされた夜に見た小さい夢は、一番最初の大きな夢のエロチックな傾向

を晩まきながら明瞭にして呉れる。この新しい夢は青年を再びポンペイに置いた。その夢の中でヱスヸオ火山はまたぞろ爆發してゐる。かくてこの夢は彼の旅行中に引き續き作用してゐる夢と關聯してゐる。併し今度は避難する人達の間に――前の夢のやうに自分とグラヂワを見ずに――ベルヱデレのアポロとカピトリンのヴィナスを見た。多分隣室の夫婦を皮肉に昇格したものであらう。アポロはヴィナスをだき上げて運んで行く。そしてヴィナスを暗い物蔭にある馬車あるひは荷車のやうに見える一つのものの上に置いた。その方からぎしぎし軋るやうな音が聞える。この夢を解釋する上には特別な術など要せない。（グラヂワ、三十一頁。）

わが作家はその敍述に於てどんな筆致をも出鱈目に無意味に下さなかつたことを私達はずつと最初から知つてゐる。この點から作家は旅にあるハノルドを支配する無性的潮流を語る別の證據を與へて呉れた。ポンペイの町を數時間散策してゐる間に、「注目すべきは、自分が嘗て西曆七十九年の火山爆發によるポンペイの滅亡の日に居合せてゐる夢を見たことを彼は一度だつて思ひ出さなかつた。」（グラヂワ、四十七頁。）グラヂワの姿を見て初めて青年は突然、この夢を思出し、同時に自分の謎のやうな旅行を操る、妄想に染められた動機を意識した。夢の

このやうな忘却、夢と旅行中の精神狀態の間の抑壓限界は、この旅行が夢の直接刺激のためでなく、夢の祕密な意味をまるで知らうとしない精神力の噴出として、夢への叛逆のために作られたこと以外他種の意味が下せるだらうか。

併し他方に於てハノルドは彼のエロチイクに對するこの勝利に對して幸福でない。抑壓された精神衝動は不快と抑制によつて、抑壓するものに復讐するに十分强力になつてゐる。彼の憧憬は不安と不滿に轉化した。そしてこれ等は彼をして旅を無意味に感ぜしめた。旅行の動機に對する彼の洞察は妄想に行使されて抑制された。かやうな場所に於て當然彼のすべての興味を刺激すべき學術への彼の關心は擾亂された。かくてわが作家はその主人公を戀愛から逃避せしめた後、一種の危機の中に、全く混亂した散亂した狀態の中に、相戰ふ二つの一方が他方より數倍强力でないために、兩者の差違が嚴格な精神的制度を作ることが出來ぬ時に、疾患の絕頂に現れるのを常とする、錯亂のうちに現出せしめてゐる。次いで作家は救助するために整理するために手を下した。と申すのは丁度このところへ妄想の治療を行ふグラヂワを登場せしめたからである。作家の創作した人間達の運命を、作家が彼等に從はさすべきすべての必然性に反

して、幸福な大詰に導く力をもつて、ハノルドをしてポンペイに逃避せしめたあの娘を作家は丁度その場所へ移した。かくて作家は妄想が青年をして肉體を有する愛人の住む土地から、青年の空想の中に愛人の代理を務めるグラヂワの墓場に赴かさすやうに驅りやつた愚行を訂正したのである。

丁度物語のクライマックスと名附くべき、グラヂワとしてのツォエ・ベルトガングの登場と共に忽ちわれわれの興味もまた一新される。若し私達がこれ迄に妄想の發展と一緒にずつと生きてゐたのであるなら、今こそ私達は彼の治療の證人となり、果して作家がこの治療の推移を單に構想したのか、あるひは本當に實在する可能に準じて構成したかと尋ねても差支へない。女友達との談話に於けるツォエ自らの言葉から、私達は斷然とかやうな治療の意志をツォエに歸せしめる權利を有してくる。(グラヂワ、百二十四頁。)では彼女はどのやうにして治療を開始したのであるか。「あの時」と同じにもう一度寢て下さいといふ要求によつて惹き起された憤慨を抑へつけた後、彼女は翌日の正午に再び同じ場所に現れて、昨日の彼の行爲を理解する上に缺けてゐた、すべての祕密な知識をハノルドからおびき出した。彼女は青年の夢、グラヂ

ヮの浮彫、彼女と浮彫を結びつける特有な歩き方に就いて知つた。彼女が氣附いたやうに、青年の妄想が彼女に割り當てた短い時間生命に甦つてくる妖怪の役目を自分に受持つて、青年が意識的目的なしに携へて來た墓場の花を貰ひ受け、青年が自分に薔薇を吳れなかつた殘念さを述べ、兩義の言葉をもつて靜かに青年に新しい立場を指示してやつた。(グラヂワ、九十頁。)

彼女がその妄想の裏面に潛む推進力としての彼の戀愛を認識した後、この子供時代の愛人を夫に贏ち得ようと決心する、この優れて聰明な娘のふるまひに對して懷く私達の興味はこのところに來て、恐らくこの妄想が私達にさへ惹き起さす奇怪なる感じのために抑へつけられる。西暦七十九年に埋沒したグラヂワが、現在眞晝の妖怪として一時間を限つて彼と談話をかはすことが許され、その時間が過ぐれば再び消え去るか、あるひは彼女の墓場に再び歸へるといふその最近の發展、彼女の近代的な足の被ひの認識によつても、古代語を彼女が知らないことによつても、さらにその昔の時代に存してゐなかつた獨逸語を彼女が口にすることによつても、混亂に陷らないこの幻影は、作家の「ポンペイの夢幻劇」といふ名稱を正當にせしめるが、一方臨床的現實へのすべての標準を除去してしまふ。併し一歩詳しく考察する時は、この妄想の

自らに負擔してゐる。作家は物語の前提に於て、ツォエがあらゆる特徴に於て石の浮彫の姿と生き寫しであるときめた。從つて讀者はこの前提の有り得べからざるものを、ハノルドがツォエを生き返へつたグラヂワと觀じたといふ、この前提の推論に迄及ぼすことを警戒しなければならぬ。妄想の說明はこの點に於て、わが作家がまた私達に合理的なるものを全く自由にさせなかつた事實をもつてその價値を高める。カンパニアの太陽の熱火とヹスヸオにおひたつた葡萄酒のまどはすやうな魔力をもつて、作家はさらに主人公の放埒に對して救助するやうな緩和するやうな狀況を引き入れた。併し一切を闡明する、一切を解體する最も重大な因子は、情緒に强調された興奮が滿足を見ひ出すなら、われわれの思考力は輕卒に荒唐無稽な內容すら認容せんと決心するその輕卒さである。いかに容易にいかにしばしば、理性に强い人間でさへ、かやうな心理學的狀態の下に、部分的低能の反應を示すものかは驚くべきものであり、大概あまり評價されてないものである。そしてあまり空想好きでない人はこの事實を隨意に何度でも自らに就いて觀察するであらう。

そして只今考察してゐる思考過程の一部が、無意識的動機若くは抑壓された動機に結びついてゐる時は、特に觀察し易いものである。これに關聯して私に手紙を呉れたある哲學者の言葉を引用させていただきたい。「私は自らの體驗した途方もない間違ひの實例、後になつて（非常に不合理な爲方で）理由が分かる無分別な行動をいちいちノオトに書きとめ始めた。その結果、いかに澤山の馬鹿なことが暴露されるかに我ながら恐れ入つた。だがそれは定型的といへるほど例外のないものである。」幽靈とか妖怪とか、さては亡魂の歸還とかいふ信仰、さやうな信仰は宗教の中に根を張つてをるものであり、少くとも私達すべてが子供時代に信じたものであるが、すべての教養ある人達の間にも決して決して消滅してしまつてゐるものでない。他の點で理性的な人達でも靈魂に對する興味と理性を、結び合せる事實を私はこの問題に關聯して考へたくなる。冷靜に無信仰になつた人達でさへ、感動した時とか當惑した時に、いかに容易に靈魂の信仰が一瞬間甦るものかを自らに認めて恥入る次第だ。私はあるお醫者を知つてゐる。このお醫者は嘗て自分の女患者をバセドウ氏病で死去さした。そして俺が藥の處方を間違へたために、あんな不幸な歸轉をとつたのかも知れぬといふ朧な疑念から、彼はどうしても脫

け出ることが出來なかつた。それから數年後のある日、自分の診察室へ一人の娘が診察を受けに來た。その娘を見た時、どう考へてもそれがあの死んだ女患者としか思はれなかつた。そのお醫者は死んだ人が生き返へるといふのは、矢張本當なのだといふ考へに一杯になつた。そしてその娘がバセドウ氏病で亡くなつたあの女患者の妹だと話されてやつと身慄がおさまつた。バセドウ氏病に罹ると、よく申されるやうに、顔の特徴が非常によく似通つてくる。そして只今の場合ではこの定型的な類似の上にさらに姉妹といふ類似が加はつたのである。そのお醫者といふのは實は私のことである。この故に私は生命に甦つたグラヂワの短い妄想の臨床的可能に就いてノルベルト・ハノルドと論爭する元氣が出ない。慢性妄想形成（パラノイア）の最も重篤な病例に於て、巧みに發明した巧みに理窟に合ふ妄誕の、最も極端なものが活躍することは、どんな精神病學者も知つてゐる。

グラヂワに初めて會つてから、ノルベルト・ハノルドはまづ自分の知つてゐる第一の旅館で、次いで第二の旅館で、ほかのお客が中食をしてゐる側で葡萄酒をとつた。「勿論決して荒唐無稽な假定が彼の頭に浮んだのでなかつた。」彼はどの旅館にグラヂワが宿泊して食事をとるか

を知りたいためにそんなことをしたのである。併し彼のこの行動に何かほかの意味がこもつてゐないとは斷言出來ない。メレアグロの家での彼女との第二回目の會見を濟ましたその日に、彼は注目すべき、一見連絡のないいろんな事を經驗した。彼はボルチコの壁に細い裂目を發見した。丁度そこでグラヂワの姿がかき消えたのである。それから馬鹿げたあの蜥蜴採集家に出會つた。この採集家はまるで知人のやうに青年に親しく話しかけた。それから「アルベルゴ・デル・ソレ」といふあまり人目につかない第三の旅館を發見した。その旅館の主人がポンペイ娘の遺骸と一緒に發掘されたといふ口上附の、靑鏽を着せたブロオチを彼に賣りつけた。そして最後に自分の旅館に歸つて新來の二人のお客に會つた。その二人は兄と妹のやうに見え彼に好感を與へた。以上のやうな印象がみんなこんがらかつて途方もないほど馬鹿馬鹿しい一つの夢に盛り上げられた。その夢はかうである。「蜥蜴をとらへるために草莖でもつて係蹄を作りながら、どこか太陽にグラヂワが坐つてゐた。そして口をきいた。一寸動かずにゐて下さいませ。——私の女同僚は間違つてゐません。この方法は本當に素敵ですわ。この方法でなら成功いたします。」未だ覺め切らないうちに、これはあまり氣違ひじみてゐるといふ批判でもつて

彼はこの夢に反抗し、次いで夢から覺めようともがいた。そして嘲笑するやうな短い叫びを發し、蜥蜴を嘴にくはへて飛び去つた、目に見えない鳥の救ひで彼はやつとこの夢を破つた。

これから一つこの夢をも解釋にかけようとする、換言すれば、この夢を歪みの正體であるべき潛在思考で置換する試みを斷行しようではないか。夢だけを見てをればこの夢は實際馬鹿馬鹿しいものである。そして夢のかかる荒唐無稽こそ、夢に正當な心的行爲といふ本質を許すまいとする、夢を心的要素の無計畫的な興奮から發したものとする、あの見解の中核をなすものである。

私達はこの夢に夢判斷の正規な操作と名附くべきあの術式を應用することが出來る。その術式の骨子はかうである。顯在夢にある見掛けの連絡を度外視して、その內容の各部分を主眼において、夢見る人の印象、回想、自由聯想の中に夢の由來を捜す。ところがハノルドに就いて試驗など行へないから、私達は彼の印象關係だけで滿足して、十分細心に彼の聯想の代りに、私達自らの聯想で埋め合はすことにする。

「どこか太陽に坐つて、蜥蜴をとらまへた。そして口をきいた。」――夢のこの部分は前日のど

ういふ印象に合致するか。疑ひもなく蜥蜴採集家なるあの老紳士に出會つたことと合致する。夢ではこの老紳士はグラヂワと置き換へられてゐる。彼は「日の照りつけた」阪路に腰を下ろし若くは寢そべつて、ハノルドに話しかけたのである。夢中のグラヂワの言葉もまたこの紳士の言葉を模寫してゐる。「同僚のアイマア君が考案して呉れた方法は理想的ですね。その方法でならいつやつても成功しますよ。一寸動かずにゐて下さい——。」と比較して欲しい。全く同じやうなことを夢の中でグラヂワが口にしてゐる。ただ違ふのは同僚のアイマア君がここでは未知の女同僚で置き換へられてゐる。なほ動物學者の言葉の中の「いつやつても」が夢の中で脫落し、文章のかかり工合が少し變更されてゐる。だから前日のこの事件が少し變形され、少し歪められて夢の中に轉化されてゐる。何故にかうであるのか。この歪み、老紳士のグラヂワでの置換、不可解な「女同僚」の挿入は何を意味するのか。

夢判斷にある規則がある。それはかうである。夢中に聞く言葉はいつも覺醒時に耳にした言葉、あるひは自らが口にした言葉から發してゐる。この規則は只今の場合に活用出來さうだ。グラヂワのその言葉は前日に彼が耳にした老動物學者の言葉の變形に過ぎない。夢判斷のもう

一つの規則はかうである。甲なる人物が乙なる人物で置き換へられるか、甲なる人物を示す位置に甲と乙との兩人物が混合することは、兩人物の同等、兩人物間の一致を示す。私達がこの規則をも只今の夢に活用するなら夢の飜譯は次のやうになる。「グラヂワはあの老紳士と同じやうに蜥蜴をとらへ、彼と同じやうに蜥蜴の捕獲に巧みである。」この飜譯は未だ合點が行かぬものだが、別の謎が私達に現れてくる。夢の中で有名な動物學者アイマァのかはりを務める「女同僚」は、前日のどういふ印象に關聯をつけてよいか。私達は幸なことに澤山の選擇を有してゐない。ある他の娘だけが「女同僚」と目指されることが出來る。その娘といふのはハノルドが兄に伴はれて旅行してゐる妹と早合點した、あの好感を與へた若い令孃のことである。「彼女は胸に赤いソレントの薔薇をつけてゐた。その薔薇は自分の部屋の隅からちらつと見た時に、彼にある記憶をよびさますやうであつたが、どういふ記憶だか思ひ出すことが出來なかつた。」作家のこの文句はこの娘こそ夢中のあの「女同僚」だと主張する權利を私達に賦與する。ハノルドがこの時思ひ出すことが出來なかつたものは確に、グラヂワの言葉、即ち彼女が青年に白い墓場の花を呉れるやうに賴んだ時に、もつと幸福な人達へは春には薔薇を贈ります

といふ言葉に外ならなかつた。併しこの言葉の中に求愛が祕められてゐる。ではこのもつと幸福な女同僚が立派に成功したといふ蜥蜴の捕獲は何であるか。

その翌日ハノルドは兄と妹と思ひこんでゐた二人が相擁してゐるところに出くはして、前日の自分の早合點を訂正することが出來た。二人は實は戀人である。この二人がハノルドのツォエとの第三回目の會見を突然邪魔した時に私達が聞いたやうに、二人は今新婚旅行にやつて來てゐるのである。意識的に二人を兄と妹と考へたハノルドは、その翌日になつて初めて明白になつた二人の眞實の關係を、その無意識に於て、その時卽座に認めたと假定するなら、夢中のグラヂワの言葉に當然立派な意味が現れてくる。卽ち赤い薔薇は戀愛關係の象徵である。ハノルドはこの二人の關係をやがて自分とグラヂワの間に結ばれるものと同じものだと解してゐる。蜥蜴の捕獲は男の捕獲を意味をする。そしてグラヂワの言葉は大體かうなる。「あたしにお任せなさいませな。どうして男のお方を捕へるかは、この娘さんに劣らぬ程あたしでもちやんと心得てゐますわ。」

ではは何故にツォエの心に潛む意向に對するかやうな洞察が、夢に於て老動物學者の言葉の形

を借りてしか表現出來なかつたのか。何故にツォエが男子の捕獲に老練なことを、老紳士が蜥蜴の捕獲に老練なことで描寫するのか。こんな質問にお答へするのは至つてたやすい。蜥蜴捕獲者が動物學教授なるベルトガング、卽ちツォエの父に外ならぬこと、このベルトガングはハノルドの懇意な人であるがために、彼がハノルドにまるで知合のやうな親しさで話しかけたのは當然であることを私達はずつと前に推察してゐた。私達はここでもハノルドが無意識に於てこの敎授を直ちにベルトガングと認めたと想像したい。「この蜥蜴採集家の顏をどつかで、多分二軒の旅館のうちのどちらかで一度見たやうな氣がした。」――かくてツォエに推定した意向を包む奇怪な衣裳に說明が下せる。彼女は蜥蜴捕獲者の娘である。彼女は父からこの術を受け繼いだのである。

この故に夢の內容に於て蜥蜴捕獲者をグラヂワで置換したのは、無意識で認識してゐる二人の人物の關聯に對しての描寫となる。同僚アイマア君の代りに「女同僚」を挿入したことは、夢の中に彼女の男への求愛の理解を表現さすやうに許す。夢は前日の二つの經驗を、意識への進出に不許可を蒙つた二つの洞察に非常に朦朧たる表現を與へんために、一つの狀況の中へく

つつけた。私達の術語を用ひば「壓縮」したのだ。併し私達はこの夢の奇怪性をもつともつと遞減せしめ、さらに顯在夢の形成に及ぼす前日の他の經驗の影響を立證するまでずつと前進さすことが出來る。

私達は今迄の報告で滿足せずに、何故に蜥蜴捕獲の光景がこの夢の中核となつたかを説明し、併せて夢の思考に潛むもつと別の要素が顯在夢に於ける「蜥蜴」の表出に影響したことを臆測することが出來る。これは實際容易なことだ。私達はハノルドが丁度グラヂワの姿がかき消えたと思はれる壁のところに一つの裂目を發見したことを思ひ出す。その裂目は「非常に細い人ならくぐつて行けるぐらゐの大さ」である。この認識によつてその日彼の妄想は變化を受けた。グラヂワが姿を消すために、わざわざ地面の中に沈まなくても、この道を通つて彼女の墓場に歸ることが出來る。無意識的思考に於て彼は、娘の姿の突然の消失に只今自然な説明が見附かつたと言はうとした。併し細い裂目を無理やりに通ること、かやうな裂目の中に姿を消すことが、蜥蜴の行動を思ひ出さしめないと言へようか。グラヂワはこんなにして自らすばしこい小さい蜥蜴のやうなふるまひをしたと言へまいか。壁に裂目があるといふこの發見は、夢の顯在

との邂逅と同様に、前日のこの印象を代表してゐると私達は考へる。

冷靜な態度の下に、私達が未だ評價してゐない前日の經驗、即ち第三の旅館なるアルベルゴ・デル・ソレの發見が、夢の內容の中にどんな表出をとつたかを嗅ぎつけたいと考へる。作家はこの挿話を非常に詳細に取扱ひこの挿話にいろんなものを結びつけた。このために、若しこの挿話だけが夢形成に何の寄與もしなかつたとすれば、私達は却て驚嘆せねばならないのだ。ハノルドはのぼせ氣味になつたため、炭酸水を飮まうと思つてこの旅館にはひつた。この旅館は停車場から遠い邊鄙な場所にあるために、今日迄ハノルドに氣が附かなかつた。旅館の主人はいい魚がかかつたとばかりに、靑年に所藏の骨董品を吹聽し、フォルムの近傍で戀人の胸にしつかといだかれた姿のまま發掘されたといふ、ポンペイ娘の所持品と稱するブロオチを見せた。その話はハノルドもこれ迄に何度も耳にしたやうに思はれたが、今日は不思議な魅力の下に、彼にこの哀話の眞實、發掘物の本物を信ぜしめ、即座にブロオチを買ひとつて旅館を出た。その時彼はこの旅館の一つの窓に白い花の咲いてゐるけいびらんがコップの中にうなだれてゐる

のを見た。そしてこの花の姿は丁度今買ひもとめたばかりのブロオチが本物であるといふ證明のやうに思はれた。この綠色のブロオチはグラヂワの所持品である、グラヂワは戀人といだき合つたまま死んだあの娘であるといふ切實な信念が今や彼の脈管に波打つた。青年はこの時こみ上るなやましい嫉妬を、明日直接グラヂワにこのブロオチを見せて、今の疑念を確めようといふ決心でおし鎭めた。これは新しい妄想形成の奇怪なる一片である。そしてこのものの何の痕跡もその夜の夢に證明されないといふことがあらうか。

妄想のこの增殖の生成を理解し、新しい妄想の一片で置換された無意識的觀念の新しい一片を探るべく、十分なる努力のやり甲斐がある。この妄想は太陽館の主人の影響によつて發生した。ハノルドはこの主人に對して、まるで彼の暗示にかかつたやうに、驚くほど信じやすい態度に變つた。主人は彼に金屬製のブロオチを、本物だ、戀人の腕にしかといだかれたまま埋沒された姿で發掘されたあの娘の所持品だと吹聽した。その話が眞實かブロオチが本物かと疑ふだけの批判力を有してゐるべきハノルドが、何の躊躇もなしにその主人を信じ、誰が見ても贋物だといへるその骨董品を買ひとつてしまつた。どういふ譯で彼がそんな狀態にならねばなら

なかつたかは全然理解の下しようがない。旅館の主人の人品がこの謎を解いて呉れさうな見込もつかぬ。アルベルゴを出た時に彼はその旅館の窓にコップに活けたけいびらんを見た。そしてその花の中に買ひ求めたブロオチが本物であるといふ證明を發見した。どうしてそんなことがあり得たのか。この最後の敍述は容易にわれわれを氷解の幸福に導いて行つて呉れる。白い花は青年が正午にグラヂワに贈つたものと同じ花である。そしてこの旅館の窓の一つにその花を見て、あるものが確證されたのは全く正しい。確證されたものはブロオチが本物であるといふことでなく、その日迄まるで氣が附かなかつた「アルベルゴ」を發見した時に彼に明瞭になつたある他のことである。彼は既に前日にグラヂワとして現出した人物がどこに宿泊してゐるものかと、ポンペイの二軒の旅館を捜すやうな行動をとつた。今や思ひがけなく第三の旅館を見附けた時に、彼は無意識に於て「あの人はここに泊つてゐるのだ。」と言はなくてはならなかつた。そしてこの家を去らうとした時に、「僕が上げたけいびらんがちやんとあすこにある。あすこがあの人の部屋なのだ。」と言はなくてはならなかつた。これこそ妄想によつて置換され、意識になるを許されぬ新しい觀念であつた。何となれば、グラヂワが生きた娘であり、昔

に知り合つてゐた娘であるといふそれの前提は、意識になり得なかつたからである。
それでは、この新しい觀念が妄想によつて置換されるといふやうなことが、どうして行はれたのであるか。私はかう考へる。觀念に結合する確信の感情が、自らを主張する力を持つて、意識になり得ない觀念自體の代りに、思考關聯によつてその觀念に結合する他の觀念內容が進出する間、この確信の感情がずつと維持されてゐた。かやうにしてこの確信の感情は今や彼の目に眞實奇怪に見える內容と結びつきこの奇怪に見える內容は妄想の姿によつてそれ自體にとつて正當でない認知を贏ち得た。ハノルドはグラヂワがこの旅館に宿泊してゐるといふ確信をこの家から受けとつた他の印象に交付し、かやうな道程から、主人の話、ブロオチの本物、いだきあつた姿のまま發掘された男女の逸話を信ずるやうになつたが、この旅館で聞いたものをグラヂワと結びつけるといふ道程からのみ彼は信じやすくなつたのである。彼の胸を燃やす嫉妬の炎は、この材料を早速に利用し、かくて最初の夢と矛盾があるに拘らず、グラヂワは戀人の腕にいだかれたまま死んだあの娘である、自分が買ひ求めたブロオチはあの娘の所持品であるといふ妄想を成立せしめた。

グラヂワとの談話、「花を通して」の彼女のしとやかな求愛は、早くもハノルドの胸底に重大な變化をまき起したことに留意したい。男としての情慾の特徴、卽ちリビドの成分が彼の心によびさまされた。勿論それは未だ無意識的口實による假裝を必要としてゐた。併しこの一日中彼を惱ましたグラヂワの「肉體的性質」といふ問題が、生と死にさまよふグラヂワの特有な徘徊の意識的强調によつて、たとへ考古學にひきずりこまれるべき性質のものであつても、この問題が女子の肉體に對する青年のエロチックな好奇心から發してゐる事實を私達は否認することが出來ぬ。この嫉妬はハノルドが戀愛によびさまされた活動の一步進んだ表示である。彼はこの嫉妬をその翌日の娘との談話のまつぱじめに表現した。そして次に彼は新しい口實を借りて娘の肉體に觸れ、遠い過去で行つたやうに、彼女をたたくことを斷行した。

だが只今、作家の敍述から推論したやうな妄想形成の道程が、果してこれ以外の他の道程によつても許さるべきものであるか、あるひは一般に可能なものであるかと質問すべき時が來た。われわれの醫者としての知識から、この道程こそ確に正しい道である。恐らく一般に妄想なるものがそれの臨床的性質に屬すべき確乎たる承認を贏ち得た、唯一無二の道であると返答する

ことが出來る。患者が彼の妄想に確乎たる信念を有してゐるなら、さやうなことは患者の批判力が轉倒したために行はれたものでないし、妄想に於て誤謬であるものから發したものであり得ない。いや、あらゆる妄想の裏面に一粒の眞理が含まれてゐる。その妄想の中に眞劍に信ずべき價値のあるあるものが實在してゐる。そしてこれこそ患者が飽くまで正しと主張する確信の源泉である。併しこの妄想は長い間抑壓されてゐた。若しそれが歪められた姿を借りて遂に意識の中に闖入することに成功するなら、それに結合してゐる確信感情は恰も代償に於けるやうに過大になり、抑壓された妄想の歪みの代用にへばりつき、あらゆる批判的反駁に對してその代用を防衞する。確信は直ちに無意識的妄想からそれに結合する意識的謬見に轉移され、この轉移の結果としてそこに固着されるのである。ハノルドの最初の夢から發生した妄想の實例は、尤も同例といへぬが、かやうな轉移の類例に外ならない。妄想に於ける確信の今述べた發生のしかたは抑壓が行はれてゐない常態の場合に於ける確信形成のしかたと根本的には大した逕庭のないものだ。私達すべては眞と僞が結びついてゐる思考內容に確信をつなぎ、確信を眞から僞を越えてずつと擴大せしめる。確信は直ちに眞から、それと聯想でつながる僞を越えて

分化し、勿論妄想に於けるやうに不易ではないが、然るべき批判に對してこれを防衛する。聯想、防禦は常態心理學に於てさへそれ固有の價値を主張することが出來る。

只今もう一度夢に戻つてみたい。そして夢の二つの機緣を結びつける可なり興味深い小さい特徴に注目したい。グラヂワは赤い薔薇の對照として白いけいびらんを置いた。アルベルゴ・デル・ソレの窓に再びけいびらんを發見したことは、新しい妄想の中に表現されてゐるハノルドの無意識的觀念を示す重要なる證明になる。そして好感を與へたあの若い娘が胸につけた赤い薔薇は、無意識に於てその同伴者と彼女との關係を正しく評價さすやうにハノルドを援助し、そのために彼はその娘を夢の中で「女同僚」として表現せしむることが出來たとさらに附加せねばならぬ。

併し新しい妄想によつて置換されてゐるハノルドのあの發見の痕跡と代表、グラヂワがその父とボンペイの第三の邊鄙な旅館アルベルゴ・デル・ソレに宿泊してゐるといふ發見が、夢の顯在內容のどこに嗅ぎつけられるか。それは夢の中に大して歪められずにそのままの姿で現れてゐる。だが私はそれを指示するに躊躇する。と申すのは、じつと我慢をして私にここまでつ

いて來られた讀者の心に於てさへ、私の解釋の試みを聞いて烈しい反抗がまき起されるからである。ハノルドの發見は夢の內容の中にはつきり報告されてゐるともう一度申したい。併し非常に巧妙に隱蔽されてゐるために、それをつひ看過してしまふ。その發見は言葉のもぢり、兩義のうらに隱蔽されてゐる。「どこか太陽にグラヂワが坐つてゐた。」私達はこれをハノルドが動物學者なる彼女の父に遇つた場所に正しく結びつけた。併しそれはまた「太陽」に、アルベルゴ・デル・ソレ、卽ち太陽館にグラヂワが宿泊してゐることを意味さすことが出來ないものだらうか。

ツオエの父との邂逅に關聯してゐない「どこか」といふ言葉は、グラヂワの滯在に關するある報告に導くといふ理由のために欺瞞的に不定に響かないか。本當の夢を解釋したこれ迄の經驗から私は兩義をかやうな風に理解することに自信を持つてゐるが、わが作家がこの點に關して私に强力な援助を惠んで吳れないため、解釋のこの一片をわが讀者に敢てお目にかける元氣が出ないのである。翌日彼がブロオチを見せた時に、娘の口から現に私達がこの夢內容の解釋に假定した同一の言葉のもぢりが發せらた。「あんたは太陽でそれをお見附けになつたのでせ

うね。太陽はそのやうな美術品のいろんなものを持ち出して來ますわ。」そしてハノルドがこの言葉を解しないために、娘はそれがこの土地で「ソレ」と呼ばれてゐる太陽館の意味であり、その家の贋物の骨董品は私もよく知つてゐると彼に說明する。

そして今や私達はハノルドのこの馬鹿馬鹿しい夢を、その夢の裏面に隱蔽されてゐる、その夢とは似ても似つかぬ無意識的思考によつて置き換へようと敢て試みたくなる。「彼女は父と太陽に住んでゐる。どうして彼女は私にそんな言葉のもぢりを弄したのか。私を揶揄ふ積りなのか。彼女が私を愛して私を夫にしようとの心組だといふことはあり得べきことだらうか。」──この可能性に對して睡眠中にこの夢に次いで否定の聲が叫ばれる。「これはあまり氣違ひじみてゐる。」この叫びは全顯在夢にさしむけられてゐるやうに見える。

批判力に富んだ讀者は今や未だ明瞭にされてゐないこの挿句、グラヂワによる揶揄に關聯するこの挿句の由來を追求する權利を主張してもよい。この「夢判斷」に次の返答が與へられる。夢の思考の中に嘲弄、冷笑、あるひは悲痛な矛盾が起る時は、それは顯在夢中の馬鹿らしい姿、夢に於ける妄誕によつて表現される。從つて妄誕は心的活動の痲痺を意味してゐない。それは

この仕事が利用した描寫手段の一つであると言へる。特別難解な箇所に來るときまつたやうに作家が私達を援助して吳れる。この馬鹿らしい夢はこの上に鳥が嘲笑するやうな叫びを發し、蜥蜴を嘴にくはへて飛び去るといふ短い餘興を持つてゐる。ところがハノルドは嘗てグラヂワの姿がかき消えたあとでそのやうな嘲笑するやうな叫びを耳にしたことがある。その聲は黃泉の人間の役目を演じてゐる自分の鬱陶しい鹿爪らしさをこの笑ひで拂ひ落としたツォエの口から實際發せられたのだ。グラヂワは本當に青年を嘲笑したのである。併し鳥が蜥蜴を嘴にくはへて飛び去るといふこの光景は、ベルヱデレのアポロがカピトリンのヴィナスを運んで行くといふ前の夢に於ける別のものを想起せしめる。

恐らく多數の讀者は蜥蜴捕獲の光景を求愛の觀念に飜譯するのはどうもこじつけだといふ印象をお受けになるだらう。併しこの飜譯を援助するやうな證據がちやんと手許にある。卽ちあの女同僚との談話の中で、ハノルドの思考がツォエから洞察すると同じものをツォエ自らが告白してゐる。ポンペイで何か面白いものを「發掘」出來る自信があつたとツォエは語る。ツォエはこの言葉をもつて青年が蜥蜴捕獲の比喩をもつて動物學の觀念圈にはひつたやうに、考古

學の觀念圈にはひつたのである。恰も二つの觀念圈は相互に對立し、一方は他方の特性を採用しようとしてゐるやうに見える。

以上のやうに私達はまたこの第二の夢の解釋をも完成したのだ。夢見る人は彼が意識的思考に於て忘却してゐるすべてを彼の無意識的思考に於て知つてゐる、前者に於て妄想的に見誤まるすべてを後者に於て正しく判斷する。かういふ前提の下に、二つの夢は私達の理解に屆くやうになる。

この事實に關聯して私達は多くの主張を試みなければならなかつた。その主張は奇怪なるが故に讀者に奇怪に響き、私達が勝手に發明した意味を作家の意味だと押賣りするといふ疑惑を幾度も讀者にまき起したやうである。私達はこの疑惑を消散さすためにこれ迄出來るだけのことをやつた積りである。そしてこの理由から、最も嫌疑を受けやすい點の一つ――例へば「どこか太陽でグラヂヷが坐つてゐる。」といふやうな兩義の言葉と談話の利用を意味してゐる――を詳細に論じたいと思ふ。

作家がこの二人の主要人物の口に二重の意味の籠められた言葉を何度ものぼさせたことは、

「グラヂワ」のどの讀者にも目につきやすいことである。ハノルドにとつてはこれ等の言葉は一つの意味を目指してゐるが、彼の相手なるグラヂワの方はそれ等の言葉の他の意味を使用してゐる。例へば青年は彼女の初めての返答のあとで「あんたの聲には憶えがある。」と叫んだ。その時未だ事情を知らないツォエは青年が彼女の話すのを未だ耳にしたことがない筈だから、そんなことがどうして可能かと質問しなければならなかつた。第二回の會見に於て、青年が一目であんたといふことが分かつたと斷言した時に、娘は一瞬彼の妄想に面喰つた。ツォエはこの言葉を子供時代に溯る二人の相識の認知として、彼の意識に對して正しい意味に解しなければならなかつたが、青年の方は勿論自分の言葉のこんな意味をまるで知らずに、彼を支配する妄想との關聯によつてのみその言葉を口に出したのである。これに反して娘の言葉はわざと兩義を籠めて語られてゐる。そしてこの娘の人物の中に精神の最も明るい清澄が妄想に對立してゐる。それの一つの意味はハノルドの意識的理解に滲み込むことの出來るために彼の妄想にあてはまり、それの他の意味は妄想を超越して、それの背面にある無意識的眞實にその妄想を翻譯して呉れてゐる。妄想と眞實を同一の表現中に描寫出來るのは實に機智の勝利である。

かやうな兩義がツォエの言葉の中に滲透してゐる。その言葉で彼女は女友達にその情況を說明し、同時に彼女の邪魔なお相手を遠のけた。それは新婚の女同僚に對してよりむしろわれわれ讀者を算入して書物から述べられたのである。ハノルドとの談話に於て、私達がハノルドの最初の夢で追求した象徵、埋沒と抑壓、ポンペイと子供時代の對照をツォエが利用することによつて、この兩義が專ら作られてゐる。かやうにして彼女はその談話をもつて、一方にあつてはハノルドの妄想が振り當てた役割を持續することが出來、他方にあつては現實の關係に觸れ、ハノルドの無意識の中にその關係の知識をよびさますことが出來る。「あたしは長い間死んでゐることに馴れ切つてゐます。」(グラヂワ、九十頁。)――「あんたの手から忘れた花をいただく方が似つかはしうございますわ。」(グラヂワ、九十頁。)かういふ言葉の中に、彼女が青年をアルケオプテリックスに譬へたあの最後のお說教の中にはつきり姿を見せた批難の聲が婉曲に語られてゐる。「人間は再び甦へるためには死ななくてはなりません。でも考古學者にとつてはそれは當然必要でございませう。」(グラヂワ、百四十一頁。)と彼女は青年の妄想の消失のあとで私達に兩義の言葉への鍵を與へるためのやうに言ひ續ける。併し象徵の最も美しい利

用は「あたし達二人は二千年の昔にかうして一緒にパンを喰べたやうな氣がいたします。あんたはお思ひ出しになりませんの。」といふ彼女の質問の中に實事に成就した。その言葉の中に子供時代の歴史的古代によつての置換、子供時代の回想をよびさまさうとする努力がはつきり現れてゐる。

ではグラヂヷに於ける兩義の言葉のこの巧みな選擇がどこから來てゐるのか。それは偶然とは思はれない。むしろ物語の前提から發した必然の結果である。言葉そのものが症候であり、症候と同じに意識と無意識の妥協から發する限り、それは症候の二重の決定力への對照物に外ならない。併しかやうな兩義の起原は行動よりは談話に就いてたやすく氣が附く。そして談話の材料の柔靭性がしばしば可能ならしめるやうに、言葉の同一の配置の中に言葉の二つの意向のおのおのをうまく表現することに成功するなら、私達が「兩義」と稱するものが出來上るのである。

妄想若くはこれに類似した疾患の精神療法中に、私達はしばしば患者に於てかやうな兩義の談話を一過性の新しい症候として發展せしめ、自らもかやうな兩義を利用するといふ立場に來

ることが出來る。かやうにして私達は患者の意識に適當する意味をもつて、しばしば患者の無意識にあてはまる意味に對する理解を刺激することが出來る。私が經驗から知つたやうに、素人の間では兩義のかやうな割り當は非常な抗議をよびおこし、途方もない誤解をまきおこすのを常とするものだが、わが夢形成と妄想形成に於ける過程の特異なる要點をその作品の中に描出するにあたつて、わが作家は少くとも正しい進路をとつたのであつた。

四

既に申したやうに、醫者としてのツオエの登場と共に私達の心に新しい興味が喚起される。彼女がハノルドに施したやうな治療が果して理窟に合つたものかどうか、あるひは一般に可能なものかどうか、わが作家が果して妄想の發生の條件と等しく妄想の消失の條件を正しく觀察したかどうかを知りたいものだと私達は緊張する。

疑ひもなく丁度只今私達に一つの意見が丒向つてくる。その意見によると、作家が述べたやうなお話にはさやうな原則的興味はあてはまらない、説明を要するやうな問題はその中に一つだつて認められないと。妄想の對象、即ち架空のグラヂワが青年の陳述のすべてが誤謬であることを說得せしめ、例へば彼女がどうして彼の名前を知つてゐるかといふ謎のすべてに、最も

自然な說明を與へたあとで、自らの妄想を解體することだけがハノルドに殘された。これをもつて事件は論理的に落着したのだ。併し娘はこの際に自らの戀を告白した故に、作家は察するところ婦人讀者を喜ばす目的で別の點で興味深いこの小說を、世にありふれたハッピイ・エンド、二人の結婚で終らしめた。この靑年考古學者が自分の誤謬を說得されたあとで、丁寧に頭を下げて若い令孃と別離をとり、彼女の戀を斷然と拒否し、やつぱり靑銅や大理石の古代の女、手にはひるならそれ等の原作に熱烈な興味をなげこんで、現代の血もあり肉もある娘達に無頓着であるといふ別の大詰の方がもつと論理的でありもつと可能なことであつたらう。作家はこの考古學的夢幻劇を勝手に戀物語に結びつけたのである。

かやうな見解を先づ不可能だと卻けて、私達がハノルドの心に起つた變化を妄想の消滅にのみ歸せしめないところに留意したい。同時に妄想の崩壞する前にさへ、彼の心に戀愛欲求のめざめが明かに存してゐる。その戀愛欲求は妄想を追拂つて吳れたその娘への求愛に終つてゐる。抑壓された戀愛のあこがれが彼の心にあの最初の夢を作つて以來、愛人の肉體への好奇心、嫉妬、野性な男らしい征服心が、いかなる口實といかなる變裝の下に、その妄想の最中に彼に現

れたかを既に私達は知つてゐる。グラヂワと第二回目に談話をかはしたその晩に、一人の生きた女が初めて彼に好感を與へたといふ事實をさらに證據としたい。もつともその女を花嫁と考へないところに、彼は新婚旅行の男女に對する以前の憎惡に未だ讓步を示してゐる。ところがその翌日の正午に偶然彼は、兄と妹と思ひこんでゐた二人が愛情をかはしてゐる生きた證據を目擊した。そしてまるで神聖な儀禮の邪魔をしたやうに彼はそつと知られないやうに步を轉じた。「アウグストとグレエテ」に對する以前の蔑視の念は忘却されて、戀愛生活に對する尊敬の念が彼の心に復活した。

かくて作家は妄想の恢復と戀愛欲求の復活を密接に結びつけ、求愛への終結を必然的なものとして用意した。作家は彼の批評家よりもつと立派に妄想の本質を知つてゐる。作家は戀のあこがれの成分は抵抗の成分と結合して妄想を發生せしめるものだといふことを知つてゐる。そして作家は治療を施した娘をしてハノルドの妄想の中から自分に好ましき成分を洞察せしめた。この洞察のみが彼女を治療に專心たらしめたのだ。青年から愛されてゐるといふ確信のみが、彼に自分の戀を告白さすやうに驅りやつたのである。青年が內部から釋放出來なかつた、抑壓

された回想を、外部から再び彼に回復さしてやつたといふのが治療の核心である。若しこの女治療家がこの際感情なるものを考量しなかつたなら、治療は何の奏效も呈しなかつただらう。そして妄想の飜譯は結局「ごらんなさい。あんたがあたしを愛してゐるといふことが結局すべてを意味してゐますわ。」とはならなかつただらう。

作家がツォエをしてその幼友達の妄想の治療を行はしめた操作は、一千八百九十五年にブロイエル博士と筆者が醫學に紹介した治療法と非常に酷似してゐる。いや、その本質に於て兩者は完全に一致してゐる。爾來筆者はその治療法の大成に精進してゐる。ブロイエルが最初「淨化法」と名附け、筆者が好んで「精神分析法」と命名するこの治療法は、ハノルドの妄想と同じやうな疾患に罹つてゐる患者に於て、無意識の抑壓にやんでゐるため、その無意識をある程度無理やりに、丁度グラヂワが二人の子供時代の關係に對する抑壓された回想に行つたと全く同じに、意識にひつぱつてくるところに存してゐる。確にグラヂワにとつてはこの使命の遂行は醫者よりはずつとたやすいものだ。彼女はこの點においていろんな方角から見て理想的と名附けてもよい立場にある。醫者といふものは患者の心をまつぱじめに透視出來ぬし、患者の無

意識に何が動いてゐるかを意識的回想として知つてゐないから、この不利を補ふために、複雜な術式を借らねばならぬ。醫者は患者の意識的聯想と陳述から、患者に於ける抑壓されたものを確實に摑まへ、若し患者の意識的陳述や行動の裏に姿を見せる場合は、無意識を推測することを學ばなくてはならぬ。次いで患者は物語の大詰に於てノルベルト・ハノルドが「グラヂワ」の名前を「ベルトガング」と逆に飜譯して自ら理解したと全く同じことをやる。疾患がそれの起原に溯られて行くうちに疾患そのものは消失してしまふ。從つて分析は同時に治癒を齎す。

併しグラヂワの行つた操作と精神療法の分析方法の二つの類似は、抑壓されたものを意識化することと、說明と治癒が合致することの二點に限極されてない。兩者の類似は全變化の本質的なものとして姿を見せるもの、卽ち感情の覺醒に迄及んでゐる。私達が科學にあつて精神神經症と呼び習はしてゐる、ハノルドの妄想と類似のすべての疾患は、その前提として、衝動生活、大膽な言葉を用ひば、性衝動の一部の抑壓を持つてゐる。そして無意識裡へ抑壓された病原を意識にひきもどすすべての試みに於て、その衝動成分が必然それを抑壓する權力と、しばしば烈しい反應現象の下で最後の決戰を交へるために新しい鬪爭を開始する。私達が性衝動の

千差萬別なすべての成分を「戀愛」に總括するならば、戀愛の再發の中に恢復の過程が行はれる。そしてこの再發は不可避的なものなのである。何となれば、治療を行ふべき對象である症候は、以前の抑壓闘爭若くは回歸闘爭から出來た沈澱物に外ならないからである。そして症候は同じ情熱の新しい滿潮によつてのみ解決され除去され得るのである。あらゆる精神分析療法は症候の中へ妥協といふみじめな逃道を見附けた、抑壓された戀愛を解放してやる試みである。然り。分析的精神療法に於てさへ再發した情熱は、それが愛であらうが憎しみであらうが、いつでもその對象に醫者といふ人物を選擇すると附言する時は、作家がグラヂワに於て敍述した治療過程の一致は高潮に達するであらう。

勿論グラヂワの取扱つた實例は醫者の技術をもつても及ばぬほどの理想の例だといふ相違が現れる。グラヂワは無意識から意識に闖入した戀愛に酬いることが出來る。醫者はそんなことは出來ない。グラヂワ自らが以前の抑壓された戀愛の對象である。釋放された戀愛追求に對して彼女といふ人物は直ちに望むべき目標となる。醫者は赤の他人であり、全治した後も患者に對してやつぱり他人であるやうに努めねばならぬ。醫者は全治した患者達に彼等が再び贏ち得

た戀愛力を實生活に於ていかやうに使用すべきかをしばしば意見することを知らぬ。作家が私達に描いて呉れた戀愛治療の典型に多少の效果をあげて近接するために、いかなる彌縫策、いかなる代用品を借るべきかを指示することは、當面の問題からあまりにかけ離れることになる。

併し只今最後の疑問が殘つてゐる。私達は旣に幾度もその疑問に答へる機會を失してゐた。抑壓、妄想及びそれに近似した疾患の發生、夢の形成と夢の解釋、かやうな疾患に於ける戀愛生活の役割と治療のしかたに關する私達の見解は、決して科學の共有財產と承認されてない。ましで敎養ある人士の愉快な所有物と申せない。眞實の病史の如くに私達に分解出來るやうに作家をして、その「夢幻劇」を創造せしめ得た洞察が知識の一種であるなら、この知識を作家がどうして贏ち得たかを聞きたくなる。本書の發端で說明したやうに、「グラヂヷ」の中の夢及びその夢の可能なる解釋に興味を懷いた人達の中の一人が、直接作家に會つて、あなたは科學に於けるものとそんなに酷似した理論をどうしてお知りになつたのですかと質問した。作家は私達が豫期したやうに知らないと返答しおまけに幾分ぶつきら棒であつた。彼の空想が彼の心に「グラヂヷ」を暗示し、彼はそのグラヂヷに於て歡喜を持つた。彼女の氣に入らない人は彼

女をそのままにしておくがよい。作家は彼女がどれ程讀者のお氣に召すかをあてこんでゐない。

作家の拒絶がそれだけにとどまらないだらうと容易に想像することが出來る。作家の從つたものだと私達が立證した規則の知識を彼は恐らく否認し、私達が彼の作品で認めたすべての意向を否定するだらう。私はこれを信じ難きものとは考へない。併し一つの場合のみが許される。一見意味もない藝術品にその作家がまるで頭に考へてゐない傾向をおしつけることによつて、私達は解釋の眞の漫畫をお目にかけ、これによつて、人が搜してゐるもの、人が滿たされてゐるものを見附けることがいかにたやすいかを再び立證した。かやうな可能は文學史上の中で最も怪奇な實例が記載してゐる。すべての讀者は只今作家が果してこんな解釋を承認するかどうかを自ら勝手にお極めになつてよい。勿論私達は未だ殘されてゐる他の見解を固持する。作家はかやうな規則や意向を何もわざわざ知る必要はない、知らないこそ作家はそんなものをきつぱり否定出來るのだ。だが私達とてその作品に含まれてゐるより以外のものを一つも發見してゐないと考へてゐる。私達は少くとも同一の源泉から創作し同じ題材を取扱ふ。併し私達めいめいの手にする方法は違つてゐる。そして出來上つた成績がぴつたり一致するのは、二人が正

しい道を歩んだ證據なのである。私達の操作は法則を推測し、かういふ法則だと世間に發表する目的に、他人の異常な精神過程を意識的に觀察するところに存する。これに反して作家は違つた道を行く。彼は自らの精神の無意識に注意を注ぎ、その無意識の發展可能を傾聽し、意識的批判でもつて抑壓する代りに、無意識に藝術的表現を與へてやる。かやうにして作家は私達が他人に就いて學ぶもの、この無意識の活動がいかなる法則に從はねばならぬかを自らに就いて知るのである。併し作家はこの法則をわざわざ世間に發表しなくてもよい。この法則を別に明確に認識する必要はない。その法則は彼の知識の忍耐をもつて彼の創作の中に具象的なる形態の下に保存されてゐる。私達が法則を生きた疾患の病例から摑み出すやうに、この法則を彼の作品の分析から發展さす。だが二人とも、醫者も作家も、無意識を同じやうに誤解したか、二人とも無意識を正しく理解したかといふ結論は反駁の餘地のない程明白に見える。かやうな結論は私達にとつて非常に貴重である。エンセンの「グラヂワ」に於ける妄想形成と妄想治癒の描寫、及び夢を醫學的精神分析の方法で研究することは、このためにこそ私達の努力に價するのである。

いよいよ最後に到達した。だが注意深い讀者は私達に警告して下さるだらう。私達は本書の劈頭にあたつて夢は願望を實現された姿で描寫すること、それを立證する責任は私達にあると申した。只今私達は讀者の警告に返答しよう。私達の詳論から夢が願望實現であるといふ公式を、私達が夢に下した說明に適用さすことがいかに正しくないかを示すことが出來た。併しその主張は飽く迄も正當である。そしてそれはグラヂワの夢に就いてもたやすく立證出來る。夢の潛在思考――今日それが何を意味するかを知つてゐる――は千差萬別な種類のものであり得る。グラヂワにあつてはそれは晝の殘物であり、覺醒の精神衝動から承認されず解決されずに殘された思考である。併し晝の殘物から夢が發生するためには、一つの願望――一般に無意識的願望――の協力を必要とする。この願望こそ夢形式の原動力となる。晝の殘物はその原動力に材料を提供する。ノルベルト・ハノルドの第一の夢にあつては夢を作るために二つの願望が相互に競爭してゐる。一方は自ら意識になり得るもの、他方は當然無意識に屬し抑壓のために活動的になつたものである。前者はこの考古學者の意識してゐる願望、西曆七十九年のあの大慘事を目擊したいといふ願望である。この願望を夢の方法以外で實現しようと思へば、考古學

者にどれだけ莫大な犧牲を必要とさすであらう。後者の願望と夢の形成者は、愛人が寢ようと横たはる時に側にありたいといふ、エロチックな性質のものである。人はそれを露骨な若くは不全な表現で發表することが出來たらうに、これを拒否したために夢が惡夢になつた。第二の夢に於ける中心の願望はあまり著明でないが、一度私達がそれの飜譯を思ひ浮べる時は、その願望もまたエロチックなものと斷言するに憚らない。蜥蜴捕獲の狀況の裏面に構成されてゐるやうに、戀人に捕獲されたい、戀人に屈服されて跪きたいといふ願望は事實受動的なマゾホ風の特徴である。その翌日夢見た人は恰もそれと正反對のエロチックな潮流に支配されてゐたかのやうに戀人をたたいた。併しここで筆を擱かねばならぬ。これ以上進めば私達はハノルドよグラヂワが單に作家の架空人物であることを全然忘れてゐることになる。

第二版の補遺

この研究を發表してから五年の月日が流れた。その間に精神分析研究はなほ別の目的を懷いて作家の作品に肉迫しようと努めた。精神分析研究は作品の中に、詩的ならざる神經症的人間の發見の證據のみを求めてゐるのでなく、作家が印象と回想のいかなる材料をもつて作品を構成したか、この材料を作品の中に、いかなる方法をもつて、いかなる過程によつて挿入したかを知りたいと望んだ。

純眞な創作欲に驅られて自らを空想の情熱に放任してしまふやうな作家、例へばエンセン（一千九百十一年死去）に就いてかやうな疑問は最も手早く答へられることが分かつた。私がグラヂワの分析研究を發表して間もなく、この老齡の小說家に一つ精神分析研究のこの新しい問題に興味を懷いて貰ふやうに試みた。併し彼はその協力を拒否した。

ある友人がそれ以來この作家の二つの別種の小說に私の注意を向けて吳れた。その小說は戀愛生活の同一問題を詩的に滿足な方法で解決しようとする豫備硏究、あるひは前期の努力として、發生的に「グラヂワ」に關聯してゐるものであつた。初めの小說は「赤い日傘」といふ表題で、無數の小さい趣向の再來のために私達に「グラヂワ」を思ひ起さしめるものである。例へば白い墓場の花、忘れた物品（「グラヂワ」のスケッチ・ブック）、意味深長な小さい動物（グラヂワに於ける蝶蝶と蜥蜴）、就中作の中心の場面たる、夏の眞晝に於ける死んだ、あるひは死んだと信じ切つた娘の現出。妖怪の現れる場面は「赤い日傘」の物語では荒廢した城跡であるが、グラヂワでは發掘されたポンペイの廢墟となつてゐる。

もう一つの小說「ゴチック式の家」はそれの顯在內容に於ては「グラヂワ」とも「赤い日傘」ともあまり合致したところがないが、これ等三つの小說を合本にして一つの表題をつけたところから考へると、それの潛在した意味は明白に前者と關聯してゐるやうである。（巨大なる力。ギルヘルム・エンセン、第二小說集。伯林、エミル・フエルベル、一千八百九十二年。）三つの小說が同一のテエマ、少年時代の親しい、姉妹のやうな友達の餘韻から發した戀（「赤い日

傘」では戀の抑制）の發展を取扱つてゐることはたやすく看破出來る。

私はエワ・グレフィン・バウヂッシンの短評（一千九百十二年一月十一日の維納新聞「ヂィツァイト」に於て）からエンセンの最近の小說（「人間の中の外來者」）が作家自らの少年時代を澤山材料にして、「戀人の中に妹を見出す」男の運命を敍述してあることを知つた。足を垂直にする世にも美しい步み方といふ「グラヂワ」の中心趣向に就いては、前期の二つの小說の中にその痕跡が發見出來ぬ。

エンセンが羅馬時代のものとした、「グラヂワ」と名附けたあの步行する娘の浮彫は、實際希臘美術の精華に屬してゐる。それはワチカン・ムセオ・キヤラモンチに第六百四十四號として保存されてゐる。そしてハウゼル（墺太利考古學會年報、第六卷、第一號に於ける新アッチカ風の浮彫のヂシエクタ・メンブラ。）はそれに關して補遺と解釋を加へてゐる。フイレンツエとミユンヘンにある浮彫の斷片と「グラヂワ」の浮彫を繼ぎ合はせると、三人の姿を描いた二つの浮彫板であることが分かる。その二人の姿は植物の女神なるホオレンとそれと密接な生殖の神なるタウスと認めてもよい。（終）

藝術と精神分析

昭和四年六月十五日印刷
昭和四年六月十八日發行

藝術と精神分析
定價一圓八十錢

著作者 安田德太郎

發行者 東京市本郷區湯島切通坂町一九
代表 中條登志雄

印刷者 東京市牛込區山吹町一九八
萩原芳雄

發行所 東京市本郷區湯島切通坂町一九
ロゴス書院
振替東京一〇三一九番

藝術と精神分析
フロイト原著
安田徳太郎譯

藝術と精神分析
フロイド原著
安田徳太郎譯